

---

# どんと恋

霧野ミコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どんと恋

### 【Nコード】

N9976C

### 【作者名】

霧野ミコト

### 【あらすじ】

「美形なんて死にさせ！！どいつもこいつも見た目だけか！！」そんな怒号と破壊音から始まった。安穏染みた不協和音だらけの生活から動き始めた。狂想曲のような狂った速度で動き始めた。行きついた先の僕はどくなるのだろうか。何を求めるのだろうか。それさえ、分からず動き出す。狂狂　くるくる　と「いや、そんなたいそれた展開じゃないしょうが」「そりやそうだ」「ただの頭の痛いコメディーね」

## プロローグ

少女はいわゆる美形、というものが嫌いだった。

もちろん、綺麗なお人形と、毛並みの綺麗な動物なんかは好きだ。ただ、人間に関して言うと、美形と言うものを見るたびに、恐ろしいほどまでの嫌悪感があった。

その原因は、全て、家族。

というか、ぶっちゃけ姉だった。

少女の家系は、古くから伝わる武家の一族で、それはそうとう裕福な家庭であった。

そして、お金持ちにはありがちに、それはたいそう美形な両親がいて、自分を含め、家族全てが全員美形だと言う一般庶民が聞いたら、とりあえず、嫉妬で殺せてしまふんじゃないかと危惧するぐらい恵まれていた。

そして、美形にありがちに、傲慢だった。

というか、単にわがままだった。

とりあえず、彼女の姉は、自分の美貌をいい事に、群がる男子を下僕のように使いまわした。

その姿を見て育った少女は、それだけで十分ダメージはあった。けれど、それだけだったら、まだ嫌悪感を抱くまではいかなかっただろう。

お金持ちの美人とはそういうものなのだ。

そう思い込んで、自分もそれに倣っていただろう。

しかし、そうならなかったのは、彼女に群がる美形たちのせいだった。

とりあえず、幼少の時から如何なくその美貌を振りまいて、男性陣を籠絡していた彼女である、当然もてる。

もちろん、美形たちも、我先にと飛びつく。

しかし、その口説き文句がいけなかった。

いや、彼女がおかしかったただけなのかもしれないが、どちらにしろその口説き文句が原因だった。

『ふっ、俺のような男には、君のような人じゃないとダメなんだ』

『僕と同じレベルの美しさを持つ君は、僕といるべきだ』

『君の美しさは、私の美しさを更に磨かせてくれるだろう、一緒にいてくれないか』

などと、とりあえず、頭がとち狂っているとは思えない口説き文句を堂々と吐き続けたのだ。

確かに、言わんとしていることは分からないでもないが、あまりにもお粗末。

ナルシストにも程がある。

しかも、それが延々と続くのだ。

彼女が嫌いになっても仕方がない。

中学にあがる頃には、美形を見るのでさえ嫌になった。

当然、美人である自分の事も大嫌い。

いつそのこと整形して、ぐちゃぐちゃにしてやろうかとも思ったが、うまいいいわけが浮かばないのでやめておいた。

両親共々、整形には反対派だからだ。

とはいえ、唯一の救いは美形万歳、じゃないところだけだろう。

まあ、もちろん、本音は美形に越したことはない、ということだろうが。

なんにせよ、整形も出来ない彼女は、当然美形のまま。

最後のあがきとお手入れも適当、化粧もしないし、身だしなみも整えない。

そうしようとしたが、あっさり邪魔が入って、美形のまま。

武家の御嬢様としての嗜みを冒瀆する、とのことで、これまた、両親に却下されてしまったのだ。

ある意味不遇と言えば不遇なのかもしれない。

もちろん、一般庶民にしてみれば、おそろしく贅沢な悩みなのだが、知らぬは本人ばかりなり。

そんな悩みを持つ少女がいた、そんなある日のある場所。

細かくは、高校二年生の文化祭ちょうど一月前の放課後の学校の第二教棟の校舎裏であるが。

そこで、とある少女は、一人の少年に出会う。

それは、そのとある少女にとって運命的な出会いとなる……

といいな、と思ったりする、そんな少女の以外と少女趣味な思いから出来上がった物語である。

## 第一話 変革への序曲

「ごめんなさい。貴方と付き合う事なんて考えられません」  
声が聞こえた。

鈴の音のような凜とした澄んだ声。

もちろん、声の主は分かる。

まあ、この学校では割かし有名な人だ。

美人で成績優秀な御嬢様。

これで、有名にならないほうがおかしい。

もちろん、僕も憧れてたりするけど。

いや、やっぱり、美人は世界の宝だ。

美人は三日経てば飽きると言うけど、あれは嘘だな。

もう一年以上見てきた人間としては、飽きたことはない。

何度見ても、美人はいい。

それが、いつも一緒にいると言うんだ。

素敵な事じゃないか。

とはいえ、だからと言って、告白するつもりは毛頭ない。

残念ながら、僕には特攻魂なんてない。

神風特攻隊の事を素直に尊敬はしているが、真似は出来ないのだ。

悲しいかな、現代っ子。

そんな強い心なんて持っていないんです。

まあ、それ以前に、彼女には、もう一つ有名な噂があるんだけど  
も。

とはいえ、別にたいした噂じゃない。

これも、ある意味、ありきたりと言うっちゃあ、なんだが、彼女は今まで一度として、告白を受けて、オーケーを出した事がない。

とりあえず、一度もない。

それが、どんなイケメンだろうと。

まあ、彼女自身よく言っている事らしいのだが、

『美形なんて死ねばいいのに』

とまあ、自分の姿を棚に上げて、恐ろしい事を言っていたらしいのだ。

とはいえ、自分の容姿も気に食わないらしいので、ある意味筋は通っているんだろうけど、開けっぴろげすぎて、それを嫌っている人もいる。

まあ、有名税って奴だ。

なので、基本、イケメンは却下される。

だからと言って、量産型凡庸男子が特攻をしかけても、あっさり負ける。

というわけで、ただいま連勝記録を大幅に更新中。

なんにせよ、すごい事だ。

ちなみに、なんで、僕がそんな事を知っているのか、と言うと……

実は、僕と彼女は幼馴染なのだ！！

そして、昔、結婚の約束をしたのだ！！

……というくだらないルートはなくて、単なる偶然。

いや、偶然と言うか必然なんだろうけど。

とりあえず、今いるのは、あれだ。

第二教棟の校舎裏。

で、校舎裏と言えば、人通りが少ない。

というわけで、導き出される結果として、とりあえず人には見られたくない痴情を行う場所である。

まあ、基本は告白だが、たまに、いたいけな少年には、少々刺激の激しい情事が行われているときもある。

キスだが。

もし、あらぬ事を考えていた人がいたなら、教えてあげよう。

いくら、人通りが少なくても、それなりに人目はある。

隠れてこそキスぐらいならできるだろうが、それ以上の事なんて、できるわけがない。

もし、そんな事が出来ると考えていたなら、それはゲームのやりす

ぎだ。

もう少し、現実と妄想の区別をつけてもらいたい。と、話がそれてきたが、そんな痴情が行われている場所に、なぜ僕がいるのかと言うと、簡単な話しだ。

とりあえず、静かな場所が好きなので、ここに退避しに来ているのだ。

さつさと家に帰ればいいと言われるかもしれないが、これが残念な話し、実は僕は電車通学なのだ。

しかも、運の悪い事に、たいして栄えていない街である、電車なんてものは、一時間に一本しか通っていない。

そして、そこで、導きだされる答えは、一つ。

電車が来るまで待っている、というわけだ。

ちなみに、駅は、学校のすぐ傍だ。

利便性を考えてくれてありがとう、学校。

などと、しみじみと思ったことも何度もある。

ただ、近すぎるが故に、暇つぶしが出来ない。

まあ、教室やらにいればいいんだらうけど、わびしいかな、僕には友人がいない。

いや、いないわけじゃないんだけど、バカして盛り上がれる友人がいないのだ。

それ以前に、バカ騒ぎを毎日するのが好きじゃない、というのもあるんだが。

やはり、バカ騒ぎは、たまに、に限る。

そんなわけで、こうして、退避しているんだが、いつもいつもいるせいで、こうした痴情を見えちゃうわけだ。

もちろん、堂々といたらばれるから、隠れている。

とはいえ、それも、運良く見つけた、隠れ家なわけだけだ。

それは、僕が入学してすぐの時だった。

とりあえず、安息を求めた僕は、静かに慣れる場所を探した。

すると、そこには、なんと……



秘密の入り口があったのだ。

まあ、実際は備品置き場かなんかだろうけど、それなりに広いスペースがあったので、そこを秘密基地としている。

小さいながらも窓があるから、換気も出来るし、蛍光灯もある。退避するぐらいにはちょうどいい。

実際、お昼もたまにここで取っている。

もちろん、ドアが付いてるから外からは、何がいるのかなんて分かんないし、元々付いていなかった鍵も僕が付けたので、あけられる心配もない。

まあ、そこらへんで適当に買った安い錠前みたいな奴をつけているだけだから、力づくでやられたら壊れてしまっただろうが。

でも、そんな事をする奴はいないから、大丈夫。

卒業まで安穩とした生活を……

どがしやああああ！！

不意に破壊音が聞こえた。

すぐ傍で。

「美形なんて死にさせ！！どいつもこいつも見た目だけか！！」  
ついでに、そんな絶叫が聞こえる。

しかも、いつも以上に大音量で。

「ああ、もしかして、僕の安穩な生活も、これでおしまい？」

現実逃避を試みるという選択肢もあったけど、やめておいた。  
状況が余計に悪化するだけのようだし。

さて、どうしたものか。

とはいえ、やることは一つしかないわけだが。

部屋の隅で家から持ってきたタオルケットで自分の身体を包んで震えることだ。

とりあえず、へたれと思った人間がいたら教えてあげよう。

女と言う生き物は……

化け物なんだよ。

それ以上でも、それ以下でもないんだよ。

いや、化け物以上はあるかもしれないが。

まあ、なんにしても、恐ろしい生き物なんだよ、女は。

だから、見つからないように隠れておくしかないわけだ。

「あんた、そんなところで何やってるのよ」

で、速攻で見つかってしまった。

まあ、覚悟はしてたけど。

ここ、狭いし。

「ふーん、そう、分かったわ。ここで、あんた覗いてたわけだ。変態ね」

しかも、聡明な彼女。

あっさり、状況を把握してしまったようだ。

しかし、凹む。

変態だなんて。

好きで覗いてたわけじゃないのに。

ただ、呑気に休んでいる僕の前で、勝手に痴情を行っていただけだ。まあ、怖いから言わないけど。

「うわ、鍵までつけてる。つか、これ、あんたの私物でしょ？ここまでするとは、犯罪よ？」

ついに犯罪者扱い。

もしかして、刑務所行き？

うーん、それは勘弁だな。

「……とりあえず、状況説明をさせてくれない？」

というわけで、とりあえず、歩み寄ってみた。

「変態が話し掛けないでくれる？」

『だが、彼女は聞く耳を持たなかった』

どこかで、懐かしいモノローグが聞こえたような気がする。

でも、彼女の言葉も当然と言えば当然か。

どこから、どう見ても変態にしか見えないし。

「いや、実は変態じゃないんだ」

というわけで、もう一度挑戦してみた。

「その姿と、この部屋の状態から見ると、変態以外なんでもないじゃない」

『説得に効果はないようだ』

また、懐かしいモノローグ。

ちくしょう、僕の明日はどっちだ！！

「……分かった。変態でいいよ」

そんなの知るか、というわけで、明日を見るのをやめて、諦める。

なんだか、面倒になってきたし。

まあ、もし、問題になったら、適当に言い訳しよう。

そろそろ、帰らないといけない時間だし。

とりあえず、鍵を見てみるが、完璧にぶっ壊れているので、使えそうもない。

ただ、ドア自体は壊れていない。

だから、使おうと思えば使える。

まあ、ばれてしまった以上、使えそうにもないが。

そこはそれ、諦めるしかない。

とりあえず、僕はそろそろと彼女の脇を通って、帰途についた。

まあ、見えなくなるまで、鋭い視線で見られていたけれども。

## 第二話 見当違いの嫉妬

翌日の昼休み。

無事に朝一番のホームルームは耐え切った。

何がどうなるか戦々恐々としていたが、お咎めはなかった。

まあ、まだ安心は出来ないが。

いつ、喋られるか分かったものじゃないのだ、気を緩めるべきではない。

「ねえ、ちよつと、いいかしら？」

でも、その前に弁当の準備、と思ったところで、聞きなれた声。

思わず、びくつと反応する。

冷や汗がだらだらと出てくる。

おまけに、周りから熱視線。

生きた心地がしない。

これが、有名な美人さんと付き合ってるのを妬まれて、なら、まだ報われるけど、実際は変態疑惑をかけられての尋問のために呼び出されているだけなので、報われない。

「あら、ちようどお弁当なのね？一緒に食べながらお話、なんてどうかしら？昨日の場所で」

「うん」

だからと言って、まさか逃げるわけにもいくまい。

逃げたら後が怖いし。

彼女の後について歩く。

まあ、行き場所は確定してるんだから、わざわざ後を追わなくてもいいんだけど、なんとなく雰囲気でそうさせられてしまう。

おまけに、視線が痛い。

とりあえず、誰だ、こいつ、みたいな目で見られてるし。

しかも、かなり妬ましそうな目だし。

思いつきり叫びたい。

妬ましいと思われるような関係じゃない、と。

まあ、状況を分かっていないから仕方ないんだろうけど。

第一教棟を抜け、それぞれ靴をはきかえると、第二教棟の校舎裏へと向かう。

まさか、昨日の今日で来るとは思わなかった。

にしても、それより、どうして彼女が僕をここに呼んだのか、それが気になる。

とりあえず、こちらの言い分を聞いてくれるのだろうか。

それとも……

私刑だろうか？

前者だといんだけどなあ、と思いつつ、歩を進める。

そして、いつもの秘密基地の中へと入る。

鍵は昨日の内に壊れたせいで、かけられない。

しかたないだろう。

というか、こんなところを誰かに見られでもしたら、たまらない。

絶対に良くない噂が飛び交うぞ。

彼女はそれが分かっていて、やっているんだろうか。

男と二人きりで密室へと向かう。

誤解されても仕方のない状況だ。

まあ、僕にはそんな勇気がないから、間違いななんて物さえ起きないだろうが。

「とりあえず、話しは食べながらでいいわね？」

「うん」

それは、構わない。

かなり気を張っていたせいで、お腹はもうぺこぺこ。

というか、基本的に育ち盛りの男の子は、常にはらぺこなのだ。持ってきた包みをあけると

「いただきます」

そう言って手を合わせるとスタート。

これは、もうちっちゃな頃からの癖だから、どうしようもない。

それに、言わないとなんとも居心地が悪くなる。

「いただきます」

彼女もそうなのかは知らないが、しっかりと手を合わせて、そういうと食べ始める。

小さいながらも色とりどりのおかずが並び、見ただけでバランスのよさそうなお弁当だと思う。

育ちが違つと、こつも違つものかな。

そう思いつつ、自分の弁当を食べる。

バランスもさほど良くないし、味も普通。

まあ、それが嫌いだというわけじゃないけれど。

食べられるだけ幸せ、なんて事を言つつもりではないけれど、僕にはこつというお弁当の方が好きだ。

落ち着くし。

「で、質問。あんたは、こんなところで何をしてたわけ？まさか、本当に覗いてただけ、なんてわけないでしょうね？」

不意の質問。

でも、僕にとつては願つたり叶つたり。

「電車通学でね、学校が終わつてもしばらく電車がなから、こつで暇つぶし。うるさいところが嫌いだから、静かなこの場所で退避してるの。別に誰かの何かを覗きたくているわけじゃない。そこに窓があるし、声も聞こえたりするけど、基本的にここでは、宿題とかしてるから、そつちは気にしないようにしてる」

いい訳をさせてくれるのなら、渡りに舟だ。

とりあえず、いいわけさせてもらおう。

まあ、うまく行くとはいえないが。

「ふーん、そう。分かつた」

案の定、手ごたえはあんまり良くない。

「聞いた通りの人間ね」

彼女はにやりと笑う。

背筋がぞつと冷える。

なんとなく捕食者がえさを見る眼と同じだ。

「クラスで孤立しているわけじゃないけど、特別誰かとつるむわけでもない。それなりに勉強でもスポーツでも活躍するけど、目立つわけでもない。扱いやすそうに見えて、扱いやすくない。ただ、教師からは高い評価をもらっている」

「どうやら、クラスと言うか、いろんな人から、僕の話聞いたのだから。」

まさしく僕、といった感じだ。

「そうやって弱い小動物のように見せかけているのは、もちろん演技よね？」

くす、と笑うと、そう続ける。

いやはや、怖いものだ。

「いや、演技なんかじゃないよ。正真正銘、怯えているんだから」ただ、訂正させてもらえるのなら、多少演技はしていても、本当に僕は怯えている。

本当に怯えているからこそ、弱い小動物の真似ができるわけだし。

「ふーん、まあ、いいわ。とりあえず、あんたの言っていることは信用してあげる」

それは、どっちの意味だろうか。

一瞬、分からなかったが、おそらく両方だろう。

もし、どちらかなら、限定の言葉なり何なりをつけるだろう。

それをしないんだから、どちらとも、と考えるのが自然だ。

「にしても、ここはいいわねえ」

その証拠に、話題が変わっている。

いや、もしかすると、何かの前置きなだけなのかもしれないが。

「あんたの言う通り静かだし、それに割と広い。いつから使っているの？」

「入学してちよつとからかな。誰かに入られないように、一応鍵を内側から閉めてる」

いきなり、誰かのご対面、では困るから。

実際、何度か、生徒がここを開けようとしたけど、鍵がかかっているため開かなくて、諦めていった。

鍵をかけてなかったらと思っただらぞつとしない。

「ふーん、学校側から許可は取ってるの？」

「うっん、無許可。ただ、ここは長い間使われてないって話を、担任にそれとなく聞きだしてるから、見つかることはまずないかな」許可なんて取るわけないし、リスクはちゃんと回避する。

当然だ。

下手して、困るのは僕なわけだし。

「じゃあ、私がここを使っても、構わないわけね？」

つまり、僕に明け渡せ、ということなのだろう。

ずいぶんとわがままな。

「別にいいけど、荷物を全部持って帰るのに多少時間がいるから、すぐ、つてわけにはいかないよ？」

とはいえ、別に異論はない。

秘密基地がなくなるのは辛いけれど、それでこねられて、後々面倒な事になるよりはましだろう。

ただ、ここにおいてある荷物は多くはないとは言え、決して少ないわけでもない。

一回二回では持って帰るのは無理だろう。

明け渡すことに關しては、異議はないが、多少の猶予は欲しい。

「それなら、構わないわ。置いておいても」

とはいえ、彼女はあっさり否定。

ということとは、全部強奪？

ガキ大将もびつくりのジャイアンズム？

それとはちよつと違うかもしれないが、あまりにも横暴。

「はい、それがあんた用の合鍵。今までどおり、私に気にせず、好きなときに使つて頂戴。私も勝手にさせてもらつわ」

と思つたのだが、どうやら風向きがおかしい。

どうにも、僕にも利用権があるようなそぶりだ。



いや、あるんだろう。

こうして、合鍵を渡すのは。

けれど、それはまたどうして？

聞いてみたい。

だけど、聞けない。

なんだか、今日は想定外の事が多すぎて、そんな余力がない。  
というわけで、諦めてさっさとお弁当を食べてしまおう。

### 第三話 奇妙な逢瀬

それから、奇妙な彼女との逢瀬が始まった。

いや、別に、そこになんらかの恋愛感情がついてまわるわけじゃないから、逢瀬、とは言わないだろうが。

それでも、彼女とはちよくちよく会った。

まあ、基本的に、放課後はいつもいるし、お弁当の時も、ほぼここ。彼女は、ほとんどいつもここに来ているから、会うのは当然だろう。けれど、逢瀬が続いたからと言って、仲が良くなっただけでもない。多少、会ったびになんらかの会話はするが、それでも、そんなたいしたことは話さない。

普通の会話なんて、一言二言だ。

仲が進展するような状況ではない。

ここに呼び出されたときの事も、誤解は綺麗に解けている。

帰ってすぐ、質問攻めにあっただけだ

『彼女の落とし物を拾ってあげたら、そのお礼を言われたただだよ。いい人だね。わざわざお礼の物まで用意してくれたんだから。まあ、すつごく大切だったものだったらしいけど』

そう言っておしまい。

お礼の物をもらった事を多少妬まれたし、何をもらったか見せろと言われたが、食べ物をもらって食べてしまったと言っただけもうおしまい。

拍子抜けするほどあっさりと引き下がった。

多少の嫉妬だけ。

自分の口がうまかったのか、それとも、単に僕と彼女がどうこうなるとはやはり到底思えなかったのか、どちらしろ助かったのは助かった。

おかげで、僕は比較的平和に過ごしている。

比較的、という言い方になるのは、たまに彼女が荒れるからだ。

もちろん、理由は一つ。

鬱陶しい告白。

告白があった日はたいてい荒れる。

というか、会った日は全て荒れていた。

おかげで、その日は口撃の嵐。

こっちの精神力を根こそぎ奪ってくれる。

もしかすると、そのために、ここに僕が来るのを許可しているのかもしれない。

彼女の噂のどれ一つにも、口が悪いとか態度が悪いとかそういった話は聞いた事がない。

と言うことは、外面は思いつきり猫。

だから、本当の姿を知っているのは、僕しかいなくて、そんな僕だから、建前を気にせず言いたい放題に言える。

要するに愚痴要員と言ったところか。

それなら、どうあがいたって、進展があるはずがない。

まあ、僕個人としては、鑑賞さえ出来ればそれでいいから、別に構わないのだが。

凡人には凡人らしい夢を。

有名なアイドルと一緒にいる。

それだけで十分だ。

それ以上を望んで散るのもばかかしい。

まあ、それだけの覚悟を持った感情じゃないから、というのもあるのだが。

なんにせよ、今の状況で十分なのだ。

「これからが、問題ね……」

不意にぽつりともらした。

いつものごとく、今日も今日とて二人して、隠れ家に来ているのは、僕と彼女。

だから、当然彼女となる。

ちなみに、もうそろそろで文化祭。

それだけで十分分かる。

学外からのナンパやら生徒からのお誘いの話だろう。

まあ、人気者の彼女なら仕方ないだろう。

ちなみに、僕の予定は決まっていない。

とりあえず、クラスの出し物に参加はするが、そんなに長時間縛られたりはしないし、誰かと一緒に回るわけでもない。

おかげで暇。

彼女とは対称的だ。

まあ、適当にぶらついた後、ここで昼寝でもしてればいいだろう。

ああ、侘しき学園生活。

もう少し誰かとつるむことを考えたほうが良かったのかもしれない。なんて思いもしないでもないが、仕方ない。

こういう時、騒ぎたかったら、いつも騒いでおかないと。

いつもクールか、いつも大騒ぎか、どっちにつくしか出来ないのだ。ケースバイケースなんてことは無理なのだろう。

残念。

「とりあえず、この男を仮の恋人にしたてあげてみようかしらねえ」  
びくっ！！

思わず身体が震え上がる。

なんとも恐ろしい事を考えるのだろう。

他の誰かなら諸手を上げて喜ぶだろうが、僕には到底そんな風に思えない。

特攻精神はないのはもちろん、そんな明日がどうなるもや知れない  
日々に足を踏み出すような酔狂な性格ではない。

確実に殺される。

「でも、この男じゃ、誰も認めないだろうし、私自身も演技とは言え、恋人にするんだったら、もっと好みのタイプの方がいいしねえ

……」

ぐさっ！！

今度はぐさりとくる一言をどうも。

でも、忌避すべき自体にはならなくて済んだだけましか。

いや、もしかすると、もっと状況が危うくなる可能性もある。時計を見る。

まだ、多少は早い。

ただ、駅構内で暇を潰せないわけでもない。よし。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

逃げよう。

僕は、そそくさと帰る準備を整えると脱出。嫌な予感がするときは逃げるに限る。

まあ、その可能性はずっとずっと低いのだが、それでもゼロじゃない。

なら、出来るだけの事をして忌避すべきなのだ。

#### 第四話 保健室の女神様

そんな翌日。

学校に着くと、やけに視線を浴びているように感じられる。

気のせいかと思いつつ、自教室に入ったら、余計にひどくなった。もちろん、思いつくのは一つだけ。

彼女との逢瀬の事。

けれど、その割には、視線はそんなに強くない。

多少嫉妬の視線も混じってはいるが、それもそんなに強くはない。むしろ、困惑、奇異、そんな感じの視線。

果たしていったいどんな事が、そう思いつつも、動けない。

あくまでも、こういうときは、向こうからアクションを起こしても  
らわないと、こちらからは動きようがない。

まさか、いきなり

『僕が何かしましたか？』

なんて聞くわけにはいかない。

でも、この様子じゃ誰にも聞けそうもない。

そんな微妙な空気の中、時間が過ぎていく。

授業は次々と消化されて行き、いざ、昼食。

そのタイミングだった。

「あのさ、お前、今から誰かとお弁当食べるのか？」

不意にクラスメイトからたずねられた。

それは、どうやらクラス全員の総意らしく、じつと僕の方を見ている。

「えっと、まあ、そうだけど、それがどうかした？」

それに、多少びびりながら、とりあえず答えてはみる。

答えてはみるが、反応はない。

いや、何か信じられないことが、今日の前で起きている、みたいな表情はしているが、言葉を返してくれないのだから、仕方がない。

「なあ、お前、放課後は誰かと一緒にいるのか？」

とりあえず、待つしかないのか、なんと思っていたら、別の人が言葉が続けた。

けれど、こっちの方が驚きだ。

やはりこの状況で考えられるのは、彼女に関する事。

ということは、もしかして、僕と彼女が一緒にいるところを見つけてしまったんだろうか。

となると、隠れ家がばれている可能性も大きい。

うお、かなりやばいんじゃないのだろうか。

「えっと、まあ、一応」

でも、だからと言って否定は出来ない。

とりあえず、未だに状況を完璧に把握したわけじゃないのだ。出来るだけ、踏み込んで、情報を手に入りたい。

「昨日、その人に何か相談されただろう？文化祭の事とか？」

思わず、背筋が凍った。

まさか、ここまで、ばれているとは思わなかった。

これは、かなりやばい。

もしかしたら、僕が誰かの痴情を見ていたように、僕と彼女の事を見ていたのかもしれない。

「……うん」

もう、ここまで来ているのだったら、下手に嘘はつけないだろう。

相談、というところまででは、なかったが、聞かされていたのは事実だ。

とりあえず、僕があそこにいなければ、確実に彼女はそんな事を言わなかったはずだし。

彼女としては、とりあえず、一人で悩んでいる、ような状況にしくなくて、どういう形であれ、僕に聞いてもらいたかった、ようでもあったわけだし。

だからこそ、逃げたのだ。

「やはり……」

クラスメイト達がそれぞれ頷き合う。

だが、それはやはり奇異の視線。

もしかしたら、何かしら想定していることと多少違うのかもしれない。

こうなると、状況が分からないとこちらは困る。

「あの、どうかし……」

「てめえ、何で、彼女からの告白を断ったんだよ……！」

とりあえず、状況把握のために聞いてみたのだが、あっさりかぶされた。

怒鳴り声で。

というか、余計に謎。

わけがわからない。

不意に現れたまた別の誰か。

「普通に話すだけでも羨ましいのに、告白だぞ、告白……！あんなに綺麗でお金持ちな彼女に告白されて、それを断るなんて、てめえ、何様だ……！」

激昂。

でも、状況が分からない僕には、はてなマーク。

果たして、何故に、僕が彼女に告白されている事になっているのか。そして、どうして、それを断っていると言う事になっているのか。

全くわけが分かんない。

そもそも、どうしてそこまでキレているのかも分からない。

実際、本当に告白されていたら、僕は間違いなくオツケーをだしていたはずだし。

美人は基本的に大好きだし。

いや、そもそも、その彼女が、彼女なのかどうかも分からないし。言ってる本人は、告白されたのが誰か知ってるから、言ってるんだろうけど。

となると、それとなく有名人じゃないといけないから、まあ、おそらくは彼女になるんだろうけど。



それでも、良く分からない。

「ああ、うん、ごめん、とりあえず、ご飯を食べてくるから」  
まあ、なんにせよ、とりあえず、逃げるのが一番だろう。

というわけで、逃げ出す。

そのついでに、歩きながら、状況整理。

とりあえず、彼女が彼女であるのは間違いないだろう。

彼女が二回続くから、軽く混乱するけど、彼女は彼女なんだから仕方がない。

で、今日一日の様子からすると、かなり広範囲に知られているみたいである。

そして、クラスメイトの口ぶりからすると、僕が彼女に告白されて断っている、という状況。

ついでに、なんとなく、僕に対する質問が、微妙にリアル。

となると、考えられることは一つ。

いや、他に可能性はあるが、とりあえず、僕の中で浮かぶのは一つだ。

彼女が、お誘いが鬱陶しくなる前に、先手を打った、というべきだろう。

とりあえず、リアルに物言いをするには、僕達のやっている事を覗く、という方法があるが、それでは、告白とかの話は出て来ない。

となると、出所はやはり彼女しかないだろう。

ただ、どうして、そんな事をしたのか。

それが、分からないのだ。

そんな事を言う必要性がどこにあるのだろうか。

一番簡単なのは、彼女に聞いてみる。

だけど、下手すると、巻き込まれる可能性が大。

となると……

逃げるしかないだろう。

とりあえず、目的が文化祭なのだ、それが終わるくらいまでは、逃げておけばいい。

まあ、逃げ場所は確保している。

というか、前々から確保してある。

いつだって、あの隠れ家に行けるわけじゃない。

僕よりも前に、人が来ていて、中に入れないときもあるし、雨が降っている日なんかもいけない。

中は雨が振り込まないけれど、その途中は校舎裏なんだから、当然雨ざらしで、中に入れるような状況ではない。

そんなときに行く場所はちゃんと確保している。

そこへ逃げ込めばいい。

というか、既に、足を運んでおり、今日のお弁当もそこで食べるようにしている。

「失礼します」

到着すると同時に、あっさり中に入る。

まあ、一応、先客、というか、そこには番人がいるから、挨拶はしておく。

「あら、珍しいわね。晴れの日のお昼にここに来るなんて」

「いや、ちよつといろいろありまして。今日もお客さんゼロですよ？」

「ええ、幸い、うちの生徒は健康体の人ばかりだからね」

そういつて彼女はくすくすと笑うが、実際は、多少の病気なら、無視するから、誰も来なくなつたのだ。

とりあえず、彼女は保健医。

うら若く、そして綺麗な女性。

というわけで、当然男子からの人気は高い。

そのおかげで、最初の頃は、かなり保健室は繁盛していたが、当然、やってくるのは仮病の生徒ばかり。

そして、恐ろしい事に、仮病の生徒にお仕置きをしたのだ。

とりあえず、僕は経験した事がないから分からないし、聞いてもただ震えるばかりで教えてくれないから分からないが、かなり恐ろしいことだったには違いならしい。

ちなみに、僕も、仮病と言うか、人がいない時に、遊びに来たのだが、いろいろやりあった結果、ここに遊びに来る許可がおりたのだ。今でもどうして許可が下りたのか不思議だが。

「まあ、私としては来てくれて嬉しいわ。こうも一人だと暇で暇で」「仕事はどうしたんですか、仕事は？」

「私は優秀だから、ほとんど片付いてるのよ」  
しかも、この人、美人な上に仕事も出来る。

その日の仕事をあつさりと片付けてしまう。

天が二物を与えたい例だ。

「まあ、いいですよ。とりあえず、さつさとし飯食べてもいいですか？お腹空いているんですよ」

「ああ、だったら、デザート」

そう言つて、彼女が出したのは、いかにも手作りと言わんばかりのクッキー。

とはいえ、この人がそんなものを作る玉じゃないのは分かっている。「ファンの女子の子からもらった奴ですか？」

とりあえず、それだろう。

年上の美人でしかもカッコいいタイプは、この年頃の女子は意外と憧れられる。

で、そういう特殊な趣味な人間、というか、まあ、そっち系の人間から告白されまくり、という事態になる、らしい。

まあ、詳しくは聞いてないから知らないが。

「失礼ね。これは、れっきとした私の手作りだけど」

「……好きな人でも出来たんですか？」

思いついたのが、毒見。

失礼だと思うが、そうとしか思えない。

それに、この人だつて独身で恋人のいない妙齡の女性。

そういう事になってもおかしくないだろう。

「いや、単に作りたくなっただけよ。それとも、貴方に食べて欲しくて作つたの、と言つたほうがいいかしら？」

それが、どうやら気に食わなかったのだろう。

絡み付くような視線で見つめながら、艶やかな声でそういう。  
こんな風に言われて、惚れない人はいないだろう。

よっぽど趣味がおかしくない限り。

「ホント、貴方ってば可愛いわね。そんなに真っ赤な顔をして」  
もちろん、僕も違わず、あっさりと赤面。

年頃の男の子には少々刺激が強い。

「これじゃ、私がデザートよ、なんて言った日にはどうなるのかしら、ねえ？」

ホントに悪魔だ、この人。

どういう反応するのか分かっていて、そういう事を聞いてくるんだ。  
そして、その通りの反応をしているのを見て楽しんでいる。

ドSだ。

「まあ、いつまでもからかうのは可哀想だから、ほらさつさと食べなさい」

言われなくてもそのつもりだ。

「いただきます」

手を合わせて、さつさと昼食開始。

いつものごとく、普通のお弁当。

だけど、やっぱりそれが落ち着く。

「相変わらず普通のお弁当ね。なんなら、私が作ってあげようか？」

「まだ死にたくありません」

この人にお弁当を作ってもらっている事がばれたりでもしたら、確実にやられる。

たまに、この人の食べている自作お弁当を見た事があるが、どれもこれも、非常に美味しそうだった。

だけど、そんな危険を冒してまで食べたいもの、とは思えない。

「貴方も素直ねえ。まあ、そこが可愛いんだけど」

彼女は、そういうと肩をすくめると、お茶をついで差し出す。

悪魔のような性格の人だけど、こうやって細かなところでもてなし

てくれる。

そんなところがあるから、憎めないし、素敵な人だと思ってしまう。美人だけど、それだけじゃない。

そう思わせる物がある。

そういう人って本当に憧れる。

「ありがとうございます」

だから、褒め言葉なのか貶し言葉なのか分からないけれど、とりあえずお礼を言うておく。

どっちだろうと、僕は嬉しかったわけだし。

「ほんと……おもしろい子ね、貴方は」

彼女はそういうと、おもしろそうに笑った。

## 第五話 甘く淫らな罪深い罰

あれから、僕は、昼と放課後は、保健室で過ごしている。

まあ、彼女には相変わらずからかわれてばかりだけど、それはそれでoshiろい。

さすがは大人と言うべきなのか、それとも保健医というべきなのか、それとも彼女自身の性格と言うべきなのかは、判然としないが、彼女は踏み込みすぎない。

これ以上言われると嫌だと思う手前でやめる。

そういう加減が上手なのだ。

だから、普通なら思わず嫌になりそうなやり取りも、僕にとってはとてもoshiろいものだった。

「じゃじゃーん、私特製愛情たつぷり手作り弁当」

「やつぱり、普通が一番だよなあ」

そして、今日も今日とていつもの如く保健室に来ているのだが、とりあえず、彼女のボケは無視。

ボケ殺しとして名高い僕としては、やらないわけにはいかない。

「ほら、私特製の愛情たつぷり、手・づ・く・り・弁・当・だ・よ  
！！」

「痛い痛い痛い！！」

まあ、その後思いつきり頭を鷲づかみにされたけど。

これもいつも通りと言えはいつも通り。

意外とバイオレンスな関係なんです、僕達は。

「ほら、おいしそうですよ」

そう言つて、オープンして差し出してくれた弁当の中身は確かに美味しそうだつた。

「わー、おいしそー、食べるのがもつたいたいぐらいだー、てか、もつたいたなくて食べられないやー」

「なんで棒読みなのよ！！」

「とりあえず、食べません」

まあ、だからと言って食べる気はゼロだが。  
何をたくらんでいるのか分からないし。

この人からのプレゼントは確実に裏がある。

「全く、他の子なら、泣いて喜ぶのに、貴方って人はねえ」

「そりゃ、先生みたいな綺麗な人にお弁当を作ってもらうのは嬉しいし、幸せものだなぁって思いますよ？」

確かに、普通に考えれば、そうなる。

美人が大好きな僕ならなおさら。

「だけど、先生が相手だと裏がありそうで怖いですし、特に今みに脈絡もなしじゃ、絶対にいやですよ」

だけど、やっぱり先生だと言うのが一番怖い。

絶対に裏があるっていうか、何か恐ろしい結末が待ってそうだ。

「それに、やっぱり、そういう手作り弁当イベントは、恋人関係じゃないと、おかしい感じがしますし」

ついでに言えば、とりあえず、それは、僕の中での確定条件なのだ。  
恋人、または、お互いが友達以上恋人未満の関係で、後はきっかけを待つのみ状態でないと、やってはいけないイベントなのだ。

いや、まあ、単純に僕が、勘違いしただから、というのもあるけど。

素敵な女の人に優しくされると、男って言う生き物は勘違いしてしまいがちなんです。

「分かったわ。じゃあ、とりあえず、今日一日だけ、私の旦那ね」

彼女はそういうと僕にしな垂れかかってくる

て、おい、ちょっとタイム。

「いきなり旦那?! 飛躍しすぎじゃない?!」

順序としては、まずは恋人じゃないかな?

「いいじゃない。なんなら、ちょうどベッドもある事だし、夫婦の夜の営み体験してみる?」

「…………ぐあ」

思わず想像して、絶句。

悪魔じゃない、この人は。

魔王だ。

いたいけな少年の心を今弄んでいる。

まっさらで純情な少年の心を弄んでいるのだ。

これを魔王と呼ぶすになんと呼ぶ。

「はい、いつでもいいわよ」

けれど、そんな僕の内情を知らながら彼女は、ぺたんとベッドの上に腰を下ろすと、わざと短いミニから伸びているすらりとした細く長い足を組み直し、シャツの第二ボタンをあける。

そこから覗く肌は抜けるように白く艶かしく、その奥にあるだろう二つの膨らみが微妙に見えそうな状態。

理性が崩れ始める。

というか、自分でも驚きだが、良くこの状況で、完璧に理性が崩れないものだ。

ただのへたれ、なのかもしれないが、それでも、この状況でなおも耐えているのは、なかなか評価されるべきものではないだろうか。

まあ、そうとう間抜けな顔をしているではあるうが。

「あら、まだ粘るのねえ。うんうん、やっぱり君はそうじゃないとねえ。だから、サービスしてあげちゃう」

すっと立ち上がると、机に置いておいた彼女手製の弁当を持つと。

「はい、ご褒美」

そう言くと、彼女はいつの間にか半開きになっていた口に玉子焼きを一つ入れる。

ふわりとした上品な甘みが口に広がる。

素直においしいと思った。

けれど、それ以上の破壊力があるものが二つ、自分の眼前にある。

第二ボタンの開いたシャツの奥に見えるエルドラド。

男達の桃源郷、アルカディア、シャングリラ。

ああ、今、僕は幸せです。



「あらあら、まあ、男の子だものね、仕方ないわ。でも、もうサービスはおしまい」

そう言つて、つんと僕のおでこをつんと押すと、桃源郷への門を閉じた。

なんだろう、これは。

いつの間に、こんなところに来てしまったんだろう、僕は。

それとも、なんだろうか、いつの間にか、僕は彼女が惚れてしまうようなことをしてしまったのだろうか。

……まあ、ないな。

勘違いは情けないから、やめておこう。

そこまで、考えが行った辺りで、どうにか冷静さを取り戻し始める。

「これから先は、ちゃんと私の恋人になってから、ね？」

「ぐあっ!!」

ごめんなさい。

ノックダウンです。

どうやら、僕というキャラは魔王にレベル1で丸腰の状態で突っ込んでいった勇者、という感じらしい。

まあ、それ以前に、単なる序盤で殺される村人Aなのかもしれないが。

なんにせよ、完璧負け。

これ以上行くと、自分でもどうなるか分からない。

「とりあえず、白旗をあげてお弁当を食べますから、許してください」

もうここは謝るしかないだろう。

深々と頭を下げる。

「あら、残念。もう少し粘ってくれたら、それはそれでおもしろそうだったのに。私は、別に君に襲われても良かったのにねえ？」

けれど、目の前にいる魔王は、けらけらと笑っている。

いったいどこまで本気なのか分からない。

まあ、あっさりとは全部冗談、とか逆に、全部本気、と言われそうで

怖いのだが。

どちらにしろ遠慮したいものだ。

「まあ、でも、貴方はそういかないわよね？はい、どうぞ」  
それぐらい彼女もお見通しなのだろう。

くすくすと笑いながら、そう言いつつ、お弁当を手渡す。

それを机に置くと、

「いただきます」

そう言つて、食べ始める。

とはいえ、とりあえず、まだ、自分が持つてきた弁当があるから、机の上には二つどんと弁当が置いてある。

とりあえず、残っている自分の弁当を綺麗に食べてしまう。

そんな僕を彼女はじと目で見るが無視。

まあ、おいしいものは最後に残す主義なのだ。

というか、最初においしいものを先に食べたなら、普通なお弁当を食べる気がなくなってしまう。

まあ、作つてくれた母に対して失礼だが、しかたがない。

現実はいつも人には冷たいものなのだ。

それはさておき箸を進めていく。

先ほどの玉子焼きと同じく食べるおかず全てが本当にうまい。

バランスもしっかりと考えて、温野菜も入っているが、ただ入れているんじゃないくて、しっかりとアレンジもされていて、非常に食べやすい。

これなら、野菜嫌いな子も、割かし食べやすいと思う。

「どう？おいしいでしょう？」

『美味しい？』じゃなくて、そう聞く辺り、自分の腕に自信があるんだろう。

まあ、その自信も頷ける程美味しい。

時々不思議に思うのだが、同じようにレシピどおりに作っても、味に差異が出る事が良くある。

いったい、その差異はどうやって出来るのだろうか。

不思議でたまらない。

「そうですね。これなら、いつでもお嫁に行けますね」

ただ、これだけの物が掴めるんだ、いくらでも男を虜に出来るだろう。

男なんて胃袋を押さえつけければ、簡単なものだ。

まあ、もちろんそれだけじゃないが、かなりの破壊力を持った武器になるのは確かだ。

受け売りだから、なんとも言えないけど、僕としてはそれに賛成票を一票。

料理がうまいか下手かと言ったら、うまいほうがいいだろう。

「そうね。じゃあ、貴方がもらってくれるかしら？」

くすりと笑うと、またしな垂れかかってくる。

本当にこの人は心臓に悪い。

何が狙いなのか分からないが、どうしてそうまでして僕を誘惑するのか分からない。

もしかして、本気なのだろうか？

いや、それはないだろう。

どんなものだろうと、恋愛にはきっかけがある。

切り替えるスイッチがある。

それこそ些細な出来事がきっかけになることだってある。

だけど、それがなかった。

それすらなく、ただ呑気に適当に居ただけなのだ、どうなりようもない。

「そんな訝しげな顔をしなくてもいいじゃない？いつもいつも否定してばかりじゃなくて、肯定してみてもいいんじゃない？」

そんな僕の心内なんて丸分かりなのだろう。

くすくすと笑って、耳元でそう囁き掛ける。

状況判断不能。

そんな単語が頭に浮かぶ。

自分の頭の処理能力の許容量オーバー。

「私は、貴方にもらって欲しいと言っている。じゃあ、戴きます、でいいじゃない？」

不意に思い出した言葉。

『好きなら好きでいいじゃない。難しく考える必要はないと思うけど？』

懐かしい言葉。

僕が好きだった言葉。

だけど、信じられなくなった言葉。

「ほら、戴いちゃいなさい」

そう言って摘み上げたから揚げを僕に口移しする。

なんて事のない、流れるような動作。

それを僕はよけられなかった。

しな垂れかかるように彼女は僕の身体の自由を奪われていたから。

そして、それ以前に彼女の言葉で頭がとけてしまっていたから。

「貴方が悪いんだから。いつもいつも来るから。私の我慢を不意にするような事をしたんだから。だから、これは罰。私から貴方に下す淫らで罪深い罰なのよ」

だから、僕はそのまま彼女に飲み込まれていく。

甘く淫らな罪深い罰を。

## 第六話 女神様の誘惑

「暇ね。とりあえず、一発どう？」

いつもと変わらず母手作りの弁当を食べていると、彼女から急なお誘い。

「真昼間からやることじゃないと思いますが？」

僕としてはたいへん魅力的なお誘いだが、真昼間からしたい事とは思えない。

「いいじゃない。男と女が密室で二人きりになつたらやることなんて一つなんだから」

「学校が初体験は、ちよつと嫌ですね。男はロマンチストなんですよ？」

とりあえず、僕達の関係は何かが変わつたわけじゃない。

冗談は普通に言い合うし、セクハラを受けたりする。

だけど、それだけ。

そりゃ、言われる事のセクハラ度数は以前に比べるとひどくなつたが、特別な肉体的接触があつたわけじゃない。

さつき言つた通り、肉体関係を結んだわけでもない。

キスだつて、口移しをされてから、一度もしていない。

まあ、僕がさせていない、というのが正しいんだけど。

結局、僕と彼女はどこまで行つても、生徒と教師という関係だ。

いくら校医だと言つたつて、勘定に入れるのは教師なのだ。

認められるような関係じゃないし、ばれたらやばい事になるのは間違いない。

だから、こんなところで無防備に何かしたいとは思わない。

それに、先ほど言つた通り、僕達の関係は何かが変わつたわけじゃない。

恋人になつたわけでもない。

そりゃ雰囲気によつてはキスなんてものをするだろうし、それ以上

だつて行くだろう。

僕の理性はそんなに強いわけじゃない。

流されでもしたら確実にアウトだ。

「そうね。じゃあ、今日の夜、どうかしら？」

「残念、裏を取ってくれるだけの友人はいないから、泊りがけのお出かけは出来ないんだ」

まさか、バカ正直にこの人の家に泊まりに行くなんてことを言う事はできない。

残念ながら、うちの母親はそこまで甘くはない。

「仕方ないわね、次の休みはどうかしら？」

「それも、残念ながら無理だよ。先生の家は知らないから、自分から行けないし、かと言ってどっかで待ち合わせなんて言うのも論外だし。先生みたいな綺麗な人はどんな事をしたって目立つからね」

まあ、仕方がない。

生徒と教師がそんな関係になろうと言うんだ。

簡単に行くわけがない。

「じゃあ、仕方ないわね」

彼女はそう言つて嘆息する。

まあ、仕方がないのだ。

大人同士だったら、問題なかっただろうけれど、実際はそうじゃないのだ。

ことはそううまく運ばない。

「いただきます」

「え？」

いきなり、そういった彼女は、僕の膝の上に座る。

「結局ここじゃないと出来ないんだったら、ここでやればいいのよ。雰囲気なんて関係なしにね。じゃないと、私が欲求不満になっちゃうわ」

「ちょ、タンマタンマ」

腰を浮かして、抜け出そうとする。

けれど、がつちりとホールドされているせいか、逃げ出せない。

以前もそうだが、どうしてこうもこの人は逃げ出せないように絡め取るのがうまいのだろうか。

「これじゃ、強姦だよ!!」

「あら、女が男相手にやつても、強姦にはならないのよ?」

確かにそうらしい話は聞いた事がある。

あるけど、なんとも不公平だ。

いや、まあ、確かに基本的に女が男に力では勝てないんだから、そうなるのも自然なんだろうが、そうなっている現実が目の前にあるのだ。

もう少し柔軟にして欲しい。

「いいじゃない。私も美味しく戴くから、貴方も美味しく戴く。おかしいことは何一つもないわよ?」

「その美味しく戴かれるのが嫌なんです!!」

「きやつ!」

いすのバランスを崩して、床に背中から倒れこむ。

あまりの痛みと衝撃に一瞬呼吸が出来なかったが、このままの状態にいるよりかはましだ。

いきなり落ちた事で、緩んだ拘束から抜け出す。

「残念、簡単には逃がさないわよ?」

が、あっさり捕まり、そのままベッドに押し倒される。なんともたくましい人だ。

「すみません。こういうことは彼女としかしないって決めてるんです」

とりあえず、最後の反抗と言わんばかりにそう言っではみるが

「あら、失礼ね。私の事を恋人と思ってくれてなかったの?寂しいわ」

あっさり返される。

「いえ、こんな風に相手の気持ちを無視した行動をする人を恋人と思うのはむづっ!!」

それでも反抗を試みたのだが、あっさりキスで口をふさがれる。やっтерることがどれもこれも男のすることだ。

「ダメな口ね。そう言う事ばかり言ってる、ホントに無理矢理しちゃうわよ？それとも、ホントはそうして欲しいとか？」

「そんなわけないでしょう！」

失礼な。

僕はMなんかじゃない。

「で、どうする？ここで今するか、それとも、私の家に今日泊まりに来るか、それとも休みの日に来るか、どれがいい？もし、どれも嫌と言ったら、襲うから」

とはいえ、DSな彼女と居る限り、僕はどうしても受けになってしまっただろう。

選択肢が無茶苦茶だとさえ言わせてくれないんだから困ったものだ。距離が近づいたせい、彼女は止まってくれそうもない。前言撤回だ。

確かに、僕達の関係は変わっている。彼女の方が変わっている。

それにどういう意図があるのかは、やはり分からないが。

放課後の廊下。

僕はとぼとぼと歩く。

とりあえず、保健室にはいけない。行けば、確実に食われる。

一応、約束はするだけしておいた。

空手形にする気はまんまんだが、それをやると後が怖い。だから、たぶん行く事になるだろう。

どうにか、予定が出来ないだろうか。

それこそ、僕が絶対に出なくてはいけない予定が。そうじゃないと、今週の日曜日。

その日に、確実に僕は純潔を散らす事になるし。



ああ、悲しいかな、生贄の供物。

自業自得とは言え、こうもあつさり今まで守りに守った貞操を、捧げてしまうとは。

まあ、僕も年頃の男の子だし？

そういう事に興味がないわけじゃないよ？

しかも、相手は、男子学生と一部の女子学生の憧れの的なのだ。嬉しくないわけもない。

ただ、どうにも、こう流された結果、というのが、釈然としないんだよね。

困ったものだ。

「で、どうすればいいと思う？」

で、結局は人頼み。

封印していた、というか、避けていたあの場所へと向かい、ぼけっとしていた彼女に、そう投げかけた。

「……あんた、つくづく変な奴ね」

が、あつさりだめだしを食らった。

だが、僕に言わせてもらえば、確実に彼女の方が変なのは間違いない。

「ていうか、私がやった事に関してはスルーなの？」

「気になるのは気になりますが、今は貞操を守るほうが大事なんです」

確かにそれは重要と言えば重要だけれど、そんなことは大事の前の小事。

今、気にする事ではない。

「全くあの人は、何も分かっていない。確かに、生徒と教師である前に一人の男と女。そういう気持ちになってもおかしくなんてない。ていうか、素直に嬉しい。可愛い女の子や綺麗な女の人は嫌いじゃないからね」

確かに、嬉しいのは嬉しい。

たいへん喜ばしいことだ。

あんな高性能な新型機が、こんな量産型汎用機を好きだと言ってくれるのだ。

嬉しくないわけがない。

ただ、だからといって、いきなりワンステップもツーステップも飛ばして行くのはどうかと思う。

「でも、やつぱり、男と女であると同時に生徒と教師。そう簡単に許されるべきカップリングではない。ていうか、ばれたら、かなりやばい。なのに、あの人と言うと、自分の欲望ばかりを押し付ける。ああ、困ったものだ。嘆かわしいことだ」  
もう少し、こちら側をいたわって欲しい。

こんな純情で純真であるいたいけな少年が相手なんだ。

そんな手籠めにするような形で持つていつて欲しくない。

というか、あっさり食べようとして欲しくない。

「というわけで、恋人のふりしてくれない？」

「嫌に決まってるでしょう」

というわけでの提案なんだけど、あっさり却下。

まあ、全く毛の先ほど期待していなかったし、以前自分が考えていた事態になりかねないというか、絶対になるのが分かっている以上、大きすぎるリスクを払いたいとは思わない。

「ふむ、となると、とりあえず、予定をでっちあげるしかないな。

しかも、どうしても出ないといけないぐらいの……」

というわけで、まあ、ここらへんに落ち着くしか無いだろう。

「祖父母を殺すか？ いや、いつそのこと両親を危篤もいいな。でも、あの人のことだから、いろいろと調べまわるだろうしな。となると、ガセでは捕まってしまうか……」

だからと言って、答えが出るわけでもない。

あの人のことだから、どんな手を使っても、僕を部屋に呼び込むだろう。

既に僕が

『じゃあ、休みの日に遊びに行きます。なので、地図を描いてくだ

さい』

そう言っている以上、逃がすつもりはないだろう。

確実にてぐすねを引いて待ちつつ、逃げ出そうものなら、あの手この手で絡め取る事間違いないだ。

となると……

うわ、勝てる気がしない……

「いつそのこと、操捧げたら？あんたみたいな有象無象な輩には分不相応な恋人だと思うわよ？いつ逃げられるか分かった物じゃないし、今の内に捕まえておいたら？それこそ、捨て身で」

つまり、身体を餌にしろと。

そりゃ、僕だって彼女の言っている事ぐらい分かっている。

あんな素敵な人と付き合おうというんだ、それ相応の覚悟をしないとけないだろう。

でも、だからと言って、やっぱり身体を差し出すのは……

「ほらほら、行った行った。あれこれ悩んでたって仕方ないわよ。

もう真正面からぶつかって、対抗するしかないのよ」

とはいえ、だからと言って逃げ出す手段は無い。

それに、仮に運良く今回逃げられたとしても、次も逃げられるとは限らない。

絶対に毎週休みごとに誘ってくることは間違いない。

なら、彼女の言う通り、真正面からぶつかっていくしかないだろう。そうすれば、もしかすると、それこそ、天変地異の前触れかのように運良く、守りきれるかもしれないし。

うん、頑張ってみるか。

「んじゃ、帰るわ。相談ありがとね」

「え？！私のネタ振りの奴は無視なわけ？！」

まあ、やっぱりそれはそれ。

大事の前の小事。

というわけで、今はあの人との決戦の事に集中しよう。

## 第七話 欲望のサンクチュアリ

そして、いざ、やってきました、地獄の坩堝。

戦いのサンクチュアリ。

「大丈夫。負けない。勝つんだ。勝って貞操を守りぬくんだ!!」

そう自分に言い聞かせて、大魔王の居城の門をくぐり、インターフオンを鳴らす。

とりあえず、オートロック式みたいだ。

まあ、女性の一人暮らしだし、見てくれは恐ろしく整っているわけだから、これぐらいの防犯意識はあつて当たり前だろう。

まあ、公立高校の校医が住むには、多少豪華すぎると思うが。

『はいはい。どうぞ』

インターフォン越しに僕の姿を確認した彼女は、あっさりとドアを開ける。

そこから、エレベーターに乗って、彼女の部屋へ。

ふむ、なんと言うか……

僕には縁の無い世界だ。

一応、一軒家に住んではいるが、ごく平凡の普通の家。

おそらく、こんなアパートを借りるよりもずっとずっと安上がりな家だろう。

そう考えるとなんとなく切ないが、それでも父さんは一生懸命頑張つて働いているんだ。

それを応援するのが子供の仕事じゃないだろう。

そんな事を考えながらだったので、ずいぶんと呑気な足取りになってしまい、彼女の部屋の前に付く頃には、既に彼女が出迎え……

「うおいつ!! 何してるんですか?! さっさと中に入ってください!!!」

彼女の姿を確認すると同時に、部屋に押し込む。

「いやん、もう、やる気まんまん? お姉さん嬉しいわ」

「何世迷い事言ってるんですか!？」

冗談も休み休みにして欲しい。

というか、なんちゅう格好で外に出てるんだ。

おかげで、見た瞬間は一瞬あまりの事に、何事も無かったかのように振舞いそうになったじゃないか。

「もう、こんなところではじめちゃうの? うん、でもいいわよ、もう私も我慢……」

「うがあああ! さっさと服着る! 何で下着姿で待ってるんですか!？」

この人には常識がないのか、常識が! !  
冗談にしても程があるぞ。

いくら自室の前だからと言って、下着姿で出てくるのはどうかと思うぞ。

傍から見たらただの露出狂の変態だ。

まあ、飢えた野獣どもなら大喜びだろうが。

「いや、だって、ほら? 私ももう我慢できないから?」

「我慢できなかったら、下着姿で待つんですか! ! どの変態ですか! !」

18 未満視聴禁止のビデオに出てくる人と同じじゃないか! !

あんなのはあくまでもフィクションのはずだぞ! !

「あら、いいじゃない。変態なら、どんな事でもオツケーなのよ?

私は、あなただけの変態さん。ほら、いくらでもマニアックな……」

「人格疑われそんな事を言わないでください! ! ノーマルでいいんです! ! ていうか、ノーマルがいいんです! !」

「いいじゃない。世界が変わるわよ?」

「結構です! !」

なんちゅう人だ、この人は。

純情な青少年をどうしようというつもりだ。

僕はそこまで汚れるつもりはないぞ。

「もう、分かったわ。仕方ない。ノーマルでいいわよ」

彼女は、ため息を付くと、そういう。

「どうやら、なんとか分かって……」

「ノーマルでいいから、早速はじめましょう?」

「はうつ?!」

しまった。

そうだ、そもそも、大事なものは、そこじゃなかった

なんだか、いつの間にか、奪われること前提みたいな感じになってたけど、元々は、それを回避しようとして一生懸命考えていたはずだ。

なのに、いつの間にか、話が摩り替わっていた。

もしかして、この人……

「さあ、邪魔する者は誰もいない。君の言う通り、恋人の部屋での初体験と言うシチュ。文句はないはずよね?」

「あ、ああ、ああ……」

完全に追い込まれた。

逃げ道は……

ない。

間違いなく僕は、今日、ここで……

彼女に食われる。

「で、でも、やっぱり、家に来てすぐって言うのは何だし、こう、最初はテレビとか雑誌とかを見たりして、お話してから、ゆっくりとそういう雰囲気を持っていきながら、自然と、と言うのがいいなあ、とか思ったりするんだけど?」

「あら、そんな事しようとする、どうやっても不自然な流れになるのよ?どう考えても、雑談の延長上にエッチがあるわけじゃないもの」

「はうつ?!」

ああ、ダメだ。

この人に口で勝てるわけが無い。

どう考えても無理だ。

食われること確定だ。

でも……

「そ、その、は、初めてだから、その、なんていうか、微妙な初々しさと言つか、こうアクションを起こそうとするんだけど、起こしきれなくて、そういうなんというか、えと、羞恥心との葛藤とかもしてみたいんです。その、やっぱり、がつつくのは良くないですし」

絶対死ぬ。

恥ずかしさで死ぬ。

「うーん……」

彼女が腕組みをして、考えるそぶりを見せる。

ただ、腕組みのせいで、元々豊かな二つのエベレストは更に強調され、なんだか、もう見たら、その場で『負け』という二文字をでかでかと見せ付けられているような感じがする。

この人のことだから、絶対わざとだろう。

「まあ、そういうシチュもありと言えば、ありね。うん、萌えシチュエーションというのかしら？」

と、そんな事を考えているうちに、彼女の方に答えが出たらしい。しかも、僕に有利なほうに。

「というわけで、服を着てくるから、リビングのソファに座って待つてなさいね？リビングはまっすぐ行ったところだから」

彼女はそういうと、さっさと別の部屋に向かって消えてしまう。

一瞬、逃げ出そうかと思いが浮かんだが、即座に振り払う。

そんな事をしたら、後でどうなるか、それを考えるだけでも恐ろしい。

仕方なく、彼女の言う通りに、そのまま奥に向かい、リビングに入る。

そこは、なんだか、彼女のイメージ通りの部屋だった。

物がたくさんあるわけでもなく、だからと言って全くないわけでもない。

全体的にシックにまとめている。

大きな薄型テレビに、多種のAV機器に、二人がけのソファとテー

ブル。

本棚には、いろんな種類の本がある。

まあ、目の端に、『年下の男を逃がさない法則』なんていうタイトルの本を見つけてしまったが、すぐに視線をはずしたから、詳しくは分からないが。

というか、なんちゅう本を買っているんだ、あの人は。

そもそも、ああいう本は全くあてにならないと言うのに。

とりあえず、ソファに腰を落とす。

途端に、ふわっと甘い香りがする。

部屋全体にも、かすかな甘い花の香りがしていたが、それともまた違う香り。

おそらく、その香りの正体は彼女の香水。

スキンシップで襲われるときいつも香っていたのを覚えている。

でも、なんだか、こうしていると、本当に女の人の部屋に来ているんだな、とつくづく思う。

さきほどまでは、彼女とのかけあいでもそんな事を考える暇なんて無かったけど、こうしていると、嫌でも意識してしまう。

「はい。お待たせ」

そんなふうに乗っかってるさなか、戻ってきた彼女はぎゅっと後ろから抱き付いてくる。

こんなときに、そんな事するのはやめて欲しい。

思いつきり意識してしまうじゃないか。

って、いや、それで正しいのか？

うーん、いまいち僕には判断が付かない。

「でも、ちょっと待ってね？今、飲み物とって来るから」

そんな僕の内心を分かっているんだろう。

ひょいと離れると、すたすたとキッチンの方へと向かう。

なんというか、やはり、うまいと思う。

くつついては離れ、離れてはくつつく。

しかも、その時間が長すぎず短すぎず、ちょうどいい塩梅で、事を



運ぶ。

本当に、男心をくすぐるのが上手だ。きつと、男性経験も豊富なんだろう。

まあ、僕は、男性経験がない人の方が、実は好きなんだけど。

いや、だって、比べられそうだし。

明からに、僕は、男子平均以下だから、比べられるとかなり凹むし。

「はい、どうぞ」

「うん、ありがっ、じゃねえ?!なんで、そんな格好してんの?!」  
飛び込んできたのはさつきとは全く違う、異様な姿。

油断してた分、破壊力は倍増。

「あら、ここは、やっぱり台所から出てくるときは、裸エプロンでしよ?まあ、さすがに、刺激が強すぎるかと思ったから、下着にしないとけど?」

「ぐああああああああ」

思わず頭を抱える。

油断した僕がバカだった。

そつだ、彼女はそういう人だったんだ。

ああ、もう……

ちくしょう。

「ああ、もう、どうして、そうなるの!言っただでしょ、ノーマルだつて!!ノーマルなんだから、服着てよ、服を!!普通にいつも通りの会話するんだから、格好も普段着じゃないと意味無いじゃん!」

「もう、文句が多いわね。分かったわよ、ちゃんと服を着てくるわよ」

「お願いします。まじで、お願いします」

とりあえず、状況をこれ以上悪化させないために、それは絶対に避けられない。

そのためなら、なんだってする。

まあ、操云々は除外されるけど。

「とりあえず、文化祭はどうするの？」

「やることもないし、かと言って誰かと約束したわけでもないから、適当に避難しますよ」

「んじゃ、保健室に來なさい」

「食わないですよね？」

戻ってきた彼女は、僕のすぐ傍に腰掛けると、あっさりと僕を捕まえ、いつもと変わらぬ調子で話しかけた。

「まあ、さすがに、人手が多いから無理ね」

基本、この人は下半身の話し以外は、割と話しているとおもしろい。まあ、下半身の話しと言っても、襲う襲わないの話し限定できついんだけど。

「それに、今から食べれるし？てか、食べるし？」

「ちよつ、いきなり!？」

まあ、きついと言うよりも、対応に困るというのが正しいところなんだけれども。

こうして、あっさり覆いかぶさってくるし。

「まずは、キスを戴き。ちゅっ」

そして、今度は唇を奪う。

わざわざ分かりやすく音を立てて。

なんと言うか、まあ、ある程度分かっていたとは言え、こつも予想通りとは……

「あの、もう少しくつ、ゆつくりとしてくれませんか？こちとら、初めてで恥ずかしいんですか？」

「あら、私も初めてよ？てか、恥ずかしいんだったら、さっさと済ませたほうがいいんじゃない？」

「なんですとお!？」

こんなときに、そんな衝撃発言をしないで欲しい。というか、初めてってどういうこと？

それだけ美人なのに？

もう、大人なのに？

「そもそも我慢なんて出来ないし」

そんな疑問を込めての言葉は、全く別の答えで返ってきた。  
どうやら、後者に対するものだと思っただけ。

というか、そうだとすると、初体験なのに、その積極性はどうかと思う。

彼女らしいと言えば彼女らしいが、初めてなら初めてらしい態度を見せてもらいたいと思うのは、男の勝手だとも言っただろうか？

「まずは、上からね？ ああ、大丈夫、ちゃんと私も脱ぐから」

そんな僕の思惑とは裏腹に彼女はどんどん推し進めて、あっさりと僕の上着を取り払う。

既に、僕に抵抗しようと言う意思は無い。

なんだか、めんどくさい。

とりあえず、もう、好きなようにしてください。

そんな感じだ。

「あら、抵抗なの？ うーん、それはそれで寂しいわね」

そんな僕を見て、彼女は、肩透かしを食らったような顔をしている。  
とりあえず、抵抗している人相手に燃えると言っただけ、人としてどうかと思う。

どうして、彼女が女で僕が男なんだろう。

逆だったら、絶対に強姦罪で訴えられるのに。

まあ、それなりに証拠を集めないといけないし、丸裸にされた挙句、  
体中をあちこち調べまわされるらしいから、それはそれでかなりの  
屈辱だろうけど。

しかも、名前まで表に出るから、とりあえず、かなり精神的にはき  
つい。

だからこそ、泣き寝入りがあるんだろうけど。

無理矢理やられて唯でさえ、死にたくなるぐらいの傷をつけられた  
のに、更に塩を刷り込まれる。

本当に、どこまでも救われない。

おまけに、たまに、捨てられた腹いせに、襲われた、なんていつて、昔の男を訴える奴もいるわけで、おかげで、肩身も狭くなる。たまったもんじゃない。

とはいえ、これは聞いた話。

どこまでが本当なのか知らないけれど。

とはいえ、もし、それが本当なら、やっぱり救われない話だ。

でも、まあ、それなら、やっぱり、僕は男で良かったんだろう。

いや、そういう事で、何かを決めるのは間違いなんだろうけど。

「こら、何考えているのよ？これだけ魅力的な女性が目の前に裸でいるって言うのよ？もう少し反応したらどうなのよ？」

と、不意の言葉で我に帰る。

「うひゃああ」

それと同時に、びっくり。

目の前にいる彼女は、言葉どおり真っ裸。

もう、恥ずかしいところが視界一杯に広がっている。

僕自身も、いつの間にかに、真っ裸にむかれていた。

「いや、驚くんじゃなくて、ほら、興奮するとかしなさいよ」

そう言っただけ彼女は、でん、と効果音が付きそうなほど胸を張る。

恐ろしく豊かなそれは、もう見る物を圧倒する。

圧倒するけど。

「反応しなさいよ！！」

怒られた。

思いつき殴られた。

いや、まあ、恥をかかせたわけだし？

なんだろう。

ここまですると、さすがに肝が座る。

というか、冷静になってくる。

いや、なんだか、青少年としてあるまじき行為だとは思っけれど。

「あら、残念。ほづら、やっぱり無理でしょう？」

「うえ？！」

と思ったのもつかの間。

不意に振ってきた声に驚く。

てか、二人きりだと思ったら、そうじゃなかったの？！

思わず、そう思った言葉が、口に出そうになったが、なんとか押しとどめる。

けれど、その声、どこかで聞いた事がある。

しつとりとして、どこか呑気で、やる気がなくて、現実からつまはじきにされて、最近付き合っていた彼氏に、

『ごめん、やっぱり、俺には無理だよ。君みたいな人の相手は』  
なんて言われて振られた……

「口に出して言ってるわよ、このバカ！！」

「ぐわばっ！！」

痛い。

てか、どうやら、言葉に出していたらしい。

「なんで、こんなところに、いるんですか、振られ女医」

「うるさい！！あんなクズ男こっちから願い下げよ！！ていうか、これ以上余計な事言うと、診断書に要入院って書くわよ！！」

「うわっ、職権乱用！！あそこに入ると、下手したら廃人扱いじゃん！！」

「だったら、余計な事を言うな！！」

「いいじゃん！！こんなわけの分かんないハメ方しておいて、文句の一つや二つや三つ！！」

「っ！？」

「……分かっていたのね」

一人は押し黙り、もう一人はやはり、と言った表情。

もちろん、押し黙ったほうは、万年欲求不満変態ドS校医。

もう一人は、良縁に恵まれない振られ女医。

「ばればれですよ。既に、僕には貴方のデータが入っているんですよ？」

そう、既に彼女のデータは手に入れている。

まあ、盗んだわけじゃなくて、普通に話しをしていただけだが。  
「柳鈴穂。この街の私立病院心療内科の研修医。妹が一人居て、その妹は校医。そして、僕の担当医」

そう、彼女は僕の担当医。

だから、話している内に、いくつものデータを手に入れた。

「柳瑞穂。我が高の校医で、姉が一人居て、医者」

これは、彼女のデータ。

こっちは、日常会話で聞きだした話。

だから、想像するのは簡単。

同じ柳姓で、共通するところが多い。

それを気にしないわけが無い。

それこそ、こんなに猛烈アタックを受けていて。

「柳先生？で、これはどういうことですか？」

につこりと笑う。

けれど、先生はドン引き。

なんだか、怖いもの扱いで微妙に凹む。

でも、多少傷ついてても、譲れないことは確かにそこにある。

「ちゃんと答えてくれますよね？」

というわけで、さくさく話してもらおう。

## 第七話 欲望のサンクチュアリ（後書き）

うあああゝ

中途半端なところで切れたあ……

てか、初登場でこう言うのってどうだろう？

## 第八話 予測していた真実（前書き）

中途半端で切れた奴の続きです。

続きだけど……

めっちゃ少ないです……



## 第八話 予測していた真実

「要するに、僕の女性恐怖症をどうにかしようと思ってやった、と？」

あらかたの説明を聞いた結論がそれだった。

「まあ、要約すればね。ああ、もちろん、だからと言って、別にあなたの感情もなしに、と言うわけじゃないから。瑞穂がお前の事を好きだからこそ、やったわけだし、最初は私もやめとけと言ったんだが、どうにも、惚れた弱みと言うか、盲目さというか、とりあえず、無茶というか、まあ、どうしても、あんたのその困った病気を治してやりたいと言いだしてね。しかも、ショック療法。止めるに止められなくてねえ、困ったものよ」

いや、困ったのは僕の方だ。

完璧に踊らされていたと言っわけだし。

もし、あそこで、鈴穂さんが止めてくれなかったら、確実に食われていた。

例え、僕が反応しなかったとしても。

いや、反応はする。

所詮、男だ。

本能が反応することは分かる。

「状況整理させてもらいました。とりあえず、病院に報告させてもらいます」

だからこそ、陰湿。

というか、許せないこと。

あまりにもひどすぎる仕打ち。

いたいけで繊細な少年の心を打ち砕く悪魔の所業。

これを許して置けるだろうか。

否、許せない。

「とりあえず、院長には、生体実験をさせられましたと言っておき

ます」

「いやあああ！！やめて、お願い、あの爺、人の弱みに付け込んで極悪非道な仕打ちやり放題の糞爺なんだから、何されるか分かったものじゃないわ！！」

「で、瑞穂さんは教育委員会に、無理矢理自宅に押し込まれた拳句、薬を飲ませて、もう人には言えないような事をしようとしたと言っておきます」

「ちよっ！！それは、さすがに冗談じゃすまないわよ！！」

「二人とも？しっかりと反省してください」

僕は、にこりと笑ってそういう。

こちらに、身の危険をあそこまで感じさせたのだ。

自分もそうなければいい。

もちろん、本当に言う気はないが。

元々の原因は僕にあるわけだし。

僕が、女性恐怖症になてなければ良かったわけだし。

「分かった。交渉しよう。何が望みなの？！お金？それとも、私の身体かしら！！」

「身体！？分かったわ。私の身体好きにしてもいいわ。だから、この事だけは言わないで！！」

でも、なんだろう、これは。

女性恐怖症と言うか、女性不信に陥っても仕方ないような感じがする。

というか、ホントに僕が女性恐怖症と分かって言っているんだろうか。

もしそうなら、かなり問題ありだ。

とりあえず、女性恐怖症なんだから、身体目的になるわけがないだろうに。

ホント困ったものだ。

「もう、冗談よ。悪かったと思ってるわ。医者としてやっちゃいけないことだって分かってるわ。でも、担当医としては、貴方のその

病気を治してあげたかったの」

医者なら医者の領分がある。

患者の事を一生懸命に考える医者が理想だろう。

だけど、考えすぎれば考えすぎるほど、時間はかかる。

そして、その分だけできる仕事も減る。

それは、救える人の数を減らすことにつながる。

だから、その二つを天秤にかけてバランスを取らなくちゃいけない。患者の事を考えつつ、考えすぎない。

自分の能力の範囲内で患者とむき合っ

それが出来る医者が本当にいい医者。

まあ、最低限の腕もいるにはいるが。

それでも、それが出来ない医者が名医とは言えないだろう。

そういう意味では、彼女の事を僕は認めていた。

まだまだ医者としては歳若だけれど、それでも自分の分と言うものを分かってるように感じられた。

今の自分に出来る範囲の事を　もちろん、時には必要な自分の限界以上の力の発揮も含まれる　しっかりとやる。

そんな彼女の事を僕は素直に尊敬していた。

例え、何年以上経っても尚、僕の病気が治せない事を含めた上で。

「気にしないでください。これは、僕自身が向き合わないといけないことですから」

これは、まあ、自分自身が向き合わないといけないこと。

彼女のせいにはならない。

「でも、一人で何でも解決できるほど人なんて物は強くないのよ？　貴方だって分かっているはずよ？」

「それでも、誰かに手を差し伸べられたとしても、それでも、僕が向き合わなくてもいいって言うわけにはなりませんよ」

僕だって、全部何もかも一人で解決できるとは思っていない。

絶対に誰かの手助けが必要になるときはある。

だけど、だからと言って、弱さをいいわけにして、見えないふりは

できない。

どんなに辛くても、苦しくても。

それが、僕自身に出来る僕の罪滅ぼしでもあるんだから。

「こら、難しい顔をしちゃだめよ」

「え？」

いきなりぎゅっと鼻をつままれた。

「何かと向き合うんだったら、もう少し余裕を持たないとね？じゃないと身が持たないわよ？」

そして、そう言っただけでこりと笑う彼女。

瑞穂さん。

やはり、そういうところは叶わないと思う。

一瞬で何を考えているのかを当ててしまう。

こと細かくまでは無理だろうが、それでもおおその見当はつけられてしまう。

「別に無理はしませんから大丈夫ですよ」

嘘。

絶対に僕は無理をする。

何が何でも手に入りたい物、守りたい物があつたら、僕は頓着はない。

自分の身体が悲鳴をあげようが何しようが無理矢理にでもつかみ取ろうとする。

だけど、そんな事を言いたくはない。

例え、すぐにばれる嘘であろうと、自分から進んでそんなことはいいたくなかった。

「はいはい、分かってるわよ。君がそういう子だって言うのはね」  
彼女はぎゅっと僕を抱き締めると、頭をぽんぽんと叩く。

鈴穂さんも優しい表情で僕を見ている。  
守られている。

思わずそう思ってしまう。

でも、それはきつと事実で、僕がどんなに逃れようとしても逃れら

れない現実だろう。

僕は弱い。

この二人に守ってもらわないと生きていけない。

そこまでは、言わないけれど、僕が僕でいられているのは、この二人による影響が大きいだろう。

それだけ、本当に良くしてくれている。

僕にはそんな価値などないと言うのに。

全ては自分が招いた業の結果。

それだけなのに。

## 第九話 揺ぎ無い答え

「結果だけ聞いわ、どうなったのかしら？」

月曜日。

僕は、多少迷ったが、結局秘密基地を選んだ。

絶対聞かれると分かってはいたが、だからと言って、ややこしくなる可能性大な保健室へ行く気はどうしても起きなかった。

「まあ、取って食われるような事だけはなかったよ」

「へえ、意外ね。なんとか守りきった、って事かしら？」

「まあね」

とりあえず、ここは適当にお茶を濁すしかないだろう。

まさか、本当の事なんて言えない。

まあ、そもそも、女子相手に言うようなネタではないんだけど。

それでも、言ってしまった事だから、どうしようもない。

後悔後立たず、とやらか。

本当に自分でも思うがデリカシーのかけらもない人間だな、僕と言う人間は。

「にしても、何が気に入らないわけ？分不相応な美人じゃない。それとも、性格が悪いとか言うわけ？」

そして、ついでに言う美人の申し出を断る変人。

「いや、そんなことはないよ。うん、瑞穂さんはとってもいい人だからね。ホントにまつすぐな人」

「じゃ、家事が全然だめ、とか？」

「ううん、部屋はすごく綺麗に片付けてたし、料理も上手。毎日びっしりとしたシャツを着ているところから、洗濯とかアイロンがけもばっちりのはず」

「じゃあ、何が気に食わないのよ」  
「そうなのだ。」

彼女は完璧と言えば完璧なのだ。

仕事をやらせれば、校医の仕事はしつかりとこなすし、家事も万能で、性格も多少S気が強いけど、悪い人じゃない。

そして、極めつけはスタイルのいい美人。文句のつけようがないのは、確か。

だから、彼女の言うことはいちいち分かる。

何故、彼女を拒否するのか。

何故、そんなに嫌がるのか。

理解できるわけがない。

僕自身、何がいけないのか分からないぐらいなのだから、他人してみれば苛立ちを隠せないのは良く分かる。

だけど、それでも、やはりどうしても、僕は彼女の手を進んで取るうとは思えないのだ。

「分からないよ」

偽らざる本心。

納得させる手段がないのなら、それを言うしかないだろう。

嘘を付くのが元来へたくそな僕だ、適当な嘘を付いてうまく誤魔化せるとは思えない。

「何がいけないのかは分からない。でも、分からないから、何かするわけにはいかないんだよ。瑞穂さんは、外見じゃなくて心を見て、一緒に居た時間、空間を見て、気持ちをぶつけてきてくれている。だから、見た目とかそんなじゃなくて、一緒に居た時間や空間、ぶつけてくれている心を見て、それで決めたいんだよ」

でも、言える事だつてある。

真剣な気持ちをぶつけてきてくれている。

適当な気持ちなんかじゃない。

僕の病気とも言えない物のくせに、未だに治らない物を知りながら、それでも、それに臆することなく、気持ちをぶつけてくれた。

それを、適当な気持ちで返したくない。

後悔しないためにも。

真剣な気持ちには真剣な気持ちを、それが僕の信念。

まあ、だから、逆に適当なら、こつちも適当、そんな感じの反応をすることも十分にあるのだけれども。

「ふーん、中々考えてるのね。でも、冗談抜きでその言葉臭いわね」  
「悪かったね。自分で言つてて、恐ろしく恥ずかしかったよ」  
でも、そうやって茶化されると、本当に恥ずかしい。

素直な気持ちなだけに余計に。

「まあ、聞いてて気持ち悪かったけど、でも、いい事だと思うわよ？それこそ、私の顔や身体目当ての胸糞悪い奴らに比べたらね」  
それでも、言うだけの価値はあったらしい。

まあ、僕としてはそんなものと比べられるのはたまったものじゃない。

でも、と思わずにはられない。

僕が多少変わっているから、そうなっているだけで、そうじゃなければきつと僕も彼女の言う『顔や身体目当ての胸糞悪い奴ら』になつていたかもしれない。

僕が、女性恐怖症じゃなければ、きつと何も考えなかっただろう。

何も考えず、ただ可愛いから、綺麗だから、スタイルがいいから、それだけで選んだりしていたかもしれない。

だから、それを否定することは出来ない。

たまたまそうならなかっただけで、そうなる可能性は確かにあったのだから。

それにやっぱり美人さんは好きだし。

否定する資格なんて持ち合わせていない。

「ありがとう」

だから、今の僕に言えるのはせいぜいその程度の事。

否定も肯定も出来ないそんな中途半端な言葉。

まさしく今の自分を表している。

立ち上がりながらも前へと進めていない、進もうとしていないそんな現状。

自分の過去への決別が出来てない、やりきれてないそんな中途半端



な現実。

もしかしたら、そんな自分だからこそ、伸ばされた手を握り返せないのかもしれない。

いつまでも、後ろ向きな自分がまっすぐ前を向いている彼女の傍にいられるわけがない、と、そんな自信なんてない、と、そして、去られたときの悲しみと出来た心の傷と向き合いたくない、と。

もしそうなら、本当に情けないだろう、僕と言う人間は。

自分の事しか考えてない卑怯で最低の人間。

生きている価値なんてない。

死んでしまったほうがいいだろう。

だけど、そんなことを考えたくはない。

例え、僕の本当の姿がそうだったとしても、それでも、僕は自分を信じていたい。

僕の事を好きになってくれた彼女のためにも。

そして、自分のためにも。

踏み出せるかもしれない一歩のためにも。

そのためには、自分の事ぐらいいは信じてやろう。

そう思った。

## 第九話 揺ぎ無い答え（後書き）

これにて、第一章終わりですww

## 第十章 罪と罰と贖罪（前書き）

二章開始です。

で、しょっぱなから、暗いですが、次は戻りまふww

## 第十章 罪と罰と贖罪

文化祭の準備は着々と進んで行く。

僕も当然クラスの準備に追われていた。

だから、自然と秘密基地にも、そして、保健室へと足が向くことはほとんどなかった。

とはいえ、とりあえず、瑞穂さんとの微妙な関係はどうにかなった。一応、名目は恋人になってしまった。

とりあえず、僕も彼女も好きでもない相手にキスを出来るような人間じゃない。

そうになると、自然と恋人、と言うものに落ち着いてしまった。

もちろん、だからと言って、どうこうするつもりは、やはりない。

恋人の権利、なんて言うものを振りかざす気も毛頭ない。

同じだけの思いを、なんて言うつもりは毛頭ないけれど、それでも自分の思いをしっかりと彼女と向けて居ない以上、そんなものを行使する権利は僕にはない。

だから、時々あるお誘いも当然拒否している。

ある意味平和な学校生活。

秘密基地でのおかしな逢瀬が始まる前と同じ生活。

それが退屈になるんじゃないかと、最初は思っていた。

正直言つて心労がひどかったのは事実だ。

辛いかわけがなかった。

だけど、それでも、たのしくなかったわけじゃないし、確かに充実した生活ではあった。

それがいきなりごろつと変わるのだ、多少不安はあった。

けれど、そんな不安も杞憂で、あっさりと僕は元の生活に戻れた。

そう、この瞬間までは。

こうしているこの瞬間以外だけは、どうしてもそれとは切り離されてしまう。

たぶん、それは一生変わらないと思う。

どんなに僕が前へと進んでも、全く違うものの考え方をするようになったとしても、それでも変わらないと思う。

それだけ、僕にとっては重要で、そして、忘れられないもの。

僕の根底に根付いている過去の出来事。

たった一つの儚い生。

「ちょうど一年振りだね。元気してたかい？」

無駄なことだと分かっているけど、そうすることが無意味だと分かっているけど、それでもそうしてしまう。

それはきつともう本能的な物で、理性でどう抑制しようとしても、やってしまう事だろう。

「新しい世界での君は幸せかい？ そうだといいいんだけどな。僕？僕は、まあ、変わらずやってるよ」

もうここにはいない、遠い世界の住人。

遙か彼方、今の僕ではどう足掻いても辿りつけない場所にいる。もちろん、そんな世界があるのならば、という前提条件月だが。

そう、死後の世界なんてものが。

「そうそう、君のもう一人のお姉さんに会ったよ？ うん、君の言う通り綺麗だったよ。本当に綺麗な人。外見だけじゃなくて、魂まで綺麗な人。君が嫌っていたのが、分からないくらい素敵な人だったよ？」

死んだ人間に言葉は届かない。

どんなに願っても祈っても、そこにあるのは悲しい現実。

もう二度と交わる事のない言葉。

だけど、それでも、僕は問いかけてしまう。

弱いから。

未だに、過去に縋り付いてしまっているから。

「ホント、世界中の男達はどれだけ目が節穴なんだろうね？ 君の二人のお姉さんは、もうびっくりするくらい素敵なのに。そういえばさ、最近、鈴穂<sup>すずほ</sup>さんがまた振られたんだけど、ふざけんじゃねえ、

って感じじゃない？あんな素敵な人を振るって、どんだけ自分偉い  
と思っただよ、って感じだし。鈴穂さんが振るなら良く分かるん  
だよ？あれだけ素敵な人だもん、よっぽどの人じゃないと釣り合わ  
ないだろうしさ。なのに、振るんじゃないよ、振られるだなんて、  
もうふざけんな、って感じ。とりあえず、今度夜討ちに行っちゃお  
うか？」

くだらない冗談。

女性恐怖症。

そんなものがある中で、くだらない冗談を気取らずに言えたのは、  
遠い世界に旅立った十人一人だけ。

自然体でいられた。

いさせてくれた。

「で、瑞穂<sup>みずほ</sup>さんは瑞穂さんで、僕に告白してくるし。ホント女性と  
してはもう最高と言ってもいいのに、見る目がなさすぎるよねえ？  
僕なんかよりも、もっともいい男なんているのにさ？いや、ま  
あ、僕を選んでくれた君を否定するわけじゃないよ？そう、うん、  
なんだ、あれだ、歳相応の男と付き合えって事。ああ、だからと言  
って、年増扱いしているわけじゃないよ？要するに、こんな子供な  
んか相手にせず、大人でもっと素敵な紳士さんと付き合いなさいっ  
てこと」

それは、今でも変わらない。

今も昔も変わらない。

バカみたいに話せる。

そう、昔の恋人と。

死んでしまった恋人。

死なせてしまった恋人。

そして、僕が殺してしまった恋人を。

「あんた、何してるの」

「っ！？」

不意の声。

思わず、びっくりと身体を振るわし、言葉にならない、それこそ声になったかどうかも差だけ出ない音だけがのどから漏れた。

それぐらい、驚いた。

そして、それ以上に迂闊だった。

「て、聞くまでもないか。そっか、そうよね、あんたの名前は庵原夕貴だったわよね。つまり、あの子が言ってたユーキてのが、あんなって事だったわけだ？」

他人には誰にも知られたくない過去。

傍から見たらただ痛い人にしか見えないそんな姿をしたのだ、もう少し周りに気を配るべきだった。

そして、何より、彼女の知り合いに見られた事がまずい。

とはいえ、まさか、知り合いだとは思わなかった。

彼女が、良く彼女が言っていた少女の名前。

「じゃあ、君がルリだったんだね。そうか、柚子原瑠璃。どうしても、気づかなかったんだろね、良く良く考えてみれば、あれだけヒントがあつたというのに」

何故分からなかったんだろう。

良く、彼女は言っていた。

自分の友達であるルリは、自分と同じく美形が大嫌いな美少女だと言っていた事を。

そして、彼女と同じくして非常に裕福な家庭で生まれ育った、と。

まあ、とはいえ、その友達であるルリは、彼女の美形嫌いが伝染して美形嫌いになったらしいのだが。

彼女の延々と続く美形に対する呪詛の言葉を聞き続ければ、嫌いになってもしかたないだろうが。

ちなみに、僕は美形は嫌いじゃない。

むしろ、大好物。

もちろん、女子限定だけど。

けれど、その友達であるルリは、彼女の言葉を聞いているうちに嫌いになったらしい。

一人っ子で、彼女と同じく友人の少なかったルリが、彼女の言葉をあまりにも素直に聞き入れすぎてしまったのが、一番の原因だろうが。

ちなみに、同じく一人っ子で、友達の少ない子である僕が、そうならなかったのは、自分が美形じゃないので、それに対する憧れがあるのと、彼女が延々と言い続けた呪詛の言葉に出てくる美形が言った言葉を一度も耳にした事がなく、ピンとこなかったからであるが。身近か身近じゃないのか、それで結構変わるものなのだ、感じ方はそして、身近に感じすぎたルリは、美形嫌いになり、自分自身の容姿も嫌いになった。

それを考えれば、目の前にいる彼女は、確かにそれに当てはまる。まさしく、彼女こそルリだ、と思うことはしなくても、多少、そうではないのかと疑問を持つべきだったし、多少の探りも入れるべきだった。

彼女の知り合いには、できるだけ会うつもりはないし、関わるつもりはなかった。

担当医である鈴穂さんや校医である瑞穂さんは仕方ないとは言え、彼女との接点はいくらでも切ろうと思えば切れたのだ。

それをしなかった自分の甘さ。

なんと、情けないのだろう。

「そうよ、私がルリ。あんたが殺したあの子の、かなほ奏穂の親友だったルリよ」

そこに居る少女は、ルリは、深い憎しみと殺意を込めた瞳をしていた。

だが、僕には、それを嗜めることはできない。

そう、確かに僕は、彼女を、奏穂を殺した。

この手で、必死になんとか生きようとしていた彼女を殺した。

だから、否定することは出来ない。

その瞳を、僕はまっすぐと受け止めなくちゃいけない。

「ずっと聞きたかった。なんで、あの子が殺されたのか。殺されな



いといけなかったのか。恋人であるあんに

その気持ちは良く分かる。

僕だって、そうだ。

何故、彼女が死ななくちゃいけなかったのか。

彼女が死ぬ必要なんてなかった。

彼女は生きていないといけない人だった。

僕だって、心の奥底から、生きていて欲しいと、そう願っていた人だった。

だけど、僕はそんな人をこの手で殺した。

彼女がそう望んだから。

彼女が死にたいと言ったから。

延命措置なんてされたくない、自分自身で生きようとしているんじゃないくて、生かされている、無様に生かされているなんて嫌だから、そんな姿でいたくないから。

そんな姿で居るより、自然に死んでいきたかったから。

だから、僕は彼女を殺したんだ。

彼女をこの世に繋ぎとめていた医療器具のスイッチを根こそぎ切っていた。

それは、他のなんでもない、純然たる殺人。

もちろん、彼女は尊厳死を求める書類を作成していた。

その書類とて、ちゃんとした手順を取って、弁護士を通じて作成した。

だから、その書類はしつかりとした効力はある。

それを、担当医及び病院側が容認したら、という条件が付くが。

けれど、担当医と病院側は渋り続けた。

最近では、尊厳死を許容するような考え方もちらほら出てきつつあるが、完全に容認されている思想でもない。

多少リスクのある問題。

表に出たら、かなり騒がれることは間違いない。

それぐらい、繊細な問題。

だから、どうしても、簡単にゴーサインを出せなかった。

それに、尊厳死をさせなかったとしても、延命措置をしたところで、そんなに彼女は長くは持たない事が分かっていた。

だったら、そこまで長くないんだったら、リスクを冒してまで、尊厳死なんてものを実行しようとは思わなかった。

そして、彼女の家族もそうだった。

彼女が尊厳死を望んでいるのは良く分かる。

目の前に居る自分の子供が、妹が、もう普通に生きている状態だと思えなかった。

そんな状態で居続けるのが、彼女の幸せだなんて思えなかった。

だけど、だからと言って、彼女の思いを汲み取るだけの踏ん切りはなかった。

出来ればしてやりたいけれど、するだけの勇気が出なかった。

結局、彼女のためとは言え、やっていることは、人の命を消すこと。人殺しと何も変わらない。

自分の大事な家族を殺すことと変わらない。

そんな事が出来るわけがなかった。

だから、代わりに僕がした。

彼女が望んでいたことだから。

自分の大好きだった人が、自分の望まない姿でいるのを見ていたくなかったから。

彼女が無様な姿をさらし続けているのを見たくなかったから。

だから、彼女を殺した。

そう、殺したのだ。

だから、僕は裁かれるべき人間だった。

殺人は人が一番犯してはいけない罪。

しかも、自分が一番愛していた恋人を殺したのだ、重く裁かれるべきもの。

なのに、僕は裁かれなかった。

そこにあった人殺し、という罪はなくなり、ただ、延命措置の甲斐

なく事切れたという嘘の報告。

そう、もみ消されたのだ。

病院側にとつても、そして、彼女の家族にとつても表に出すわけにはいかないことであると同時に、ほっとしている事でもあったのだから。

彼女が望みながら、それを実践できなかった。

しっかりとした手順を取って、効力のある書類を作成しながら、実行できなかった病院側と奏穂の願いをかなえてやりたいと思いが、尻すぼみして、結局実行出来なかった家族側、どちらとも後ろめたさがあった。

だから、隠した。

元々、そんな事が起こる余地もなかったとした。だから、問題になりようがなかったのだ。

どんなに、僕が人殺しであろうと、延命措置中の彼女にとつて最後の命綱の医療器具を止めていようと、最初から、当の延命措置がなかったら、延命措置が意味を成さず、そのときに死んでいたのなら、僕が止めたというアクションはまず起こりえないのだから。

けれど、それでも、隠しきれる問題でもない。

そう、例えば、ルリのように近い人間ならば。

彼女は知っていたのだ、そして、駆けつけようとしていたのだ、奏穂の元へ。

せめて、最後の別れをするために、延命措置で何とか命を繋いでいる彼女の元へ。

延命措置は、きっと本人のためじゃない。

ただ、死別となる人達に一刻の猶予を、別れをするための猶予を与えているだけに過ぎないんじゃないのだろうか。

それが、本当に真実なのかどうかは、人によって違うだろうが、ルリにとつては、きっとそうだったんじゃないかと思う。

もし、僕が延命措置を止めていなければ、ルリは奏穂と最後の別れが出来た。

生きているとは言えないが、まだ死んでもいない奏穂と別れが出来ていた。

けれど、ついたときには、既に彼女はもうこの世にいなかった。延命措置をされているはずの彼女は、もう死んでいた。

まだ、もう少し猶予があったはずなのに、間に合わなかった。

本来あるはずだった時間が奪われた。

殺されたのだ。

彼女はそう思っただろう。

僕が、彼女を殺したと思っただのと同様に。

彼女が尊厳死を望んでいた事を知らないルリは。

「教えなさい、なんで、あの子を殺したの？どうして、延命措置を止めたのよ」

きつと誰かから聞いたのだろう。

必死になつて聞き込みをしたのだろう。

もう少しで手にする事の出来たはずだったのに、最後の最後で奪われた時間のために。

「彼女が、それを望んだんだ」

答えるべきか、答えぬべきか、迷いはした。

奏穂は、ルリには言わなかった。

何故、言わなかったのかは、知らない。

どうして、相談しなかったのかは知らない。

けれど、言わなかったのは事実だ。

なのに、僕が言っていたのかどうか、分からなかった。

けれど、これ以上何も言わなければ、それはそれで彼女を苦しめる

事になると思う。

行き先のない、行き場のない感情をいつまでも持っていると、その感情に溺れて、前も後ろも見えなくなってしまう。

そんなことを奏穂が望んでいるとは思えなかった。

「奏穂は、尊厳死を望んだ。延命措置をされたくない。ただ生かされているだけ、機械に生かされているのが嫌だと言っていた。だか

ら、それを叶えてやったんだ。医療器具のスイッチを止めて、彼女を殺した」

だから、言おうと決めた。  
真実を。

「だから、君がそれを恨むなら、好きなだけ恨んでもらって構わない。どんな罰も受ける。それは僕が背負うべき罪だ。僕が人殺しだと言う事実にはなんら変わりないんだ。書類上でどんな事が書かれていようとも」

そして、それが今出来る僕の罪滅ぼし。

誰も裁いてくれなかった。

彼女を殺した僕を誰も攻めず、裁かなかった。

むしろ、心配してくれた。

鈴穂さんも、奏穂の事があるから、僕の事を見ている。

無料での診断。

いくら、カウンセリングだけとはいえ、それでも、結構な額になる。それが、毎月となると家計に多少響くことになる。

それに、僕自身、親に、自分の病気のことは言っていない。

元々、僕が病院に行っていたのも、原因不明の体調不良だったわけ  
で、それも、当時診察した医者は単なる気のせいですませて、親も  
そうだと思い込んでいた。

だけど、その当時、ただの研修医だった鈴穂さんは違った。

医者としては珍しく熱意を持って診察してくれたおかげで、僕はそ  
の当時の体調不良の原因がストレスから来るものだと分かった。

人間が怖い庵原夕貴。

理由は分からない。

ただ、人の傍にしていると恐ろしく緊張する。

そして、恐怖する。

不安になる。

自分の居場所が分からなくなって、自分自身が分からなくなって、  
混乱してしまう。

そんな僕に気が付いてくれたのが鈴穂さんだった。

鈴穂さんだけだった。

そして、そんな鈴穂さんが引き合わせてくれたのが、奏穂。ルリと言う少女しか友達のいない妹のために、そして、対人恐怖症の僕のために引き合わせた。

何かを変えるために。

色を失いつつある、生きる気力を失いつつある妹のために。

一人でいる事を当たり前と考える、一人でいる事こそに安心感を求める僕のために。

だけど、その結果は片方には希望を、片方には絶望を与える事にしかならなかった。

奏穂は希望を手にした。

悲しくて苦しくて怖くて暗い闇の中にいながらも、それでも希望を手にした。

ほんの一瞬の安らぎを手にして、闇の終わりを手に入れて、安らかに眠った。

そして、逆に僕は、更にひどい対人恐怖症を手にした。

失われていく体温。

奪ってしまった命の炎。

目の前で死んでいく最愛の人。

自分が殺してしまった最愛の人。

つかの間の幸福のために手にして閉まった暗い暗い闇。

だから、鈴穂さんは、僕に手を差し伸べる。

自分が犯した罪に対する贖罪じやくざいのために。

後ろめたさから。

「お断りよ。確かに憎いわよ。殺してやりたいぐらいだわ。だけど、だから、罰なんて与えてあげない。一生苦しみなさい。一生そうやって悔いて、苦しんで、絶望してなさい。私は絶対に許さない。何があっても許さない。だから、絶対に罰なんて与えてあげない」  
「そう」

そして、僕もまた、その後ろめたさから、過去の苦しみから逃げ出したかった。

そのために、彼女に縋ったが、それも無駄だった。

深い深い憎しみを背負った彼女は、贖罪をすることすら許さない。

それほどまで、大事だったんだろう、奏穂の事が。

若くして死んでしまった彼女は確かに不幸。

絶対に幸せだったなんて言えやしない。

だけど、それでも、家族に愛され、友人に愛されていた彼女は、全くの不幸だったわけじゃない。

ほんの少し、人が見たらホントにちつぽけに見えるぐらいだけど、それでも確かに幸せも手にしていたんだろう。

心の底から愛される幸せを手にはしていたんだろう。

「じゃあ、僕は帰るよ。君も奏穂に会いにきたんだろう？ ゆっくりと話してあげればいいよ」

僕はそう言つて、ルリの前を、奏穂の前から去る。

「あ、ついでに一つお願い。学校にいるときだけでいいから、変わらず扱ってくれない？ 保健室とあそこ、そこしか、僕の居場所はないから」

最後にその言葉だけを投げかけて。

## 第十一話 女神様の悪戯な手

「あら、ばれちゃったのね？全く、変なところで抜けてるんだから」  
昼休み、一応名目上は相変わらず恋人になっている彼女のところに  
来ていた。

まあ、要するに保健室なわけだけど。

「否定はしませんが、まさか来るとは思ってませんでしたからね。  
あそこに行くところは誰にも見られたくないんで、わざわざ時間を  
ずらしてましたし」

誰にも見られたくない。

そして、それと同時に、会いたくない。

特に彼女の両親とは。

だから、時間をずらしていたのに、まさかずらした分だけど、損を  
するとは思わなかった。

こうなるなら、もう少し早くか、遅くに来れば良かった。

そうすれば、かち合わせ、なんて事もなかったし。

「でも、まあ、ちょうどいいんじゃない？いつまでも隠し通せる事  
じゃないもの。下手にこじれる前に、まあ、あるかどうかは分か  
ないけど、親しくなる前にばれといたほうが、あとくされは無いし」  
まあ、確かに彼女の言うことには一理ある。

下手に複雑な状況になるよりも、ただ、距離を取られるぐらいの方  
がちょうどいいだろう。

「そうですね。で、この手は何？」

とりあえず、そのことはもう気にする必要はないだろう。

と言うか、正直どうでもいいと言えはどうでもいい。

あくまでも、奏穂かなほの友人だった、というだけで、今までだって大し  
てそんなに親しいわけでもない。

長年来の親友ならまだしも、その程度だったら、わざわざ心を痛め  
る必要はないだろう。



それに、それよりも、もつと気になる事もあるし。

「随分悪戯好きな手ですね？」

僕の服を脱がそうとしている本当に悪戯大好きな手。

「あー、えっと、何て言うか、その、戴きます？」

「食うな！！」

その手を思いつき叩き落とす。

全く、彼女と言ったら、本当に油断も隙もない。

まあ、そんな事を言ったら言ったで

『油断したり、隙を見せるほうが悪い』

なんていわれそうだが。

本当に、女の人って得だ。

男がやったら、それも完全に犯罪だと言うのに。

「いいじゃない、恋人同士なわけだし。プラトニックな愛情だけじゃなくて、ちゃんと身体のお付き合いもしないとダメなのよ？」

「まだ一ヶ月も経ってないのに、そういうのは早いと思うんですが？」

「あら、堅いわねえ。いいじゃない、愛がそこにちゃんとあれば、慈しみの心があれば、期間なんて関係ないのよ？」

「それでも、慎重深さも忘れちゃダメだと思いますけど？」

まあ、言うだけ無駄だろうが、とりあえず、言わないわけにもいかないだろう。

どちらにしろ、拒否する気は満々なわけだし。

「分かってないわね。慎重深さ、それも大事だけど、それ以上にもつと深いところであっていているっていう安心感とか絆の方が大事なのよ？お互い、誰にも見せない秘密を見せ合う。そう言うのって結構大事なんだから」

まあ、その気持ちは分からないでもない。

分からないでもないが、なんともおかしい感じがした。

やっぱり、どうしても本来あるはずの男と女のやりとりがあべこべになっている感じが否めない。

最近は、男と女の立場が逆転しつつあるとは言っけど、ここまで真逆なのは珍しい方じゃないだろうか？

「というわけで、戴きます」

「ぎゃあああああああ！！」

そして、手際良く彼女は僕の制服を脱がして行く。

「もう、騒ぎすぎ。誰か来たらどうするのよ？」

「そのときは、無理矢理先生に手箒めにされそうになりましたって言うから大丈夫です」

そこらへんの対応はばっちりだ。

抜かりはない。

「貴方ねえ……」

「でも、事実でしょう？」

あきれたような目で僕を見るが、事実は事実。

最初のキスだって無理矢理だし、今、こうして押し倒されたのも無理矢理。

僕の意味は全くない。

「そっか。その手があったか。未成年に対して成人が何らかの性的行為をした場合は、罰せられるんだっけ。それが少年相手に女性だったとしても」

そうだ。

そういえばそうだった。

ずっと、自分が男だから守られる側じゃないと思ってたけど、その前に僕は未成年者。

守られるべき存在。

「いや、まあ、確かにそうだけど、まさか訴えたりしないでしょっかね？」

「えー、どうしよっかなあ？」

初めての立場逆転。

なんだろう、これは。

このいいようもない高揚感と解放感は。

自由って言うのは、こんなに素晴らしいものだったのだろうか。  
長らく不自由しか知らなかった僕には、分からない。

いったい、自由がどんなものだったのかさえ覚えていない。

だけど、今、僕は自由だ。

何にも縛られることない。

ああ、なんて素敵な事なんだろう。

「そう、そうね。もう、止まっている暇なんてないのよね。というわけで、さっさと既成事実を」

「って、どうしてそうなる!？」

そんな安穩もつかの間、さっそく飛びついてくる。

「いいの、訴えてもいいの!？」

「訴えられるのは困る。そう確かに困る。だけど、ねちねちと言葉責めされるのは、趣味じゃない。というわけで、食べれる内に食べておこうかと」

「逆効果!？」

どうやら、逆に火をつけてしまったようだ。

「ちょ、ま、待って。訴えないから、訴えないからちょっと脱がすの待って!！」

「ふふふ、もう遅いわ。やると決めたら、止まらない。それが私の信条だもの」

「何、その暴走列車みたいな信条!？」

「おいしく戴かれなさい」

「いやああああああああ」

「二人して何やってるんですか？」

不意の侵入。

そして、静かなツツコミ。

「……………」

そして、固まる二人。

もちろん、僕と瑞穂<sup>みずほ</sup>さん。

「て、なんだルリか」

それと同時に氷解。

いきなりの侵入者。

それは、ルリだった。

「いや、いきなり呼び捨てにしないでくれる？」

「うん？ ああ、ごめん。どうも奏穂が言ってたのがうつっちゃって、つい。苗字で呼んだほうがいいかな？」

いつもいつも、奏穂は彼女の事をルリと呼んでいた。

それがどうしてもうつってしまったのだ。

とはいえ、確かに失礼と言えば失礼。

てか、確実に失礼。

「いや、別に名前でもいいけど、呼び捨てだけはやめてもらえるかしら？」

だから、苗字で呼ぼうと思ったが、そこまではいかなかったらしい。

「うーん、じゃあ、ルリっちでも、いいかな？」

「……何、そのセンスもひねりもないあだ名は」

どうやら、それはそれで気に入らないらしい。

まあ、確かにセンスがないのは認めるが。

だが、言わせてもらえば、あだ名なんてものをつけようとしたこと自体一度もないのだ。

経験もないのに、いきなりひねったものを出世と言うのが、無茶と言うもの。

初体験なんだから、多少は多めにみてもらいたい。

なんだってそうだ、初体験と言う物は緊張するものなんだ。

成功するとは限らない、というか失敗する可能性が大きい。

だから、広い心で見てもらわないと。

「にしても、ホント、性格変わったわよね？ この前とは大違い。おどおどびくびく、何この図体のかくてきしよい小動物は、って思っただけ、こっちが地でしょう？」

なかなか言いえて妙だ。

確かに、彼女の前の僕はそういう感じだっただろう。

怯えていた。

彼女と言う少女、というか恐怖の対象でしかない人間と言う物が身近にいると言う事に。

「うーん、どうだろう？どっちも地じゃないかな？怖い物を前にすると怯える。でも、どっちでもないものの前だったら、さほど気にしない。そういう感じじゃないかな？」

でも、今は違う。

彼女は恐れる必要はない。

奏穂の友人だった。

それだけで、全く別の物になりかわる。

だからといって、友人になるわけでもないけれど。

そこはまた別の話し。

「ああ、確かにそんな感じよね、夕貴ゆきは。怖い物に対しては敏感だけど、それ以外の事には無頓着と言うか、開き直ると、投げっぱなしジャーマン……ポテトだっけ？そんな感じの事をするわね」

「いや、違いますよ。てか、なんで、そんな誰も分からないようなプロレスネタなんか使うんですか。そもそも、ちゃんと分からないんだったら最初から言わないでください」

「うーん、とりあえず、ここはボケておくべきかな、って女の直感が。いやはや、ごめんねえ」

「役に立たない直感ですね」

「あら、女の直感を舐めてると怖いわよ？」

「そんなのは重々承知ですよ」

女の勘が怖いのは、もう経験済みだ。

鈴穂すずほさんしかり、目の前の瑞穂さんしかり、奏穂しかり、かなりの恐ろしい経験がある。

思い出すだけでも、震え上がってしまうような事だつてあった。

なので、舐めて掛かるようなことはしないが、それでも今回は役に立ってないには違いない。

「ホント全然違うわね。全く、今のあんた見てたら、すぐに分かつ

たわよ。あの子が言ってたユウキにそっくり」

「あ、呼び捨てやめてくださいね？名前で呼ぶのはいいんですけど、呼び捨ては、瑞穂さん限定ですから」

一応、名前を呼び捨てにしているのは、なんだかんだで恋人の瑞穂さん限定。

特別、と言うことだ。

まあ、そんなことを彼女が気にするかどうかは分からないけど、僕なりのけじめだ。

「はいはい、悪かったわよ。たく、その飄々ぶりったら、なんと言うか、まあ、一筋縄では全くなさそうね」

「そうですか？てか、奏穂は、僕の事どういう風に言ってたの？」  
飄々としている。

それは、いい意味なのか悪い意味なのか、どっちなのだろう。

一応、恋人なんだから、嫌っていないでくれるとは思っただけど。

「そうね、優しくて、おもしろくて、なよなよとして弱そうだけど、意外と頼りになるんだけど、いつも何を考えているのか分からない人だって言ってたわよ？」

うーん、なんと言っか

「微妙ね」

瑞穂さんがそういった。

だけど、その通り。

確かに、微妙。

というか、最後の奴は余計だ。

「でも、確かにその通りね。優しいし、おもしろいし、なよなよとしてなんだか頼りなさそうだけど、意外となんだかんだで頼りになるし」

「で、考えていることは分かりそうに分からない」

だから、最後のは余計だって。

わざわざ瑞穂さんが言った事に付け加えなくてもいいだろうに。

「てか、そんなことよりも、どうして、ルリっちがこんなところに

いるわけ？」

もう一度センスのかけらもないあだ名で呼ぶと、彼女は眉をひそめたが

「まあ、あんたがあそこに来ないから、こっちに来てみただけよ。てか、あんな事言つといて、しょっぱなから来ないってどういうことかしら？」

あきれたように返す。

いや、確かに、どうということだろう。

あんなお願いしといてしょっぱなから来ないっていうのも、なんか変な話だ。

「いや、先に瑞穂さんに状況説明をしておこうかと。いつ、また迷惑をかけるか分からないからね。鈴穂さんともども」

ただ、どうしても、先にこっちのほうをかたしておきたかった。これから先は何がどうなるかは分からない。

だから、不安な材料は出来るだけ片付けておきたかった。

「迷惑？意味がわかんないんだけど？」

けれど、それは彼女にとっては分けのわからないことだろう。

何も言つてないんだから当然だ。

僕の病気のこと、そして、彼女を殺してしまった後のことも。

そう、自分の恋人を、最愛の人を殺して、平気で生きていけるほど最低な奴になった覚えもなければ、割り切れるほど大人でもない。苦しまないはずがない。

「いや、君にばれただろう？一応、もみ消してしまった事だから、表に出たら困ることなわけだし、その関係者でもあるからね。一応報告義務はあるの」

でも、それは彼女に話す必要のない事。

関係のない事。

だから、嘘をつく。

瑞穂さんが何か言いた気な表情をするけど、それは無視。

「だから、昨日お願いしといてなんだけど、昨日言つた事は黙って

欲しいんだ。君が僕の事を恨んだり、憎んだりするのは構わない。だけど、それを言いふらすようなことはして欲しくないんだ。そんな事すると病院と彼女の家にも迷惑がかかる。奏穂のためにも、黙っていてくれないかな？」

「随分卑怯な言い回しね？」

そんなことは重々承知だ。

厚顔無恥だと言われても否定できない。

だけど、僕だって自分が犯した罪で、誰かに迷惑をかけたくない。自分のせいで、誰かが傷ついていく姿を見たくない。

「だけど、まあ、黙つといてあげるわよ。奏穂も望んじやないだろうし、先生や鈴穂さんにまで迷惑がかかるつもりはないし、ってか、それぐらい私だって分かってるから、言うつもりなんて最初からないわよ」

「そつか、そうだよな、うん、ごめん」

まあ、そりゃそうだろう。

自分の大事な親友とその家族。

その人達に迷惑をかけるようなことはしないだろう。

どんなに、僕の事が憎かろうとも。

それぐらいの常識はあるだろう。

少々どころではなく、かなり彼女を低く見てしまった。

これは、反省点。

「で、話し合いは終わったかしら？」

「はい？まあ、別に聞きたいことは聞きましたけど？」

不意に瑞穂さんが話しに入ってくる。

さっきまで、黙っていたのに、いったいどうしたのだろうか。

「それは、良かった。じゃあ、これからは、恋人同士の甘い時間になるから、邪魔物は、はい、退散ね？」

そう言ったルリをぽんとドアの方へと押し出す。

「というわけで、戴きます、って、あれ？」

「残念ですけど、もうそろそろ授業が始まるんで、僕も戻ります」



それについて行くように僕も、ドアの方へと既に退避済み。

先生との付き合いも多少長くなった、というか濃くなってきたせいで、だいたいの行動が読めるようにはなってきたている。

「それじゃ、また、今度」

だから、こうして、逃げる事も出来る。

「うゝ、今度こそ、今度こそ、戴くからね!!」

とはいえ、いつまでもは、逃げられないだろうけれど。

## 第十二話 救われない人達

退屈な時間こそ、僕にとって救いの時間。

一刻の猶予。

あまりにも日々に悲しみと絶望が馴染み過ぎて、安穩な生活なんて送れなかった。

だから、退屈な時間こそ僕にとっては平和で救い。

求めてやまない時間。

「うん、随分良くなったんじゃないかしら？」

そう言つて、鈴穂さんは、聴診器を耳から離す。

聴診器と言つても使い方はいろいろあつて、僕の場合は心音の安定度を図るために使っている。

女性恐怖症の持つ僕が、女性である彼女に振られても心音が乱れたりしないか、そういうことだ。

「それでも、やっぱり、顔色はあんまり良くないわね。ホント長い間一緒にいるけど、全く慣れてはくれないのね？」

「綺麗な女性はそれだけで、意識してしまいますからね。特に鈴穂さんのように目の醒めるような美人さんだと、それに合わせて、影響が大きくなるんですよ」

女性だと意識さえしなければ、そんなに影響は出ない。

元々ある対人恐怖症が多少顔を出す程度で、それだつてしっかりと対処すれば、表立つて症状として出るようなことはない。

だから、女性として意識させられるような人以外であれば、いくらでも対処は出来るんだけど、女性として意識させられるような、それこそ鈴穂さんのような美人さんが相手だと、どうしても意識してしまう。

そして、そのまま悪化、と言う感じだ。

それに、やっぱり奏穂の姉妹だと言う事が大きい。

どうしても、彼女と似ているところがちらほらと見えてくる。

そうすると、どうしても、身体は反応する。

拒否する。

思い出してしまう。

暗い暗い闇の中での生活を。

「やっぱり、あの子の姉、だからいけないんでしょうね」

そんな事ぐらい彼女も百の承知だ。

「本当は、私じゃなくて他の人頼めればいいんだけど、任せられる人がいなものね」

それでも、それが出来ないのは、他の誰にも頼めないから。

あまりにも事情が複雑になり過ぎて誰にも頼めない。

ただの精神病ならいくらでも頼めるけれど、原因がはっきりしていて、その原因自体が表に出せないのだ、八方塞もいいところ。

だから、こうして、無意味と思われるもしかたのない事をしている。

「大丈夫ですよ、僕は一人じゃないですから。瑞穂さんがいますし、あの人がいる限り、僕は崩れませんから。今日はありがとうございました、これで失礼させてもらいますね？」

それでも、僕は崩れない。

瑞穂さんがいてくれるから。

彼女がいてくれるから。

だから、大丈夫。

「待ちなさい」

だけど、彼女はそれを制する。

瞳には悲しい色。

何故、そんな瞳を、悲しそうにするのか分からない。

「覚えておきなさい。確かに、瑞穂がいれば、君は一人じゃない。

けれど、その代わり救われもしないのよ、絶対に。あの子じゃ、無理なんだから」

そして、何故そんな事を言うのかも分からない。

今の僕は幸せなんだ。

確かに、未だに僕は彼女との距離を縮められていない。

それでも、悲しみに押しつぶされることはない。  
彼女を殺してしまったときのような絶望はない。

だから、僕は大丈夫。

彼女と居れば、幸せなんだ。

幸せになれるはずなんだ。

「ありがとうございます」

だけど、そうして心配してくれる気持ちがとても嬉しい。

本当に素直に嬉しいと思う。

その気持ちだけでも受け取っておきたい。

「それじゃあ、また来月」

そして、僕は、そう言って、部屋を後にした。

そのまま、家から出ると、視界一杯に広がる中庭を眺める。

既に患者ではない僕は、もう病院にはいけない。

だから、今、僕が居る場所は彼女の家。

実家。

出来れば、行きたくないけれど、実家暮らしの彼女との往診はここ  
でしかない。

それに、目の前に広がる中庭は恐ろしく広く、敷地にある本邸もか  
なりでかい。

これだけの大きさを誇る家なら、そこまで心配しなくてもいい。

彼女の両親に会うかもしれない可能性を考えなくてもすむ。

それに、基本的にその二人は多忙。

家に居ることはまずない。

それを考えると、会うわけがない。

「お久しぶりですね、夕貴君」

「っ!!」

思わず膠着する。

不意の出来事。

ありえるはずのない出来事。

望まぬ出来事。

絶対に起きてはいけないこと。

そう思っていたのに、不意の邂逅。

恐る恐る振り返ると、目の前にいるのは、彼女の両親。

居るはずのない二人。

多忙を極めるはずの二人。

「少しお話がしたいんですけど、構いませんか？」

たおやかな笑みを浮かべてそういう彼女の母親の姿は、住む世界の違いを見せ付けられる。

金持ちと一般人。

嫌でも気づかされてしまう。

「はい、大丈夫です」

出来ることなら逃げ出したい。

だけど、逃げ出せない。

もしかしたら、これは、何かが用意したものなのかもしれない。

僕が前へと進むための布石。

瑞穂さんの未来を進むための関門なのかも知れない。

なら、僕は、逃げ出すわけにはいかない。

それに、多忙なはずの二人がこうして揃って僕の前に居る。

わざわざ時間を作ったのだらう。

それを無碍にするのは、はばかれる。

奏穂を殺した罪人としても、瑞穂さんの恋人としても。

「ありがとうございます。なら、こちらへどうぞ。せっかくお天気もいい事ですから、テラスでお茶をしながらお話しましょう」

二人に従うように、僕は案内されるままに歩き出す。

見上げた秋空は高く、青く澄んでいた。

「まずは、自己紹介からでよろしいですか？奏穂の葬式以来会っていませんし、お互い、知らないことが多すぎますから。私は、夕貴君の知っている通り、奏穂の母の果穂かほと言います」

「私は、父親の譲やうだ」

二人は、そう言ってそれぞれ柔らかい笑みを浮かべる。

嫌味も何もない、穏やかな笑み。

僕が、思い描いていたお金持ちの印象とは全く違う。

「僕は、庵原夕貴です。以前は奏穂さんとお付き合いさせてもらっていました。今は、瑞穂さんとお付き合いさせていただいております」

それに習うように、僕も続ける。

なんだか、変な感じだ。

確かに、彼女の、果穂さんの言う通り、僕は彼女達のことは知らない。

だけど、きっと、彼女達は僕の事を良く知っている。

鈴穂さんや瑞穂さんに聞けば分かることだし。

それでも、あえてそういうと言うことは、僕に氣を使ってくれて、なのだろうか。

僕は、彼女達が奏穂の両親だと言う事しか知らないわけだし。

名前なんてもちろん知らなかった。

そして、それ以上にその瑞穂さんとの事。

そのことを言うかどうか迷った。

迷ったけれど、言わないわけにはいかない。

言うのには、そうとうな決心が必要だったけれど、言った後は、すつきりとしている。

独りで抱えきるだけの余力がもうないのかもしれない。

いや、ないから、今でも僕は、ずっと女性恐怖症なのだろう。

余力も余裕もない。

だから、いつまでも、前へと進まない。

「そのことは、鈴穂と瑞穂から聞いております。特に瑞穂の事、迷惑を掛けてしまって申し訳ありません」

「あ、いえ、むしろ、救われてるぐらいですから、気にしないでください」

「そうですね。それなら瑞穂の事は構わないんですが。やっぱり、

奏穂の事、重荷になってしまっていたみたいですね」

「……………」

思わず言葉に詰まる。

明らかに失言だった。

「ずっと気にしてました。奏穂の事で負担をかけてしまっていたことは、重々承知していましたから。ですが、私達は、貴方に心苦しい事を押し付けてしまった人間ですし、鈴穂から貴方の病気の事を聞いてしまったら、更に何もできませんでした。申し訳ありませんでした」

場の雰囲気が暗くなる。

分かっていた。

余計な事を言えば、こうなる事ぐらい予想していた。

だから、今まで逃げてきたんじゃないか。

「いえ、気にしないでください。ただ、僕はあれ以上、あんな姿の奏穂を見ていたくなかっただけなんですから。それに、結局僕のがったことは、褒められるようなことじゃないですからね」

自分自身の罪と一緒に。

「確かに、君の言うとおりだろう。決して、世間的に観れば、君のやったことは褒められることではない」

不意に、初めて、会話に譲さんが入って来た。

「人一人の命を奪ったんだ、それは責められるべきものである」

そう、それは罪。

裁かれるべき大罪。

愛する恋人を殺した罪人。

だからこそ、僕は責められるべき存在。

許されざる存在。

「けれど、それは、私達も同じなんだ。自分の娘の願いを叶える事が出来ず、保身を考え、拳句に、若くまだまだ未来のある君に全てを押し付けた。大人のやるべきこととは言えない。君に全てを押し付け、見えない振りをした。君の未来を潰したんだ。それこそが、

私達の罪」

けれど、そんな僕を見る目はとても優しい。

泣きたくなった。

だけど、それは、喜びじゃない。

優しい目で見られる、心配してくれる。

その気持ちは嬉しい。

だけど、それと同時に、もう、この世界にはどこにも自分を裁いてくれる物が居ないことの証明。

永遠に、僕はこの罪を背負わなくてはいけない。

どんなに苦しくても、悲しくても、辛くても、誰にも許されることなく、背負わなくてはいけない。

助けて欲しいのに、何も言えない。

彼らもまた苦しんでいるのだから。

許される事のない罪を背負い続けたいといけないのだから。

僕が何かを言った所で、彼らを救える事なんてないだろう。

むしろ、傷つけ、更に苦しめるだけだろう。

だから、何も言えない。

お互いに救われることはない。

皮肉なものだ。

彼らの罪を知るのが、彼らからしてみれば被害者で、本来許しを請うべき相手なのに、絶対に裁いてもらえない相手である僕で、そして、僕の罪を知って、救い方を知っているのが、僕を憎んでやまず、救う事を拒否したルリだけ。

僕が救われないと彼らは救われない。

だけど、僕は永遠に救われない。

だから、彼らも永遠に救われない。

悲しい結末。

たった一人の女の子の死が、それ以上の人の心を縛り付ける。

彼女の願った願いはそんなに罪深い事なのだろうか。

そんなに愚かな事なのだろうか。



僕には、その答えを知る術は何一つとしてない。

「そうですね。せっかく、こうして、屋敷に来て頂いているわけですし、お夕食、ご一緒しませんか？」

静まりかえる場の空気。

それを払拭するかのように、彼女はその言葉を紡いだ。

「そうだな、君がよければだけど、どうだい？」

それに彼も乗る。

ただの社交辞令。

その可能性はある。

と言うか、普通はそう考えるべきである。

まだ、数度しか会っていない人に自宅に夕食を招くことはまずない。ただ、この場の雰囲気を変えるために、言っただけだと考えるのが常識だ。

「ありがとうございます。」ご迷惑にならなければ、お世話になります」

悲しそうに揺れる二人の瞳。

一生懸命に何かをなそうと揺れる瞳。

それは、一般常識とはかけ離れたもの考えるべき状況。

常識の範疇外で考えないといけない状況。

僕には決して彼らを救えない。

それでも、せめてもの慰めとして、刹那のまやかしだろうと、それを見せてあげたかった。

ただ、次女の恋人として、彼女の家に招かれた男として、会ってあげたかった。

ただそれだけのこと。

## 第十三話 刹那の温もり（前書き）

ぎりぎりセーフ……

だと思いたい。

うーん、直接的な描写はほぼないし。

### 第十三話 刹那の温もり

招かれた夕食は、生まれて初めて見るものばかりの豪華な物だった。質や量からして、おそらく、最初から誘うつもりだったことが分かった。

あの時、迷わず頷けた事をよかったと思う。

まあ、よくよく考えてみれば、あの場で、断るのは多少失礼に当たるような気もした。

せっかくの誘いだし、何より、たいした用事もないのに、せっかくの申し出を断ると、角が立つ、と言うよりも、関係性を悪化させかねなかったかもしれない。

もちろん、実際やらなかったことだから、どうなっていたかは、分からなかったが、あまり良い予感はない。

「父と母が、ホント喜んでたわ、ありがとね？」

「そう言いつつ、僕の服を脱がそうとしているその手は何なんだろうね？」

にゅつと出てきた彼女、瑞穂さんの腕を掴み、解く。

今は、瑞穂さんの部屋で、小休憩となっている。

しつかりと、かなり高級マンションの一室を借りてくるせに、実家にもちゃんと部屋が残っているなんて、羨ましいものだ。

しかも、その部屋は、僕の部屋のゆうに二倍以上はある。

特別貧しい家じゃないとは思っているが、それでも、貧富の差をこつも感じる羽目になるとは思わなかった。

自分の家庭が、貧しいんじゃないかと、錯覚させられるほど、この家は豪華。

豪華すぎる。

気が滅入る、気が休まる暇も感じられないほど。

「まあ、いいじゃない。食事後の恋人の部屋。窓の外は暗く、周りには邪魔する者はどこにもいない。しかも、防音設備はばっちり。

恋人同士の語らいにはぴったりじゃないか？」

「つまり、どんなに泣いて叫んでも助けは来ないから、慰み物になる覚悟をしろ、と？」

拳句に、この状況。

もう何度目になるのか分からない程の貞操の危機。

そういうことなんだろう。

「ちゅっ」

わざとらしく音をたててのキス。

ただ唇を重ねるだけの行為なんだから、音がするわけではない。

何故、彼女がそうするのは、分からない。

僕は、それを拒否しない。

ただ、身体を寄せてくる彼女を抱き締める。

豊かな二つの膨らみを持つているくせに、折れそうなほどの華奢な身体を抱き締める。

「今日は逃げないんだ？」

「逃げてても無駄でしょう？どうせ、鍵も掛かってることだろうし、逃げられないんなら、逃げませんよ」

二人は恋人。

それを、彼女の両親にも言っている。

だから、もういいだろう、と思った。

まるで、何も知らない無垢な少女のように、相変わらず心は、今から行う行為に怯えている。

だけど、それも、数をこなす内に気にならなくなるだろう。

人はそうやって慣れていく。

傷や痛みを乗り越えて前へと進んでいく。

「てやつ!!」

僕も、そうして進んで行く。

彼女と共に。

彼女と一緒に。

だから、彼女をベッドに押し倒す。

僕が初めて起こした受身じゃない、僕自身の能動的な行動。そして、そつと彼女の唇にキスをする。

唇の次は、頬、そして、瞼、髪とキスの雨を降らせる。

「随分手馴れてるのね？」

そんな僕を見て、彼女は苦笑混じりにそういう。

「恋人を前にして言うことじゃないだろうけど、こういうことぐらいは、奏穂と、経験済みですから」

彼女と身体の繋がりは全くない。

彼女には、そんな体力なんてないし、僕自身も恐れていた。

人アレルギーにも近い症状があつた僕だけど、彼女は大丈夫だった。いや、心を許している彼女だから大丈夫だった。

だけど、いざ、更に一歩進んだ時、もつと深い繋がりをもうとしたとき、その時の自分がどうなるのか分からなくて怖かった。

大丈夫なはずの彼女ですら、拒否反応とも取れる症状が出たらと思うと、踏み出せなかった。

彼女を傷つける事、そして、自分自身に降りかかるだろう虚しさを感じる、と、怖かった。

心を許しているはずの彼女ですら、深い繋がりを持たないという現実を見たくなかった。

観る勇気がなかった。

だから、深い繋がりは、望めなかった。

そして、その代わり、出来る限りのスキンシップは取った。

それだけの事。

「ホント、その通りね。てか、姉としても、ちょっと嫌だわ」

深い深いキス。

ただ唇を合わせるだけの物とは違い、もつとお互いを絡ませ合うようなキス。

それは、嫉妬から来たものなのだろうか。

自分の妹に嫉妬してしまったのだろうか。

そんなことは、分らない。

だけど、彼女のそれは、もっともつと深い繋がりを欲しているように思えた。

深い深いキスのただ中、彼女の頬を、髪を右手で撫でながら、あいしている左手で、彼女のブラウスのボタンを外しにかかる。

自分でも驚くほどの器用振り。

ずっとずっと、こんな事には不慣れで、一生不慣れなものだと思っていた。

だけど、そんな予想とは裏腹に、事は淀みなく流れていく。

彼女が拒絶しないのもあるだろう、だけど、僕自身もその手は、緊張で震えることも、何もなく、ただするりするりと解いていく。

やっぱり、僕も庵原夕貴という一個の人間であると同時に、ただの男と言うこと。

無意識のうちに、自然とそう出来るようになっていたんだろう。

「なんだか、改めて、こうすると恥ずかしいわね？」

一度唇を離すと、彼女はそういうと、苦笑する。

けれど、そうはいいいながらも、彼女は既に、僕のシャツのボタンを外し終わっている。

「そうですね。うん、ホント恥ずかしい。穴があつたら入りたいくらいですよ」

「あら、下ネタかしら？」

「ぶっ」

思わず吹いた。

いや、確かに、彼女の言う通り、聞き方によれば、下ネタと取れない事はない。

けれど、さすがに、こんなときに、そんな事を言わないで欲しい。

「ホント、意地悪ですね」

「それが、私だもの」

彼女はそう言って笑う。

まあ、確かにそういわれればそうなんだけれども。

そして、そんな彼女を僕は素敵だと思っているわけだし。

最後のブラウスのボタンを外すと、淡いピンクのブラと白く滑らかな肌が顔を出す。

こぼれんばかりの豊かな二つの膨らみは、それだけで生唾物だろう。僕自身、今にも口から飛び出しそうなほど、心臓が脈打っている。初めて彼女のマンションに誘われて、押し倒されたとき。

あの時は、何も感じなかった。だけど、今は違う。

今、僕の中にある牡としての本能には、しっかりと火が灯っている。ミニのタイトスカートをすると脱がせる。

僕も既に、ボクサーパンツのみ。

彼女を脱がしながら、僕も少しずつ脱いでいた。

ベッドにいる彼女は、上下薄いピンクの下着を纏うだけの姿。秋になり、もう肌寒いはずの季節。

なのに、それでも、パンストを履いていなかったのは、彼女なりの配慮だろう。

もしかすると、彼女自身も、こうなる事を期待していたし、予測していたのかもしれない。

そして、履いていると手間取る事を予想して、脱いだのだろう。その心遣いに感謝したい。

ここまで、せっかくすんなりと着ていたのだ。

それを、ここで止めてしまうのは、もったいないし、興ざめにもないかねない。

だから、未然に防いでくれた彼女のその気持ちに感謝したい。

「ありがとう」

その気持ちを載せて深い深いキス。

キスの合間に残りを脱がして、僕自身も全てを取り払って、素肌同士で感じる温もりを絡ませながら深い深いキス。

僕達は深い深いキスをした。

割と深夜に近い時間。

ようやく、僕は、目覚めた。

「おはよう」

それに合わせて、くすりと笑いながら、彼女はそういう。初めての行為後、僕はあっさりと眠りに落ちた。

とはいえ、それは、初めての行為のための疲れだったのか、それとも、単なる女性恐怖症から来るものだったのか、僕には分からない。そう、僕には、分からない。

けれど、直接ずっと僕を見てきた彼女なら分かるだろう。

「うーん、やっぱり、あれね。未だに異物感が残るわ。これが、初体験の痛みって奴？」

「そんな事聞かれても、僕には分かりませんよ」

本日初体験な僕に、そんな事を聞かれても、分かるわけがない。

「でも、まあ、良かったわ。初体験が夕貴で。他の奴だったら考えたら、もう、ぞつとしないわ。それこそ、姉さんが付き合ってたようなゴミみたいな奴だったら、あれね、自殺物よ」

「いや、そこまで言わなくても」

確かに、彼女の気持ちも分からないでもないが、それはちょっと言いすぎなんじゃないだろうか。

こうして、僕を持ち上げてくれるのは、本当に嬉しいが、僕自身、そんなに偉い人ってわけでもない。

分不相応な持ち上げられ方をすると、やっぱり居心地が悪い。

まあ、それでも、確かに、鈴穂さんの周りをうるちよろしている男達は、ゴミみたいなもんだけど。

まあ、彼らにしてみれば、ひどく心外だろうが、それでも、やっぱり、評価はそれに落ち着く。

「だから、私は幸せ。いい思い出が出来たわ」

彼女はそう言って笑う。

だけど、その笑顔はどこか寂しげ。

何かを覚悟したような、何かを終わらせようとしているような笑顔。そう、まるで、それは、僕が……



「だから、夕貴もいい思い出を作りなさい？」

僕が、奏穂を殺した時の物と同じ。

絶望を心に宿した瞳。

「今の私には、夕貴を救えない。奏穂に縛られている夕貴は救えない。だから、今日は私と夕貴の、最後の思い出のために仕組んだの。父と母と姉に協力してもらったの」

そう言つて、彼女は悲しそうに辛そうに笑う。

本当は泣きたいくせに。

泣いて縋りたいくせに。

それを良しとせず、気丈に振舞う。

その姿は、あのときの、殺してしまった後の僕の姿と、だぶる。

辛くて悲しくて泣きたくて、泣いて縋りたくて、だけど、それをしなかった。

出来なかった。

ただただ、誰が見ても分かる作り笑いをしていた。作り笑いをして謝った。

謝つて、死んでしまった彼女のもう一度だけ見て、そして、病室を出た。

あのときの自分を見ているかのような。

「父と母は二つ返事だったわ。元々、夕貴に会いたがってたし、謝りたがってた。姉さんも同じ。私じゃどうしようもないことなんて分かっていた。だから、手伝ってくれたの。このたった一時のために」

周到に用意した罠。

そういうわけではない。

いくらでも、退路はあった。

けれど、彼女にとっては、今の彼女に出来る最大の博打。

大勝負。

「もし、僕が受けなかったら、拒否したら、どうするつもりだったの？」

それは、決して起こりはしなかったイフ。

だけど、どうしても気になる。

彼女にとっての大勝負。

たった一時の、一瞬のまやかしとて、それでも、その幸せがあるからこそ、彼女は捨てた。

僕のために、僕を救うために、彼女はそれを選んだ。

だけど、もし、僕が彼女を受け入れなかった。

逃げ出したら、どうしたのだろうか。

「無理矢理押し倒してやろうかとも思ってたけど、たぶん、出来なかったでしょうね。出来ずに、お別れを言ってたと思うわ。さっき言った事と全く同じ事をね」

だけど、それは悲しすぎる答え。

たった一時のまやかしですら手にする事の出来なかった悲しい道。

それならば、僕は安心できる。

自分が取った選択肢を。

だけど、それと同時に不安。

これから先が、彼女のこれからの未来が、不安でたまらない。

ほんの一瞬でも手に入れてしまった温もり。

それをむざむざと手放す。

手にしなければ、分からずにすんだはずの温もり、知らずにすんだ

喪失感、絶望感。

それを感じさせてしまうのではないか。

更に辛くさせてしまうのではないのだろうか。

「ふふ、暖かいね」

彼女がぎゅっと抱き締めてきた。

秋は深まり、夜、特に深夜となれば、一気に冷え込む。

だから、こうして、素肌で感じる温もりは、心も身体も温めてくれる。

芯から暖めてくれる。

「私の心配してくれているんでしょう？大丈夫よ。私は負けない。

大切な夕貴を幸せにしてみせるから」

僕はぎゅっと彼女を抱き締め返す。

「夜があけるまでは、僕達は、まだ恋人だよね？」

そして、そういうと、キスをする。

夜が明ければ、もう僕達は恋人ではいられない。

ただの、校医と生徒に戻る。

もちろん、親しさは変わらないだろう。

だけど、もうこんな深い繋がり合い方はしないだろう。

だから、せめて……

奏穂が死んで初めて、この腕で抱きしめた、キスをした彼女を、深く深く愛したい。

繋がっていたい。

まだ、もう少し、夜明けまでには時間があるのだから。

## 第十四話 もう一人の女神様

「起きろ！！」

その声と同時に、打撃音が部屋中に広がった。  
いや、誰が何をしたのか分かっているけど。

「ごめん、昨日励みすぎて、無理」

だけど、とりあえず、無視。

眠い。

恐ろしく眠い。

まあ、第三ラウンドまで突入してしまった辺り、若さなんだろう。  
つか、頑張りすぎ。

だから、その反動で、今はものすごく眠い。

「起きんかい！！」

再度、声と同時の打撃音。

小気味いい、『パシーン』と言う音。

もしかして、ハリセンなのだろうかとも思うけど、そんなものは、  
この部屋にはないから、除外。

「てか、励み過ぎて、もう少しデリカシーって物を考えなさい」  
更にもう一発。

確かに、年頃の女性に対して言っているいい言葉ではないだろう。  
デリカシーがないと言われたら、それは仕方のない事だろう。

でも、だからと言って、そんなに叩きまくらなくてもいいと思う。

これ以上、アホになったら、残念な子になったら、どうしてくれる  
んだ。

責任を取ってくれるとでも言うのだろうか。

「でも、眠いから無理」

なんて事も考えたけど、結局撃沈。

だって、眠いんだもの。

眠すぎる。

結局、第三ラウンドが終了した後も、なんだかんだと二人いちゃついていたし。

やっぱり、タイムリミットが近づけば近づくほど寂しい物なんだ。例え、拒否反応が起きても、それでも、その温もりを否定は出来なかったわけだし。

あの夜の出来事中、ずっとずっと拒否反応は出てた。

苦しかったし、辛かったし、気持ち悪かった。

確かに、彼女の言う通り、彼女ではダメだった。

どうしても、奏穂の面影を追ってしまふ。

だけど、それでも、やっぱり、幸せなものには違いなかった。

失いたくはない時間だった。

だから、その時間が残り少なくなるたびに、胸が締め付けられるように寂しかった。

僕も気づかないうちに、彼女に惹かれていた。

そういうことなんだろう。

「だから、寝るなつつに!!」

更なる追い討ち。

この人は何がしたいんだろう。

さつきから人の頭をポンポン叩いて……

簡易裁判所に訴えてやろうか。

「こっちは、聞きたい事があるのよ!!」

更に、追撃の一撃。

どうやら、無言のまま眠りにつこうとしてたのを察知したらしい。

なんとも、敏感な人だ。

「よし、分かった。この庵原タ貴。何でも答えてやろう。好きな食べ物から、好みのタイプ、フェティシズム、なんならスリーサイズぶっ!!」

なら、さっさと答えて眠りにつこうと思ったら、思いっきり叩かれた。

獲物は、教科書だった。

まあ、妥当だろう。

すっごく痛かったけど。

というか、思いつきり、横っ面をなぐるとは、どうかと思う。

「今からするのは大事な話し、奏穂の……て、なんだ、そんな顔も出来るんじゃない」

彼女の顔が不意に緩む。

とりあえず、自分の顔をいじってみるが、分らない。

分らないけど、なんとなく予想が付く。

さっきまでの、ぼけつとした、というか、瑞穂さんの言葉からでは、飄々としている、目の前にいる彼女にしてみれば、何考えているのか分らない表情から、多少真面目になった、ということだろう。

「で、奏穂がどうしたのかな？」

だけど、そんなことはどうでもいい。

それよりも、奏穂の事、というよりも、こうして、ルリとの話して、彼女の事が出てきた事の方が気になる。

「全く、ホント、いい性格してるわ。まあ、そんなんだから、奏穂も、好きになったんだろうけど」

そんな僕とは裏腹に、彼女はため息。

褒めているのか貶してるのか、微妙だ。

ただ、なんとなく、僕には褒められているような気持ちにはなれない。

というのは、もしかすると、自分自身でも、意外と認識しているのかもしれない。

人から見ると、自分が、飄々としていて、何を考えているのか分からないと言う事を。

「まあ、いいわ。奏穂の事、というよりも、それが原因で貴方の身を起こった事について聞きたかったのよ。貴方、女性恐怖症らしいわね？しかも、重度で、拒否反応が起きるぐらいひどいらしいわね？」

思わず、自分でも表情が強張ったのが分かった。

このタイミングで。

そう、このタイミングで、こんな事を聞かれるとは思わなかった。それは、まるで、誰かに仕組まれていたかのように。

そう、初めて、瑞穂さんの家に招かれたときのように。

「言ったのは、鈴穂さんと瑞穂さん、どっち？」

それ以外のところから漏れるとは思わない。

そもそも、僕のそれを知っている人間はかなり限られている。

むしろ、その二人だと考えるのが妥当だ。

そして、一番可能性が高いのが……

鈴穂さん。

「鈴穂さんから聞いたわ。と言うよりも、お願いされた、と言うのが正しいんでしょうね」

内心で、やはり、そう思いながら、彼女の表情を見ると、そういった彼女は苦笑している。

まあ、憎んでいる人間にすることではないだろう。

「初めは、ふざけんな、って思ったけど、そうね、確かに彼女の言う通り、よくよく考えてみたら、苦しんでいるのは、別に私だけじゃない。貴方だってそうよね」

だけど、その目は優しい。

瑞穂さんや鈴穂さん達がするような優しいまなざし。

「大切な、初めて触れ合えることのできた、心の奥底から愛してると言える人を殺したんだもの、辛くないはずがないわけじゃないし、トラウマにならないほうがいいがおかしい」

それは、同情なのだろうか。

可哀想な人。

大好きな恋人を殺さなくちゃいけなかった人。

殺したが故に、余計に拒否反応がひどくなった人。

誰にも触れられなくなってしまった人。

そう思っているのだろうか。

「それに、あの子が選んだ男だもの、程度の低い男のはずがないわ。

いつもいつも、耳にたこが出来そうなほど聞かされてたわけだしさ、のろけ話をさ」

一瞬、浮かんだ思いは、あっさりと霧散して行く。違う。

彼女がしているのは、同情ではない。

いや、多少なりは同情はしているだろう。

けれど、だからと言って、それ一色ではない。

それ以外の何か。

それ以上の何かを、見せようとしてくれている。

「ホント、でも、もしかしたら、それが原因だったのかもしれないわね」

続けた彼女は、その言葉と同時にため息。

僕にはその意味が分からない。

というよりも、今の彼女がしようとしている話自体が分からない。

何を思つて、何をしようとして、こんな話をしているのかが、皆目検討もつかない。

「奏穂には内緒よ？私は、彼女が延々と自慢そうに言うユーキって人に憧れてた。ううん、憧れ以上に、好きになつてた。だからこそ信じられなかった、許せなかった。憧れていた、大好きだったあのユーキが、そんな事を、奏穂を殺したなんてことを。そして、彼女を殺しておいて、のうのうと生きていることが」

裏切られたと感じたのだろうか。

自分が憧れていた、大好きだったあのユーキが、恋人である奏穂を殺した。

だけど、私の知っているユーキはそんな事はしない。

私の中にいるユーキは絶対にそんな事はしない。

なのに、現実のユーキがしたのは、神をも恐れぬ行為。

自分の気持ちを踏みにじった最低の行為。

最初の羨望の気持ちが高かった分、失望の度合いもひどかった。愛しかったからこそ、余計に憎く思える。



そういうことなんだろう。

「鈴穂さんは言ったわ。『私でも、瑞穂でもダメ。私達はあまりにもあの子に似すぎていて、近すぎる。絶対に、甘えられない。私達の妹を殺してしまった事の罪をずっと感じさせてしまう』って。まあ、そうよね。確かに、あの二人は、本当にそっくりだし。ただの知人である前に、どうしても、奏穂の姉、という見方をしてしまうわ」

それは、避けられないこと。

だけど、それでも、それを覚悟した上で、僕は彼女と付き合った。どんなに悲しくても、苦しくても、辛くても、それでも、自分が向き合って、乗り越えていかないといけない問題だから、誰かに手伝ってもらっていいものではないから。

そうじゃないと、彼女を殺した罪を償えない。

僕自身が本当に楽になれない。

例え、彼女が望んだことだったとしても、それでも、自分が殺めたという事実は変わりないわけだし、自分自身が、それを罪だと思っている以上、それを乗り越えないといけない。

そう思っていた。

だけど、彼女は、僕のために、僕の幸せのために、手を離れた。

ただの友人として、自分の気持ちを押し殺してまで、僕を支えるという決断をした。

「だけど、私は違う。確かに、あの子の親友。でも、それだけ。特に、私があの子の親友だって知ったのは、つい最近で、その意識だつて、そんなに強くない。私を見て、あの子の面影を見ることもない。だからこそ救える。貴方の傷と痛みと過去を知りながら、あの子との関係を意識しないですむから」

そういった彼女は、本当に綺麗だった。

彼女の容姿が素晴らしいのもある。

だけど、それ以上に、内側からにじみ出る美しさ。

奏穂や瑞穂さん、そして鈴穂さん達のように、心の強さ、気高さ、

美しさからでる、本当の美。

それを、初めて彼女から観たような気がする。

「で、質問。貴方は、私にどうして欲しい？何を望むのかしら？」

普通に聞けば、おかしい質問。

尊大で傲慢な態度の質問。

だけど、実際は違う。

ただの純粹な質問。

何故、そうしようと思ったのか。

それは、分からない。

事実を知ったから。

鈴穂さんから、お願いされたから。

そんな事だけで、彼女が納得し、拳句に僕の手助けをしようだなんて考えるとは到底思えない。

きつと、もつと複雑な事があつたのだろう。

それは、きつと僕がどんなに考えても分からないことだろうし、もしかしたら、一生知らずに終わる事なのかもしれない。

けれど、それでも、彼女が僕を助けようとしてくれている意思はあると思う。

そして、だからこそ、この質問。

純粹にどうすれば助けられるのか、それが分からないから、だから、尋ねる。

『貴方は何を望んでいるのか？』

そう聞くのだ。

けれど、分からない。

僕自身が何を望んでいるのか。

何があれば、救われるのか。

そして、どういう結果なら、彼女が死んだ事で生まれた悲しみの螺旋は終わりに迎えるのか。

それが、分からない。

だから、考える。

考えるが、やはり答えは出ない。

出ないから、堂々巡り。

同じ問いかけが頭の中を駆け巡り、浮かんでは消えて行く。

「ごめん、少し、時間をくれないか？」

だから、その言葉が出たのは、何十回も考えた数分後の事だった。

## 第十四話 もう一人の女神様（後書き）

これにて、第二章終わりです。  
三章で終わります。

## 第十五話 始まりの日記（前書き）

第三章開始です。

## 第十五話 始まりの日記

シンと冷えた空気のせいか、相変わらず思考はクリアなまま。考え事をするにはちょうどいいのかもしれない。

家に帰ると同時に、というよりも、帰宅途中も延々と考えていた。

『貴方は何を望んでいるのか』

その答えを。

けれど、その答えは、どれだけ考えても出て来ない。

欲しい者はいくらでもある。

人並みの欲求ぐらいある。

いくら、変わつてると言われようと、仙人や僧侶でもないんだから、欲求ぐらいはある。

けれど、その中で何を一番求めているのか、僕が救われるために、彼女に何を望むのか、それを考えようとすると、どうしても、浮かんで来ない。

だから、考えを切り替えた。

一つ一つ、想い出を振り返って見る事にした。

そもそも、今の僕には、今の自分がどんな状況にいるのかさえ、分かって居ないと思う。

自分の事は自分が一番分かっているのは確かだろう。

だけど、だからと言って、何もかも分かっているわけでもない。

気づいていない、気づこうとしていない部分も、かならずどこにある。

もしかすると、そこに目を向ければ、思いつくかもしれない。

思いつかなかったとしても、何かのヒントになるかもしれない。

そう思つての事だった。

とはいえ、思い返すとは言っても、日記なんてものはない。

ものぐさで面倒くさがり、三日坊主の僕だ、そんなものが続くわけがない。

けれど、その代わりに、別の物がある。

残すべきか、捨てるべきか、散々迷った挙句、結局捨てられなかったもの。

すずほ 鈴穂さんから、葬式の日にもらった。

かなほ 奏穂の残した日記を。

けれど、もらったはいいいけれど、一度も見ることなく、押入れの中に押し込んでいた。

それを開封する。

何が書いてあるのか、何を思っていたのか。

それを知りたい。

そして、あのときの僕は何を願って、何を望んでいたのか、どんな未来を描いていたのか。

それを知りたい。

6月28日

姉さんが、いきなり男の人を連れてきた。

見た感じはどこにでもいるような、平凡な男で、同い年。

まあ、この前、自分の知り合いのイケメンを連れてきて、思いつきで罵倒しまくったせいだろう。

悪いとは思っけど、きしゃかったので、仕方がない。

なんて言うか、情弱。

世の中舐めきってます、っていう態度が気に食わなかった。だから、散々ドS発言しまくったら、泣いて帰っていった。

まあ、その後、姉さんにしこたま怒られたけど、姉さん達と違って、私は美形が嫌いなんだから仕方がない。

もう、視界に入られるだけで、嫌悪感を抱く。

だから、平々凡々な彼は、まあ、いい線だろう。

ただ、なんだか、思いつきで不服そうな顔をしている辺りがおしいけれど。

まあ、いきなり、

『さあ、この子とお友達になりなさい!!』

なんていわれたら、そうなくても仕方ないだろう。

私もそうだったし。

でも、それでも、なんだかんだで、ちゃんと仲良くしようと努力している辺りは、なかなか高得点。

この前のイケメンよりかは、ましだろう。

うん、友達か……

これからの彼の頑張り次第だね。

6月29日

彼がまた来た。

診察ついでに来たらしい。

病名は聞いてないけど、割としんどいらしく、姉さんも心配してた。毎日通院するように言ってたぐらいだし。

もしかして、私のためだろうかとも思ったけど、否定されたし、実際の姉さんの彼を見る目は、本当に心配しているような目だったから、おそらく間違いない。

にしても、どんな病気なんだろうか。

やっぱり、私と同じで、そうとう重たい病気なんだろうか。

ちよっと、気になる。

7月4日。

毎日来るようにと行っていたのに、あっさりそれを破って今日で五日目。

で、五日目にして、ようやく来た。

理由を問い詰めようとしたけど、頑として答えてくれなかった。

仕方ないから、姉さんに問い詰めて見たけど、笑って誤魔化すばかり。

どうやら、かなり複雑な事情があったんだろうけど、それでも、教えてくれないじゃないかと思う。



これで、口は固いほうだし、というか、友達は、ルリだけだし、ルリと彼とは面識がないんだから、別に、関係ないはずだし。だから、教えてくれてもいいじゃん。友達になろうとしてるんでしょ？  
だったら、秘密は厳禁。

とりあえず、油断してるときに、聞き出してみよう。

7月8日

ユーキに、私の名前を呼ばせるようにした。  
なんか、姉さんは名前で呼んでるくせに、私には、敬語で苗字にさん付けで、距離感を感じるからだ。  
で、それと同時に、今日からユーキと呼び捨てにさせてもらうことにした。

これで、前まで感じた距離感はない。

というか、前よりずっとずっと近くなったように感じる。

ユーキ。

うん、なんだか、これでやっと友達らしくなったような気がする。

7月9日

ユーキが来ない。

なんていうか、つまらない。

せっかく、距離が縮まったというのに。

というか、毎日来いと言われてるんだから、毎日来さないって言うのよ。

にしても、つまんない。

日記のネタもたいしてないし、うーん、どうしたものか。

7月10日

今日も来なかった。

なんていうか、どうしてくれよう。

明日、もし来たら、罰を与えてやろう。

どんなのがいいだろう？

うーん、全裸で中庭一周？

いや、さすがに、それは可哀想すぎるか。

そもそも、見たくもないし。

ユーキの裸。

.....

いや、うん、興味ない。

男の裸なんかに、て言うか、ユーキの裸になんか、興味なんてない。  
明日来たら、絶対しばいてやる。

7月11日。

ユーキが来なかった。

どうしたんだろう。

姉さんに聞いても、笑ってはぐらかすだけ。  
もしかして、病気が悪くなったんだろうか？  
ちよつと心配。

7月12日。

ユーキが来た。

しかも、へらへらと笑って。

むかついたから、無視してやった。

すると、姉さんに怒られた。

怒られて、いじられた。

たく、わけが分からない。

むかついて、無視したからって、なんで、いきなり

『あらあら、大好きな夕貴君に会えなくて、寂しかったのかな？それで、むくれて、すねてるんだ？』

とか言い出した。

いや、意味わかんないから。

とりあえず、ユーキは私の好みじゃない。

全然違う。

かすってもない。

ただの友達。

7月15日

最近、姉さんに言われて気づいたんだけど、どうにも、私とユーキの距離感が近い。

最初の頃はそれこそ、机一つ半分ぐらい距離があつたのに、今では机半分ぐらい。

普通に手も握ったりする、

なんて言うか、近いと言うか、近すぎ。

もう少し気を付けた方がいいんだろうか？

変に、ユーキを勘違いさせるのもなんだし。

確かに、ユーキの事は、好きだけど、それは、単に友達として。

恋人云々なんて気は全くない。

だから、変に勘違いさせて、せつかくの友達を、失うのは嫌だ。

良し、明日からは、気を付けよう。

7月16日。

昨日は、あんなに気を付けよう。

そう言ったのに、またやつちゃった。

最初は気を付けた。

うん、いすの位置が近いのは仕方ないとしても、ボディタッチは厳禁。

そう決めてただけど、なんだか、それを気にしていると、妙にむずむずというか、むかむかというか、すつごくストレスがたまってくる。

しかも、私が、ユーキに触れず、すつごくイライラしてるの分かっているくせに、わざと私の前で、姉さんがユーキとイチャついてみ

せる。

めちやくちや腹立ったから

『セクハラ女医』

って言ってやったんだけど

『あら、サービスって言うのよ、こういうのは？いつもいつも貧相な身体の妹の相手ばかりで、大変だと思って、目の保養をつてね？』

なんて言い返された。

ものすつごく腹立ったけど、事実なだけに言い返せない。

こっちは、病気と運動不足と引きこもりのせいで、まっしろでちっちゃくてガリガリ。

華奢と言えば聞こえは良いけど、実際は、単に胸も何もなくて、ぺったんこの洗濯板。

もう、とりあえず、何そのメロン、って言いたくなるような胸をしてる姉さんには、手も足もでないぐらいだ。

ユーキも、満更でもないような顔をしてたし、やっぱり、ああいうのが良いんだろうか？

なんか、むかつく。

まあ、いいや、とりあえず、どうせ、姉さんも普通にくつついているし、私がくつついても、構わないだろう。

そんな事じゃ、勘違いなんてされないと分かってて、姉さんもやってるんだろうし、私も大丈夫だろう。

7月20日

今日、ようやく、ユーキの病名を知った。

いや、病名らしい病名はない。

ただ、確かに病気であることには間違いない。

『人アレルギー』

人に触れる、または、近づぐだけでストレスがたまって、頭痛、吐き気などを起こして、発熱するときもある。

病院に来たときには、それが一番ひどくて、ストレス性の胃炎を起こしたそうだ。

『人アレルギー』

それは、いったいどんな世界なんだろう。

入院生活の長い、というか、ほとんど入院ばかりをしているから、私だって、かなり制限された生活をしている。

だけど、だからと言って、人に触れない、近づけないなんて事はなかった。

なのに、ユーキは違う。

触れると、近づかれるだけで、すつごく苦しくなる。

それって、どんな世界なんだろうか。

私が、触れても、やっぱり苦しいんだろうか？

辛いんだろうか？

だったら、近づかないほうがいいんだろうか？

7月21日

とりあえず、いきなり距離を取るのは変だから、距離はいつも通りで、触れる事を自粛した。

ユーキは大事な友達。

だから、辛い思いをして欲しくない。

だけど、なんだろう。

そうやって、距離を取ろうとすればするほど、なんだか、近づきたくなる。

触れたいし、触れて欲しい。

もっと近くにいたいと思う。

なんだろう、これは。

7月23日

姉さんに怒られた。

初めて見るぐらい、すつごく怒った。

理由は、私が距離を取った事。

散々怒られて、その後、頭を撫でられた。

もう、わけがわかんない。

怒られる理由は分かる。

『奏穂がしてる事は、病人は可哀想だから、優しくしてあげないといけない、見守ってあげないといけない、そう言っで、哀れむような目で見ているような人間と同じ事をしてるのよ?』

姉さんはそう言った。

私に分かりやすく言ってくれたんだろう。

すぐに分かった。

確かに、私は、普通に見たら、不幸だろう。

ずっと入院してばかりで、学校になんていけてないし、友達もユーキとルリの二人だけ。

それは、傍から見ると、不憫な物に見える。

でも、私はそう思っでないし、そう思われると、すっごくむかつく。私の何も知らないくせに、知ったふうな口を聞くなっで言う感じ。

そして、それと同じ事が言えるんだろう、ユーキの事も。

ユーキは、今、自分と向き合っで、アレルギーを治そうとしている。人とのふれあいを大事にしようとしている。

姉さんはそう言っでいた。

それは、すごいことだと思っ。

どんなふうにかいのかなんて、私は知らないけど、病気克服のためにやる事は、並大抵の気力で出来るものじゃない。

すっごい根気がある。

それなのに、それに対して弱音を言わす、一生懸命努力している。それを、すごいと思わないわけがない。

それと同時に、姉さんが、心配した理由が良く分かった。

これだけ頑張っているんだ、心配しないわけがない。手を差し伸べたくならないわけがない。

だから、姉さんは、面倒を見ているんだろう。

なら、私も、それを手伝いたい。

というのは、建前で、やっぱり、今までどおりでいたい、と言うのが、本音。

やっぱり、こっちもこっちでストレス溜まるし。

ユーキにとっては、治療？になるし、私はストレスが溜まらなくて澄む。

一石二鳥じゃない。

よし、明日から、べったり行くぞ。

7月26日

今日は、ユーキは来なかった。

なんか、用事があるらしく、来れなかったらしい。

その代わり、今日は、ルリとずっと一緒にいた。

いろいろと忙しいから、滅多に長居はしてくれないんだけど、今日はぎりぎりまで居てくれた。

それが、私には、すごく嬉しかったんだけど、ルリは、どうやら違ったみたい。

というか、彼女から見た私が思ってるほど、私は嬉しそうに見えなかったみたい。

なんて言うか、心ここにあらずって言うか、話していても、ユーキの事ばかり。

それが、ちょっと気に食わなかったみたい。

私自身は気づかなかったんだけど、思い返してみると、確かに、ユーキの事ばかりを話してたような気がする。

でも、どうしてだろう。

『ユーキの事好きなんじゃない？』

ルリにそういわれたけど、そうなんだろうか？

いや、確かに、好きなのは好きなんだけど、ルリの言ってるニュアンスとは違う。

ルリの言ってるニュアンスは、恋愛感情の好き。

親愛の好きじゃないって事。

でも、そう言われても、私にはぴんとは来ない。  
そりゃ、確かにユーキと一緒にいると楽しいし、落ち着くし、いな  
いと寂しい。

だけど、それは、ルリも同じ。

ルリと一緒に居ると楽しいし、落ち着くし、いないと寂しい。  
だから、私の中では変わらない。

変わらないはずなんだけど、なあ……

7月27日

ユーキが今日も来なかった。

今日は用事があるとは言ってなかった。

だから、来ないはずがないんだけど……

どうしたんだろう？

ちよつと、心配。

それと、寂しい。

そこで、思うのは、やっぱり好きだからなのだろうか、と言つこと。  
でも、やっぱり、しつくりと来ない。

うーん、私は、ユーキの事が好き？

それとも違う？

どっちなんだろう。

7月28日

今日も、ユーキは来なかった。

だけど、その代わりに、ルリが来た。

その代わり。

よくよく考えて見たら、随分ひどい言い方だ。

だけど、ルリが言つてた事が良く分かる。

今日、ルリに相談したら、あっさりと言われた。

『んじゃ、奏穂がユーキにしていること、されてることを、他の女の



子とやってたら、どう思う?』

そう聞かれた瞬間にいらつとした。

もちろん、想像したからだ。

ユーキが他の誰かも分らない女子と、仲よさそうにしている。

それが、そのどこからどう見ても恋人にしか見えない姿が、羨ましくて、腹立たしくて、そんな事を私以外にして欲しくない、というか、したら許さない。

しばらく、口なんか聞いてやんない。

まあ、結局のところ、単なる嫉妬。

てか、既に、自分の中で出来上がってる。

恋人にしか見えない姿が、なんて言っている時点で。

『まあ、答えは言わなくても出てるみたいね』

そう言つて、ルリは笑つてたけど、逆に私は心臓バクバク。

恥ずかしいったりやありやしない。

でも、まあ、それでも、良かったと思う。

自分の気持ちも分かつたし、明日、とりあえず、ユーキが来たら、  
頃合を計らつて、それとなく聞きだしてみよう。

で、あわよくば……

なんちゃって。

## 第十六話 恋の日記

一旦、日記を閉じて、息を吐く。

とりあえず、彼女が、自分の心に気が付いた日までの日記を読んだ。それから、しばらくして、彼女は、僕に告白をした。

緊張で顔を真っ赤にして、いろんなところは、ぷるぷると振るえていた。

まあ、そこらへんが、すごく可愛かったし、触れても、違和感もなければ、ストレスも感じなかったし、彼女が僕に対して思ってくれていたように、彼女といた空間はとっても楽しくておもしろくて、暖かった。

だから、当然、答えはイエスだった。

むしろ、僕自身が、いつ告白しようか迷ってたぐらいだし。

ただ、相手が相手。

すごい美少女で、今までたくさんのイケメン達を振ってきた彼女だ、オーケーしてくれるとは思えない。

どうしても、尻込みをしてしまった。

なんて言っても、単に、僕がやっぱりチキンなだけだったんだけど。いつもいつも受身だった。

自分の病気を理由にして。

触れられないから。

だから、進んで、触れ合おうとはしなかった。

奏穂ともそう。

鈴穂さんに頼まれたから、だから、僕は一緒にいた。

彼女からのお願いがなければ、僕はきっと、彼女と付き合うことも、会おう事もなかった。

だからこそ、彼女は深く傷ついているんだ。

自分が引き起こしてしまったと、後悔しているんだ。

軽く伸びをして、部屋を出る。

身体がちよつと冷えてきた。

適当に暖かいコーヒーでも飲もう。

どうせ、日記は今日の内に読んでしまうつもりなんだから、長丁場になるだろう。

それなら、コーヒーでも飲んで、頭をすっきりさせて置いたほうがいい。

キッチンに入ると、うんと濃いめのホットを淹れる。

「ふうふう」

淹れると、部屋に戻りつつ、それを冷ます。

それほど、猫舌ってわけでもないけど、さすがに淹れたては熱い。

熱いのを飲んだほうが、一気に目は醒めるだろうが、さすがに火傷はしたくない。

次の日のご飯が大変だし。

「あつつつ」

部屋に戻り、もうそろそろ大丈夫かと思って一口含んでみたが、どうやら、まだらしい。

仕方がない。

日記を読みつつ、冷めるのを待つしかないだろう。

8月3日

今日、ユーキに告白した。

自分でも、びっくりするぐらい、ときどきして、緊張して、どもつたし、途中で何を言ってるのかわからなくなつたし、最終的には、ほとんど逆切れに近いようないい方をしてしまった。

過去の自分に会えるなら、今すぐにでも絞め殺してやりたいぐらいでも、まあ、私としては、あまりにも情けない失態だけど、それでも、まあ、結果はオツケーだったんだから、良しとしないといけないんだろうけど。

うん、ユーキと付き合う。

私が、ユーキの彼女で、ユーキが、私の彼氏。

……いやあああああ！！

なんか、恥ずかしい。

そんな事を書いてる自分が恥ずかしい。  
かなり赤面物。

というか、意外と私も女の子してるんだと、思う。

枯れてる気なんて、さらさらないけど、こんな事で、いちいち赤面  
するとは思ってなかった。

うーん、意外と恋って言うものは奥深い物なのかもしれない。

なんて、何語ってるんだろう、わたし。

まあ、今日は早く寝よう。

とりあえず、明日も、ユーキは会いに来る。

なのに、寝不足でぼろぼろの顔を見せられない。  
百年の恋も冷めるってもんだ。

というわけで、寝よう、おやすみ。

8月4日

……来なかった。

来るといったのに、来なかった。

こっちは、結局、興奮と緊張で眠れず、すつごくときどきしたとい  
うのに、来なかった。

とりあえず、姉さんに聞いてみたけど、また、適当にはぐらかされ  
た。

たぶん、姉さんは理由を知ってる。

だけど、教えてくれない。

なんか、それがすつごくむかついた。

恋人は私なのに。

なのに、恋人のはずの私よりも姉さんの方が、ユーキの事を知って  
る。

それが、すつごくむかつく。

やっぱり、ユーキの事は何でも知っておきたい。

で、ユーキの事を一番に分かっているのは、私でいたい。  
とりあえず、明日、来たら、盛大に文句言ってやろう。

8月5日

ユーキが来た。

来るまでは、延々と文句を言っただろうと思ったけど、ユーキの顔を見た瞬間、それが吹っ飛んだ。

それに、しっかりと謝ってくれたし、だから、許してあげた。

とりあえず、それが女の度量ってもの。

私は器が大きいからね。

でも、器の大きい私でも、ちょっと腹立つことがあった。

姉さんだ。

恋人である私を目の前にして、何をとち狂ったのか、ユーキのほっぺにチューをしたのだ。

まだ、私もしたことないというのに、だ。

今思い出しても、むかつく。

とりあえず、それは、私の特権だ。

だから、注意と言うか、攻撃しまくったんだけど、効果はなし。

散々からかわれて、やりたい放題した後、姉さんは帰っていった。

だけど、私にしてみたら、そら、すっごくむかついた。

むかついたから、無視。

無視したけど、うん、やっぱり、無理。

いや、だって、やっぱり好きだし。

うん、せっかく一緒にいるんだから、楽しく過ごしたい。

結局、数分と持つ事なく、イチヤつき始めた。

うわ、なんか、自分で書いてて、すっごい恥ずかしい。

でも、まあ、それ以上に恥ずかしい事があったけど。

うん、すっごく恥ずかしかった。

まあ、ユーキもめっちゃ恥ずかしそうにしてたけど。

お互い初めてだから、仕方ないけど、それでも、ありえないぐらい

の緊張振りだった。

うん、付き合って三日目。

ていうか、実質二日目なんだけど、キスしちゃった。

うわああああ、なんか、更に照れるんだけど。

なに、この恥ずかしさは。

自分でも気持ち悪いぐらいなんだけど。

でも、すっごく幸せ。

これが、恋。

うーん、すごいな。

8月12日

いきなり、退院許可がおりた。

正直、わけがわからない。

体調は、確かに悪くはない。

だけど、逆に言えば、いつも通りと言えはいつも通りで、良くなっているとは思えない。

とはいえ、退院。

いったい、どれぐらいぶりだろうか。

正直覚えてない。

でも、ちょっと嬉しい。

今まで、ずっと病院の中だけだった。

そこだけでしか、会えなかった。

だから、せっかく退院したわけだし、ユーキとデートしてみよう。

時期的には夏休みだし、いろいろと遊びまわれるはず。

明日にでも会いに行つて、予定でも立てようつと。

8月13日

とりあえず、予定が決まった。

王道ところは、海と遊園地。

後は、適当にぶらぶらしてみたり、お祭りがしばらくしたらあるみ

たいだから、それも観に行く。

なんだか、すつごく楽しみ。

最高の夏になりそう。

ホント、ユーキに会えて良かった。

姉さんに感謝感謝。

ユーキのいない生活ってもう考えられないし。

ホント、日に日にユーキの存在がどんどん大きくなっていく。

いつかは、ユーキが全てになってしまふのだろうか。

なんか良さそうっぽいけど、それはそれで、なんかダメそう。

うん、他も大事にしないといけないよね。

そこらへんは、ちよつと気を付けておこう。

8月17日。

海に行った。

行っただけど、ちよつと凹んだ。

良く良く考えてみたら、今の私の身体は海に行けたもんじゃない。

胸ないし、がりがりで細いし、病室から出る事なんてほとんどな

ったから、肌は病的な白さだし、とりあえず、すつごい劣等感を感じ

た。

だから、選んだ水着もワンピース型の露出の少ない奴にした。

姉さんだったら、きつとバインバインのすつごい露出度の高いビキ

ニを着るんだろうな。

女の色気全くなしの私の水着姿を見て、ユーキは褒めてくれたけど、

やっぱり姉さんみたいなのが良かったんじゃないのだろうか？

そう思うとげんなり。

海行ってる間は楽しかったけど、思い返して見ると、どうしてもそ

んなふうに思えてしまう。

とはいえ、太ろうとしても、太れないのが現実。

そんなに食べれないし、自分なりに頑張っても、肉がつかない。

ダイエットを頑張ってる人達にしてみたら、羨ましいだろうけど、

こっちはこっちで、胸がなくて、すっごく悩んでるんだ。きっと、胸がある人には分らないんだ、この気持ちは。特に、姉さんなんか。

腰とか腕とかは、めっちゃ細いくせに、胸はでかい。

メロンだし。

あまりにも、恵まれすぎだ。

というか、羨ましすぎ。

私にも、あれぐらいあったら、きつときわどいビキニ着て、ユーキを悩殺できたんだらうけどな。

まあ、仕方ない。

とりあえず、別の方法で、悩殺してやろう。

8月19日

今日は映画を観に行った。

とりあえず、カップルらしく恋愛映画を見たけど、正直つまらない。なんていうか、あれ。

リアリティがなさ過ぎて、感情移入が出来ない。

そもそも、演技も下手すぎ。

とりあえず、配役は顔で選んだとしか思えないぐらい、美形ばかりがずらつと並んでる。

正直、金返せって感じ。

ユーキも同じらしく、しきりにダメだしばかりしてた。

それが、逐一私と同じだから、ちよつと嬉しかった。

そういう意味では、この映画デートはありだったのかもしれない。

8月23日

祭りに行った。

昔、ちっちゃい頃に行った事はあるけど、正直覚えてない。だから、初体験と同じ。

で、いろいろと見回ったけど、正直な感想、すっごくおもしろかつ



た。

別に、何かしたわけじゃないし、露天の食べ物だって、そんなにおいしいわけでもない。

でも、すつごく楽しかった。

そして、最後の花火も良かった。

二人並んで座って見てただけど、すつごく感動。病室に居たときも、たまに見てたけど、全然違う。

迫力とかもそうだし、肌を感じる空気も違う。

それに、隣にはユーキもいる。

すつごく楽しかった。

まあ、帰り際に、キスしてくれたのも、もちろん、それに入ってるけど。

ユーキとのキスは、まあ、何度かした。

したけど、あれ。

いつまで経っても、慣れない。

てか、すつごい恥ずかしい。

ありえないぐらい恥ずかしい。

でも、それは、きっとそれぐらい好きって事なんだと思う。

いつでも、私にとつて、ユーキとのキスは新鮮で、幸せで、いつもどきどきしっぱなし。

それが溢れ出てきちゃうほど、好きってこと。

うん、私は、ユーキの事が好き。

大好き。

8月31日

とりあえず、夏休み最終日。

というわけで、朝から晩まで遊びまわった。

行き先は遊園地。

とりあえず、絶叫系は一回までと決められ、後、お化け屋敷も禁止された。

正直、ちょっと痛い。

絶叫系が一回だけなんて、つまないし、何より、お化け屋敷がダメとか、ありえない。

せっかく、びっくりしたふりして、それこそ、半泣きの演技でもして、しがみつこうと思ってたのに。

やっぱり、こういう場所でのそういうのは、大事だと思う。

それに、うん、やっぱり、ユーキも喜んでくれるだろうし。

そりゃ、肉付き悪いし、胸もないけど、それでも、自分の彼女が抱き付けてくれるんだ、喜ばないわけがない。

もしかしたら、それで意識して、そのまま、とかだって十分ありえるし？

いや、さすがに、遊園地で、っていうのは、なしだけど、ユーキの家なら、オツケだし……

で、何考えてるんだろう。

もしかして、欲求不満？

てか、付きあって一ヶ月で、エッチってやっぱり早いんだろうか？

そっいう経験もないし、話もしたことないから、わかんないけど。

てか、女の子だったら、普通は考えないのかな？

どうなんだろう。

まあ、でも、恥ずかしい事ではあるんだろうけど。

うん、まあ、超恥ずかしいよね。

……うわ、やばい、すっごい恥ずかしい。

ちよっと、想像しただけで、もうダメだ、失神しそう。

それぐらい、恥ずかしい。

ま、まあ、まだ、付き会って一ヶ月も経ってないし、早いよね。

うんうん、考えないでおこう。

それに、今は遊園地の話し。

一回だけだけど、絶叫乗った。

すっごい楽しかった。

まあ、ユーキは、しんどそうだったけど。

うーん、やっぱり、男子は絶叫系苦手だって聞いたけど、ホントだったんだ。

まあ、その後は、定番のコーヒークップとかメリーゴーランドとかのときは、恥ずかしそうだったけど、割かしはしゃいでた。

うん、きつとユーキも楽しんでくれてたはず。

最後に、観覧車に乗った時は、すつごく満ち足りた顔してたし。

観覧車……

うわ、恥ずかしい事思い出したし。

うん、恥ずかしいよねえ。

まさか、自分も同じ事するとは思わなかったわ。

いや、まあ、でも、恋人だしね？

いいじゃないかと、思うのよ、私は。

うん、昔の私だったら、もう大爆笑だったろうけど、今の私的にはありね。

ちょうど頂上に来た時に、キスっていうのは。

バカみたいだけど、すつごくときどきしたし。

頂上だから、他には何も見えないし、見える景色は、全部独り占めなんだか、幸せ過ぎて、舞い上がっちゃうっていう感じなんだろう。普通なら、恥ずかしいと思ってしまう事を、あっさりとやっちゃったし。

でも、うん、恥ずかしいけど、後悔はしてない。

いい思い出。

すつごく楽しかった。

また、行きたいな。

てか、今年の夏休みはホント楽しかった、海や祭り、遊園地。すつごく楽しかった。

また、行きたい。

また、来年の夏も、今年の夏みたいであって欲しいな。

## 第十七話 愛の日記

「つつ」

思わず、僕は、日記を閉じた。

決して、叶わなかった願い。

それがそこにあつた。

彼女に次はなかった。

次の夏はなかった。

もう一度海やお祭りや、遊園地に行く事は出来なかった。

最初から、それは決まっていた。

決まっていたから、僕は、出来るだけ、たくさんの予定を詰め込んだ。

残された時間が、あまりにも少なかつたから。

彼女が退院する前に、僕は聞かされた。

でも、不思議と、それを聞いても、驚かなかつた。

分かつていた事だつた。

奇跡はない。

あまりにも長すぎる闘病。

心のどこかで、思っていた。

彼女は不治の病で、長くはないのかもしれないんじゃないのか。

だから、鈴穂さん達は、一生懸命に奏穂と向き合ってるんじゃないのか。

そう考えていたから、だから、彼女が長くはないと言う事を聞いても、ショックであつたのは、ショックだったけど、それほど、大きいものではなかった。

「まずっ」

とりあえず、気を紛らわせようと、コーヒーを飲んだけど、すっかり冷えてしまったそれは、とても飲めたものじゃない。

「新しく淹れるか」

休憩にもちようどいいだろう。

多少、根つめ過ぎてるような気がしないでもない。

付き合い始めてから夏休み終了まで。

一ヶ月間の日記を全部読んだんだ、多少目も疲れてきている。

コーヒーを淹れるついでに、目薬でもさしておこう。

キッチンでコーヒーを淹れなおし、ついでに目薬をさす。

途端に、目にじわりじわりとしみこんでくる。

なんていうか、傷口に消毒液をたらしたときと同じような痛み。

どうやら、そうとう負担をかけてみたいだ。

とはいえ、ここから、一番重要なところ。

夏休み明け。

そこから、僕達の環境はがらりと変わったんだ。

ただのバカみたいな恋愛から、ひどくありふれた悲恋物のラブロマ  
ンスのような恋愛に。

9月6日

予感があった。

多くなった投薬。

逆に少なくなった診察。

そして、いきなりの退院。

覚悟はしていた。

日記には書かなかったけど、不安はあった。

もう、私が長くないんじゃないのか、と。

だから、聞いても、言われても、すんなり理解できた。

一月足らずで、私は死ぬと言う事を。

9月7日

ユーキは私の命が短い事を知っていた。

知っていて私と一緒に居てくれた。

一緒に海に行って、お祭りに行って、遊園地に行った。

辛いはずだ。

絶対に辛いはず。

自分の恋人が、一ヶ月も持たずに死んでしまう。

それを受け止めて、今まで通りに振舞う。

普通に笑って、傍に居る。

それが、辛くないはずがない。

なのに、それをしてみせる。

不安だった。

もしかすると、そんなに私の事を好きじゃないんじゃないのか。  
どうでもいいんじゃないのか。

だから、そんなふうに、普通に振舞えるんじゃないのか、と。  
でも、彼の手が私に触れるたび、彼が抱きしめてくれるたびに、  
そんな疑惑は薄れていく。

彼は、『人アレルギー』。

誰にも触れられない。

触れる事がストレスで、苦痛。

そんな苦痛を我慢してまで一緒に居るだろうか。

どうでもいい相手にたいしてまで、そこまで頑張るだろうか。

そう思ったら、彼を信じてしまう。

信じられる。

だからこそ、別れを切り出すべきなんじゃないだろうか。

彼を傷つけないためにも。

彼にこれ以上辛い思いをさせないためにも。

9月16日

散々迷った挙句、今日別れを切り出した。

切り出そうとすればするほど、どんどん苦しくなる。

自分の思いに潰されそうだった。

彼と触れ合うたびに、このままでいたいと願いたくなる。

自分が長生きできない事は分かっていた。

だから、諦めていた。

幸せになんてなれない、そんな月並みの事を考えてた。  
奇跡はない。

どんなに願っても、私の病気が治る事はない。

だから、いつか来る死の時。

そのときを迎えても、私はきっと大丈夫だろうと思ってた。  
だけど、今は違う。

今は、怖い。

死ぬのが怖い。

そして、何よりいや。

彼ともっと一緒にいたい。

ユーキともっといろんな事がしたい。

また、海に行ったり、遊園地に行ったり、花火を見たり、クリスマス  
のイルミネーションやお正月に振袖とか来て、一緒に初詣とか、  
バレンタインに渡すときに、ちょっとときどきしたりとか、そんな  
事がしたい。

そんな当たり前の事がしたい。

だけど、もう、私にはそんな時間はない。

そんな猶予は残されてない。

私に残されたのは、一月にも満たないという短い時間。

あまりにも短すぎる時間。

なんで、私なんだろう。

どうして、私なんだろう。

私は何をしたって言うんだろう。

私は、何も悪い事なんてしていないのに。

ただ、普通に生きてきただけなのに。

それなのに、どうして私が死なないといけない。

どうして、私とユーキが引き離されないといけない。

どうしてなの？

死にたくない。

もつと生きたい。

もつともつと、ユーキと一緒にいたい。  
いたいのに。

ユーキは私からの別れ話を拒絶した。

どんなに辛くても、悲しくても一緒にいたいって言ってくれた。

未来が暗くても、今を大切に生きたいと、私を大切にしたい、他の誰よりも、私の事が好きだから、そう言ってくれた。

嬉しかった。

このままじゃいけないことぐらい分かってる。

絶対に、ユーキを傷つける。

だけど、もう、私には出来ない。

ユーキが好きだから。

ユーキと一緒にいたいから。

だから、もう言えない。

私は、彼と、一緒に居る。

死ぬまで、絶対に。

9月20日

身体がだるい。

思ったように動かない。

夏休み明けから、確かに辛かったけど、今はそれ以上。

他人の身体のように思えてくる。

だから、病院に戻った。

戻った、っていういい方も変。

そのついで、というか、家族の目を盗んで、弁護士に会った。  
会って、尊厳死の書類を作ってもらった。

もう長くない。

ここまで来ると、自分でも良く分かる。

私は死ぬ。

どんなに祈っても、願っても、それは変わらない。



そして、ユーキともお別れ。

辛い。

すっごく辛い。

大好きだもん、辛くないはずがない。

今だって、泣いてる。

9月のページはほとんど涙で濡れてる。

書くたびに泣いてた。

悲しくて、辛くて、寂しくて、ずっと泣いてた。

今日、ユーキが言ってた。

『前、奏穂が残されるほうが絶対に辛いって言ってたけど、それは、違うと思うんだ。僕は、どちらも辛いと思う。残すほうも、残されるほうも』

私は、幾度となく謝った。

辛い思いをさせて、悪いと思った。

だけど、彼は、それを優しく包み込んでくれた。

私を抱き締めて、そう言ってくれた。

救われた気持ちだった。

辛かった、苦しかった。

彼を残して死んでしまうことが、彼を傷つけてしまうことが。

だから、そう言ってくれた事が嬉しかった。

私を慰めてくれたことも、そして、私の気持ちを分かってくれたことも、全部が嬉しかった。

本当に、良かった。

ユーキに会えて、本当に良かった。

姉さんに、本当に感謝しないといけない。

こんなに素敵な人に会わせてくれて、一緒にいさせてくれて、感謝しないといけない。

だから、私は綺麗に死にたい。

ずるずると生き残って、皆を苦しめたくない。

死ぬときはあっさりと死んで、後に引くことなく逝きたい。

だから、お願いした。

尊厳死を。

延命措置をされることなく、あっさりと死なせて欲しいと。皆を早く解放させて、あげたいと。

9月28日

日記を書くのが、今日で最後かもしれない。

そう思いつつ、最近は書いてる。

握力がどんどん弱くなって、ペンが持てなくなってきた。いつだろうか。

最近は、そんな事を考える。

皆には、悪い気がするけど、そう思ってしまう。辛い。

もう、注射を、点滴をどれだけ差しても、痛みは引かない。

まるで、なぶり殺しにされてるかのような辛さ。

早く死にたい。

そう思ってしまうほど。

だけど、そう思っても、ユーキが触れるたびに、消えていく。

ユーキと一緒にいたい。

ユーキにもっと触れていたい。

そう思えて、もっと頑張りたいと思う。

なんだか、前と言ってる事が違うような気がする。

早く死んで、皆を解放させたいと言ってたのに、なのに、今の私は、まだ生きたいと思ってる。

嫌な女だと思う。

本当に、しつこい女だと思う。

だけど、そう思ったびに、それに気が付いたかのように、ユーキがぎゅっと私を抱き締める。

抱きしめて

『大好きだよ』

そう言ってくれる。

それだけ、私は救われる。

私は、楽になる。

ユーキ、ありがとう。

私を好きになってくれて、ありがとう。

私を大切にしてくれて、ありがとう。

私は、幸せだった。

私は、本当に幸せだった。

他の人に比べたら、きっと短いけれど、本当に私は幸せだった。とても優しい温もりを感じられた。

それは全部ユーキのおかげ。

ユーキが居たから、いてくれたから、私はそう思えた。

こうして、幸せな気持ちでいられる。

ありがとう。

本当にありがとう。

だから、もし、私が死んだら、私がいなくなったら、他の誰かと幸せになって欲しいと思う。

そりゃ、他の女にユーキが取られると思うと、すっごくいや。すっごくむかつくし、許せない。

だけど、でも、それは、きっと私の我侭。

ユーキにだって、幸せになる権利はある。

ううん、幸せにならないといけない。

こんなに、私を幸せにしてくれたんだから、幸せになってもらわないと困る。

だから、もし、私が死んだら、やっぱりすっごく嫌だけど、それでも、ユーキの幸せを願うから、他の誰かと幸せになって欲しい。

なんなら、ルリでもいいかも。

美人だし、私と違って、スタイルもいいし、性格はちょっときつめだけど、心根はすっごく優しいし、頭の回転もいい。

それに何より、ユーキの事、好きみたいだし。

必死になつて隠してるけど、ばればれ。

普通、人のろけ話なんて、好き好んで聞こうとしない。

なのに、ルリは、それを嬉々として聞いているし、ユーキの名前が出る度に、過剰に反応してる。

それで、気づかないほうがおかしい。

まあ、でも、仕方ない。

私が言うのもなんだけど、ユーキはホントにすっごく素敵な彼氏だし。

ルリが好きになるのも仕方がない。

それに、きつと、傷ついたユーキを癒してくれるだろう、ルリなら。うん、今度、お願いしちゃおうかな？

なんちゃって。

で、これじゃ、なんだか、遺書みたいだな。

まだまだ、死ぬ気はないんだけどな。

とりあえず、明日も、日記を書けるといいな。  
一杯一杯、ユーキへの愛情を書けたらいいな。  
なんちゃって。

やっぱり、それは、恥ずかしいな。

私のキャラじゃないし。

でも、うん、ユーキへの感謝の思い、もっとたくさん書きたいよ。

## 第十七話 愛の日記（後書き）

恋から愛へ。

慈しみのある思いだからこそその愛の日記。  
て、臭いか？（あ

## 第十八話 辿り着いた答え

それが、最後の日記。

それ以降、書かれていない。

違う、書けなかったんだ、奏穂は。

次の日は、ペンが握れても、まともに字が書けなかった。

一生懸命に字を書こうとしても、字にならなかった。

最後の日記の筆跡だって、ぐにゃぐにゃ。

一生懸命なんとか字にしているのが分かった。

だからこそ、あんな事を、あそこまでたくさん書いたんだろう。

自分の思いを書き残したんだろう。

そして、その次の日、字にすらならなかったから、どんなに一生懸命に書いても、字にならなかったから。消して、書くのを止めたんだろう。

思いを全て、心の中に閉じ込めたんだろう。

そして、それから数日後、確かな日にちは、覚えてないけれど、確かに、彼女は、ペンも握れないほど、衰弱していた。

ペンも握れない、動けない、そんな生活は、いったいどんな物なんだろう。

こうして、今、僕が当然のようにやっている動作、それが出来ない世界なんてどんなものなんだろう。

全く、予想が出来ない。

分からない。

でも、奏穂の世界はそうだった。

ただ、話すことしか出来なかった。

身体を動かすことなんて、ほとんどできなかった。

だけど、それでも、彼女は笑顔だった。

触れ合う度に、幸せそうだった。

だから、僕も笑えたんだ。

だから、僕も幸せだった。

どんなに別れが辛くても、悲しくても、それでも、僕は、彼女と一緒に居られた。

彼女が、いよいよ危険になったとき。

そんなときに、彼女は言った。

『ねえ、ユーキ、お願い。延命措置はしないで』

作られた笑顔の中には、罪悪感が、ありありと浮かんでいた。

当然だ、彼女だって、自分が言っている事が、どれだけひどいことなのか、良く分かっている。

分かっている、それを言っているんだ、辛くないわけがない。

『死ぬときは、綺麗でいたい。無様な姿をさらしたくない』

それは、彼女の誇り。

最後まで彼女らしくあるためのプライド。

『それに、もう、これ以上、皆を苦しめたくないの、だからお願い』  
そして、それ以上の優しさ。

だから、僕は頷いた。

ちゃんと書類もある。

だから、僕がそれを認めようと思った。

それを認めてやらないといけないと思った。

最後まで彼女らしくあるために、彼女の誇りを傷つけないために。

そして、最後まで、彼女は彼女らしく誇りに満ちた姿で逝った。

その後、どんなに、苦しかったとしても、僕はそれを後悔していない。

絶対に、間違っていたなんて思わない。

例え、犯罪だろうと、人殺しだろうと、僕はそれを否定しない。

裁かれるべきだと思っても、犯してはならない罪だと思っても、それでも、その選択肢を選んだ事を間違ったとは思わない。

彼女のためにも。

日記を閉じて、布団の中にもぐりこむ。

答えは、見つけた。

僕は、奏穂の願いを叶えたい。

そして、僕自身も、救われたい。

だから、答えは出た。

ひどくありふれて、情けない答えだけど、それでも、間違っていないような気がする。

僕がたどり着いた答えは。



## 第十九話 二人の未来

天高く馬肥ゆる秋。

すがすがしい風と、暖かい日の光が降り注ぐ。

素直に気持ちいいと言える天気。

「好きです、付き合ってください」

こんな日こそ、告白日和。

答えが出てから、数日後。

とりあえず、告白日和な日を待った。

待ち続けた。

けど、そんな、小説のように都合のいい展開なんてなくて、伸び伸びになって、本日金曜日。

ちなみに、明日、明後日と、文化祭。

おかげで、学校中てんでこ舞いになってるんだけど、そんなの僕には関係ない。

とりあえず、クラスはかなり大忙しだけど、今日まで頑張ったから、今日ぐらい許してもらおう。

「こんな忙しい時に呼び出したと思ったら、何よ、それ」

半眼で睨まれた。

どうやら、僕は自由だけど、彼女はそうじゃなかったらしい。

モテモテな彼女は大変だ。

「奏穂の日記を読んだ。それで、答えが出たんだ。君に甘えさせてもらおうって」

でも、今の僕は無敵だった。

不敵だった。

神だった。

「さつきは、ああいったけど、正直、たぶん、今はルリっちよりも瑞穂さんの方が好きなんだ。瑞穂さんと触れ合って、暖かさを感じられた。でも、ルリっちだったら、そうはならない」

言いたい放題。

何、この人、何様のつもり？

つか、死ねばいいのに。

そんな事言われても仕方ないだろう。

告白の時に言うような言葉ではない。

だけど、偽らざる気持ち。

これは、別にイエスをもらうための告白ではない。

踏み出すための告白なんだ。

「触れ合えない。触れ合った瞬間に拒否反応が出ると思う。瑞穂さんよりもひどく。でも、未来は分からない。瑞穂さんには負けるけど、それでも、僕は君の事を気に入ってるし、好きなんだよ？」

綺麗な人は基本的に好きだし、それに、奏穂が認めた子だ、性格はいい。

妄信なんてするつもりはないけれど、それでも、奏穂の見る眼を信じている。

僕を選んでくれた眼を。

だからこそ、彼女が認めたルリを認めたい。

もちろん、僕自身の眼だってある。

僕が奏穂を殺したとき、彼女は本当に怒っていた。

心の底から怒っていた。

だからこそ、信じられる。

彼女が良い人だと。

素敵な人なんだと。

見た目だけじゃない、心の中まで素敵な人だと言う事が分かった。

だから、彼女に賭けたい。

彼女と傍にいたい。

そう思ったんだ。

「だから、付き合って欲しい」

そして、だからこそ、出た答え。

悩みぬいて出した答え。

迷いはない。

これが正しいと信じている。

そして、信じている。

彼女の答えが、僕が思っているものだと、望んでいるものだと、心の底から信じているんだ。

空を見上げる。

青く澄んだ空。

綺麗な青空。

何にも縛られてない自由の証。

奏穂、ようやく僕も解放されそうだよ？

幸せを求められそうだよ？

今までありがとう。

僕も君と一緒に居られて良かったと思っている。

幸せだったと思っている。

例えば、夢い幻のような時間だったとしても、僕はそれを幸せだと思っている。

だから、ありがとう。

そして、さようなら。

もう僕の思いが君に向かう事はない。

君を忘れない。

絶対に何があっても、忘れやしない。

深く深く愛した君の事を忘れる事なんて出来ない。

だけど、さようなら。

君が願ったように、僕は自分の幸せを探すから。

自分の幸せを手にするから。

だから、さようなら。

たまにだけ、君に会いに行くよ。

さようなら。

「ユーキの気持ちは嬉しいわ」

彼女が口を開く。

名前は、もう呼び捨て。

もう瑞穂さんへの配慮がいらないから。

「昔は、懂れてたし、好きだった」  
知ってる。

奏穂の日記には、そう書いてあったんだから。

僕の事を好きだと。

「今も、嫌いじゃないし、全てを知った今、憎しみも何もない。だから、救いたいと思った」

僕に手を差し伸べてくれた。

全てを知ったからこそ。

全て。

「でも……」

不意に入る逆接の接続詞。

それまでの言葉を否定する言葉。

「それは無理よ。私は、ユーキと付き合えない。そんな言い方されたんじゃ、オーケーなんて出せるわけがない」  
振られた。

そう、僕は振られた。

「だいたい、貴方だってそんな気はないんでしょう、私と付き合う気なんかは」

だけど、それは予想の範疇。

僕は、幸せを求める。

だからこそ、この行動が必要だった。

彼女に振られることが必要だったんだ。

「まあ、今はね。ルリっちも知ってるんだろう、奏穂の気持ち？」

「普通に呼び捨てでいいわよ、もう。その質問なら、イエスよ。鈴穂さんに遺書を渡されたわ、私宛の」

中々、僕の勘も鋭いようだ。

用意周到な奏穂の事だ、きっと何かを残していると思った。

今、僕が持っている日記も、彼女が僕に残したものだし。

苦しむだろう、僕のために残した日記。

僕を救うために、僕を引っ張り上げるための日記。

だからこそ、鈴穂さんは僕にくれたわけだし。

そうでなければ、一緒に燃やしたはずだ。

だから、ルリにもそういうものがあると思っていた。

ルリは、全てを許してくれた、受け入れてくれた。

だけど、全てを許せるのは、全てを受け入れられるのは、他の誰でもない、奏穂の言葉がなければ、きっと無理だったと思う。

奏穂の言葉が、思いじゃなければ、きっとルリの心には届かないから。

他の誰かでは、ダメなんだ。

僕が、幸せを求められたように、答えが見つかったのが、奏穂のおかげのように、ルリにとっても、そうなんだと思う。

だから、たぶん、ルリも全てを知っていたからこそ許せたんだと思う。

救おうとしてくれたんだと思う。

「だから、告白しようと思ったんだ。今は、好きじゃない。だけど、未来は分らない。その未来にかけるために」

これだけの女っぷりを発揮した彼女だ、きっと僕は好きになると思う。

さっき言ったように、彼女は素敵な人なんだ、未来はきっと好きになるだろう。

だからこそ、ここで告白しておかないといけない。

奏穂の事をおざなりにしたままなんて言うのは許されない。

きっと、二人とも永遠に苦しみ続ける。

今は、もう僕に対する恋愛感情が薄くなっているルリ。

だけど、奏穂との約束もある。

その二つに揺れ動く。

そして、僕もまた、奏穂の願いと自分の思いに揺れる。

そのせいで、二人して、永遠に奏穂から解放されずに、もがき苦し

み続ける事になる。

そんな事を願っていないはずの奏穂の願いが、僕達を苦しめる。  
だからこそ、ここで告白する。

しかも、絶対に振られるように。

それは、ここで全てを終わらせるための物。

本当のところ、奏穂が何を願っているのかは、分からない。

だけど、僕は、彼女の日記の中で、日記を読んでも、浮かんできた。彼女は、もしかすると、僕と一緒にいるのは、僕が恋人として選んでいいと思っているのは、ルリだけなんじゃないのだろうか、と。

自分が認める、許せるルリだけなんじゃないのだろうか、と。

近くて遠い、親友ルリ。

鈴穂さんや瑞穂さんではなく、ルリ。

でも、それは、奏穂の選んだ道。

彼女が残した道。

僕達を選んだ物ではなくて、選ばれる道。

そんなんじゃない、きっと僕達は、いつでもどこでも、ずっとずっと奏穂の事を考えてしまう。

ルリがどうなのかは知らない。

だけど、僕が望むのは普通の幸せ。

バカみたいな幸せ。

だからこそ、奏穂に縛られているような、彼女が残した道を選べない。

例え、ルリの事を好きになっても、それは、自分の気持ちじゃないと意味がない。

時間をかけて、ゆっくりと好きになっていかなければいけない。

そうして、初めて、僕達は奏穂を関係なしに、奏穂を殺した事、失った事から解放されて、向き合えると思う。

「全く、考える事は同じね？」

彼女は笑う。

彼女もきつと、そんな答えが出ていたんだろう。

大切だからこそ、大好きだからこそ、もう奏穂の事に縛られないように。

大好きな人の事を、大切な思い出として、胸のアルバムにしまう。それは、冷たいとか、そういうんじゃない。

大切だからこそ、これ以上彼女を繋ぎ止めない、彼女のために、自分も幸せになる。

あまりにも早く死んでしまった事を、悔いにさせないために。自分の中にいる奏穂に。

「私も、答えは同じ。ユーキとの未来に賭けてみたいと思ってるわ。だから……」

彼女は、笑う。

笑って、続ける。

「明日、明後日の文化祭、一緒に回らない？」

## 第十九話 二人の未来（後書き）

これにて第三章終わりです。

次回エピソード。

ただ、かなり焦ってやったので、誤字があるかも……  
って、結局間に合わなかったかw w



## エピソード（前書き）

最終話です。

## エピソード

文化祭当日は、穏やかに、そして、綺麗に晴れた。

僕達は、そんな麗らかな天気の中、いろんなところを見て周った。

一緒に買い食いしたり、展示物を眺めたり、ゲームをしたり。

それは、どこにでもいるような男女の当たり前前の行動だった。

どこにも、特別なものはない。

ただ、流れる時間は自然で、穏やか。

どこにも、刺激的でスリリングな物はない。

僕達は、奏穂が死んでから、初めて普通になれた。

「で、その手は何ですか？」

そう思ってた。

けれど、やっぱり、現実には優しくない。

やっぱり、ルリと一緒にいると、男子からの嫉妬の眼や、やっかみをうけるし、実力行使に打って出ようとする輩までいる。

だから、当然、あちこちに逃げることになるわけ。

そして、逃げた先が、ここ。

保健室。

「いや、まあ、どうも、ここ最近ご無沙汰で、身体が疼くよね。一回どう？」

まあ、どうなるかなんて予想できそうだけど、仕方ない。

逃げ場所はここしかないわけだし。

「いやです」

それに、ちゃんと拒否すればいいだけのこと。

今までのことを考えると、心苦しいけれど、それは彼女も同じ。

お互い、傷つき、そして、答えを出した。

僕が救われたように、彼女も救われたんだ。

だから、変に気を使う必要はないし、むしろ余計な事。彼女を侮辱することだ。

「まあ、いいじゃない」

「良くない！！てか、脱がすな」

するすると脱がしにかかる彼女。

何度も何度もしてきたことだ、手馴れた様子で、脱がされていく。

「いいじゃない。今フリーなんでしょ？だったら、問題ナツシングでしょ？」

しかも、彼女ももう僕も奏穂の事からは解放されてる事を知ってる。

相変わらず、『女性恐怖症』も『人アレルギー』は残ってる。

だけど、それもいつか消えるだろう。

『女性恐怖症』は元々奏穂が原因で出来た物。

失う事の恐怖から生まれたもの。

『人アレルギー』だって、奏穂と付き合って、奏穂を好きになっただけは、関係なかった。

どんなに触れ合っても、僕は、彼女にアレルギーはでなかった。

穏やかな気持ちでいられた。

だから、もう僕は、それに恐れる必要はない。

だけど、それは、相手にも同じ事が言えるわけで、今まで、奏穂の事があって、及び腰だった彼女も、堂々と参戦できると言う事になる。

「だから、いただきまぶっ！！」

むちゅっときスをしようとしたところで、救いの手。

誰かなんていわなくても分かる。

ルリだ。

「先生？こういうところで、こんな事しちゃいけないって常識ですよ？ユーキも、むざむざと食われそうにならないの」

瑞穂さんを引き剥がすと、そう説教すると、ついでに僕も嗜める。ぐうの音も出ません。

まあ、自業自得だもの、言えませんとも。

「さ、外もそろそろ落ち着いてきたから、出ましよう？このまま、ここに居たら、欲求不満の校医に食われちゃうわよ？」

「オケ。食われるのは勘弁だから、さっさと行こうか」

でも、やっぱり助けてくれた事、それから、ちゃんと様子を探ってくれていた事を感謝。

僕は、彼女の手を取って、立ち上がる。

横には恨めしそうな眼をした瑞穂さん。

でも、その瞳にうつる感情は別。

それは、安堵。

心の底からの安堵。

「まあ、頑張りなさい」

苦笑気味に彼女はそういう。

何を頑張るのか。

今、目の前にある男子からの総攻撃だろうか。

それとも、これからの僕達の未来だろうか。

「はい。ありがとうございます」

そんなのは分からない。

だけど、どちらだろうと、それとも、それ以外の事だろうと、何だ

ろうと僕は、僕達は頑張らないといけない。

生きている限り、それは絶対に必要なことだから。

「そう思うなら、今度、私の部屋に遊びにぶっ」

「そついうお誘いはお断りです」

彼女に対する感謝はある。

答えが出るまでの間、僕が僕でいられたのは、僕が崩れずにいられ

たのは、彼女がいたおかげ。

彼女と一緒にいたから。

だから、ものすごく感謝してる。

けれど、それとこれとは、やっぱり別問題。

「さ、行こっか？」

僕は、取った彼女の手を握り、歩みだす。

これから、始まる、また、今までとは違った新しい生活へと。

「ああ、そんなドSな夕貴もすてぶっ！！」

まあ、その道のりは前途多難そうだけど。

小さな部屋に少年と少女が居た。

これは、僅かな時間しか与えられなかった少女のお話から始まったお話。

始まりの少女のお話は、少女には救いを、少年には絶望を与えた。

少年は、絶望し、深い深い闇の中に堕ちていった。

そして、始まりの少女のお話から始まった次のお話。

そこでは、女性と少年と少女が複雑に絡み合った。

絡み合い、女性は新たな道を、少年と少女は救いを手に入れた。

女性は、嘆きながらも、悲しみながらも、それでも前へと進む。

少年と少女は、初めて出会った小さな部屋で、かくれんぼ。

始まりの少女と少年と少女。

彼らの願いは、確かに叶った。

例え、最初の願いの形から変質していたとしても、叶ったことには変わりはない。

「やれやれ、ルリの鬼さ加減を見たら、絶対ファンはドン引きだよなあ」

「うっさい!!」

「いったいなあ。全く、喜ぶのはドMぐらいじゃないのか？」

「なら、あんたもドMの仲間入りね」

小さな願い。

それは、決して特別な物ではなく、ひどくありふれた当たり前の物。何にも縛られることなく、ただ、純粹に呑気にバカみたいに生きたい。

そんな願い。

「まあ、でも、いい女だよ、ルリは」

少年は笑う。

バカみたいに、呑気に笑う。

「まあ、あんたも、割といい男よ、ユーキ」

少女も笑う。

穏やかだけど、平和ボケしたように笑う。

それが、合図。

終わりの合図。

ひどくありふれたお話の終わりの合図。

そして、新たに始まるお話しの合図。

誰もが歩む普通の生活のお話しへの始まりの合図。

だから、静かに幕を。

二人のこれからを見守るために。

## エピソード（後書き）

とりあえず、あとがきはまた後で書きます。

## あとがき

幾分、遅くなりましたが、はじめまして、作者の霧野ミコトです。  
まあ、はじめまして、じゃない方もいらっしゃるかもしれませんが、  
さて、今回の作品。

どんと恋ですが、とりあえず、偶然、というよりも、想定外の事が  
重なって、出来上がった作品です。

本来は、短編で済ませるつもりだったものです。

ただ、追加設定を入れて行く内に、ストーリーがどんどん膨らみ、  
こうして、割かし長くなったわけなんです。

おかげで、ところどころで、言い訳染みたようなモノローグがあっ  
たりしたわけなんです。

まあ、本当に帳尻合わせに奔走してましたからね。

鈴穂のことしかり、瑞穂の事しかり、奏穂のことしかり、瑠璃の事  
しかり、と。

でも、その分、楽しかったですが。

思い通りに行かないほうが、僕個人としては書き甲斐がありますし  
ね。

ちなみに、続編は、書く気は、今のところございません。

せいぜい、短編をちらほら書くかも、という程度でしょうね。

ここから先は、自分の中では出来上がって居ますが、正直、小説に  
するほどのエピソードはありませんし。

ドラマティックなことはないですし、したくありませんから。

それに、私自身としては珍しいですが、この完成の形で納得してま  
すし。

もちろん、技術的に見たら、まだまだなんでしょうが、それでも、  
今の僕に出来る最高のエンディングだと思っていますので、続きを  
期待してる方がいたら申し訳ありませんが、諦めてください。

今回は、今作品を読んで戴いてありがとうございます。



作家の霧野ミコトでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9976c/>

---

どんと恋

2010年10月8日14時28分発行